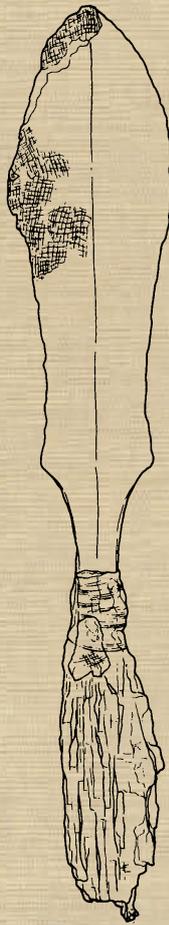


高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第25集

長畝古墳群

高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1996.3

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

長畝古墳群

高知自動車道(南国～伊野)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1996.3

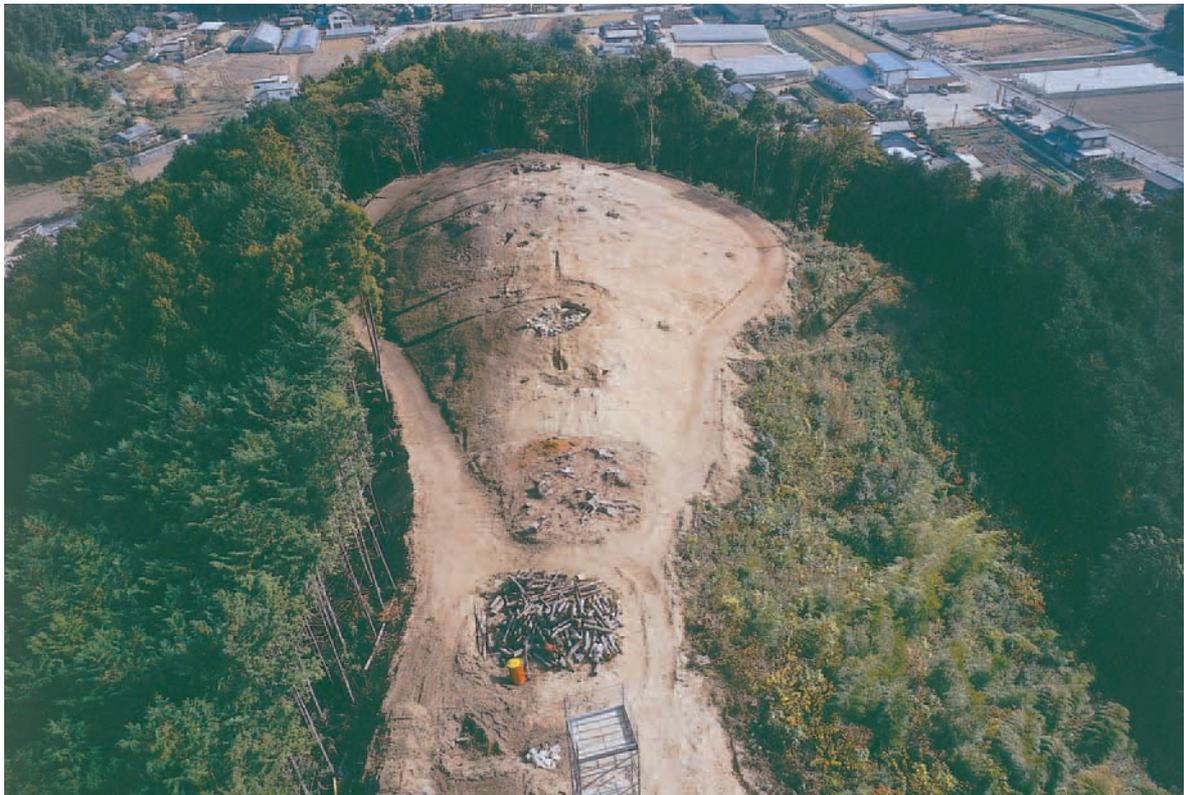
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



長畝古墳群 (東上空より)



長畝古墳群 (西上空より)



長畝古墳群 (西山頂より)



長畝4号墳 (西より)



1号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳) 1 (南より)



1号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳) 2 (南より)



小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)



1・2号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 検出状態(南西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 1 (北東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 2 (北西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 3 (南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 4 (北西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 5 (南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 1 (東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 2 (東より)



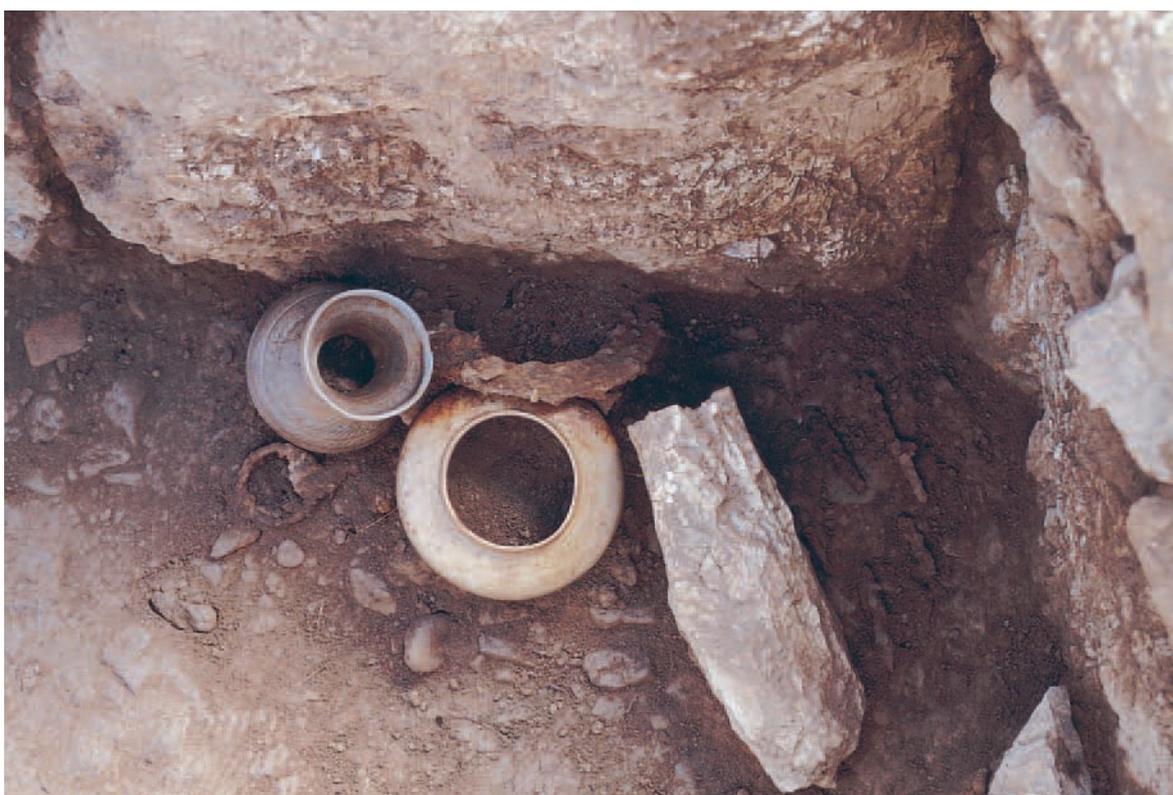
横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 3 (西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 4 (西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 5 (北東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 6 (北より)



1・2号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳)完掘状態(南より)



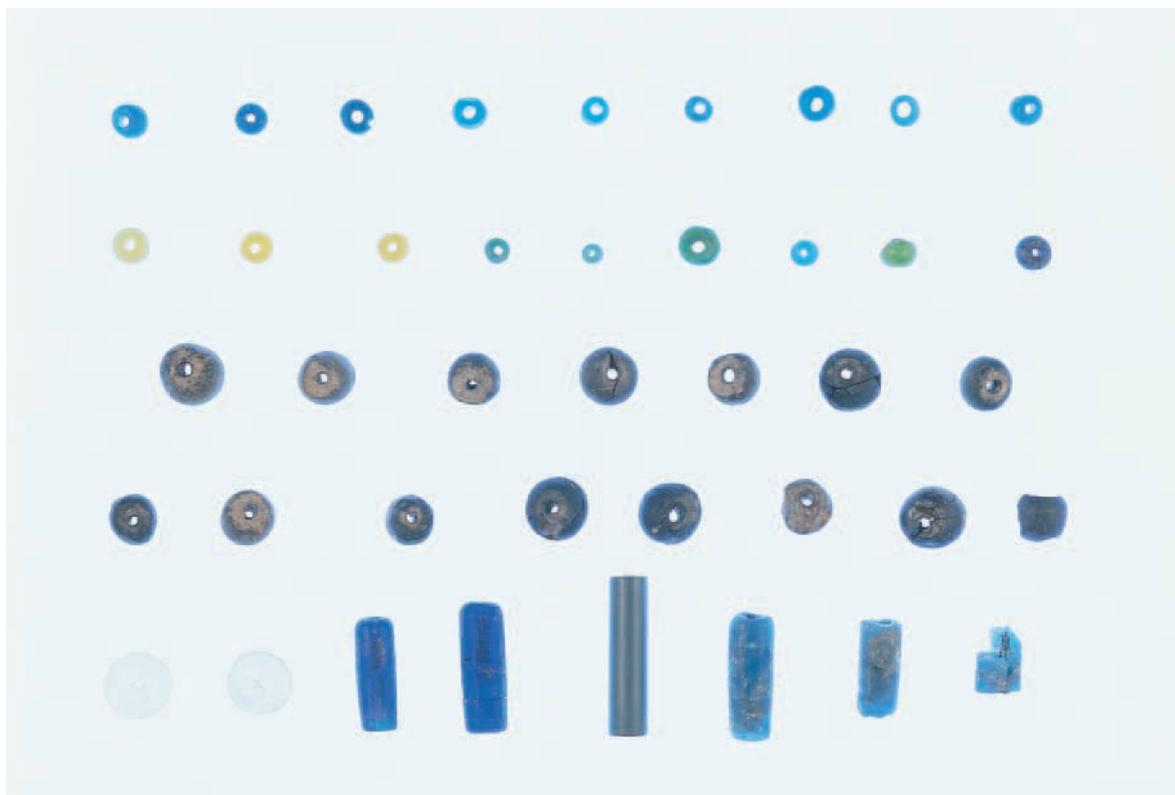
横穴式石室(長畝4号墳)完掘状態(北西より)



長畝2号墳 1号主体部出土鉄剣 (2)



長畝2号墳 1号主体部出土鉄剣 (3)



横穴式石室(長畝4号墳)出土装身具(玉類)



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯(106・107)



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯(108・109)



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯(110・111)



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯(112・113)



横穴式石室(長畝4号墳)出土有蓋高杯(114)



横穴式石室(長畝4号墳)出土台付碗(115)



横穴式石室(長畝4号墳)出土短頸壺(116)



横穴式石室(長畝4号墳)出土短頸壺(117)



横穴式石室(長畝4号墳)出土短頸壺(118)



横穴式石室(長畝4号墳)出土直口壺(119)



横穴式石室(長畝4号墳)出土広口壺(120)



横穴式石室(長畝4号墳)出土広口壺(121)



横穴式石室(長畝4号墳)出土長頸壺(122)



横穴式石室(長畝4号墳)出土長頸壺(123)

序

道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受け、当埋蔵文化財センターの主要な事業として、平成4年度から取り組んできた高知自動車道建設（高知～伊野）に伴う発掘調査は平成8年度が最終年度となります。

調査の中心であった南国市は県下最大の遺跡数を誇り原始から中世に至る間高知の要所であり、発掘調査においても予想以上の遺構、遺物が出土し、高知県の考古学地図を塗り替え、歴史の空白部分を埋める資料も数多く確認され、大きな成果をあげています。

今回報告する長畝古墳群並びに長畝遺跡からも数多くの貴重な資料が確認されました。特に、長畝古墳群を構成する長畝2～4号墳の各主体部はすべて県下初のものであり、長畝2号墳に副葬されていた鉄剣、長畝3号墳の小竪穴式石室、長畝4号墳の初期横穴式石室等々高知県の歴史を解明する上では欠くことのできないものばかりです。今後、高知自動車道建設に伴う調査は伊野町以西に及びさらなる考古学資料を提供するものと考えられます。当センターでもそれに対応すべく調査員の増員並びに養成にも力を注ぐ所存です。

本書は平成5年度に実施した長畝遺跡並びに平成6年度に行った長畝古墳群の本調査の報告であり、各方面で活用され、文化保護と研究の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御指導いただいた石野博信先生、文化庁の文化財調査官をはじめ御教示いただいた先生方、並びに調査に多大な御理解と御協力いただいた道路公団高松建設局高知工事事務所、南国市教育委員会、地元定林寺地区の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成8年3月29日

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

所長 原 雅彦

例言

1. 本書は、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが日本道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受けて平成5年度に実施した長畝遺跡と平成6年度に実施した長畝古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化庁並びに高知県教育委員会の指導のもと(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターが調査主体となり実施した。
3. 平成5年度の長畝古墳群の試掘調査は(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター第1班長山本哲也の指導のもと調査員松村信博・江戸秀輝、長畝遺跡の発掘調査は同センター第1班長山本哲也の指導のもと調査員池澤俊幸がそれぞれ担当し、平成6年度の長畝古墳群の本調査は同センター主任調査員廣田佳久が担当し、同センター調査員池澤俊幸の補助を得て行った。調査の事務、総括は、平成5・6年度(調査業務)は同センター総務課長井上幸雄、主幹三浦康寛、平成7年度(整理)は同センター総務課長田岡英雄、主幹吉岡利一、主事石川馨が当たった。
4. 本書の執筆は第Ⅱ章を池澤俊幸、それ以外を廣田佳久が行い、現場写真は各担当が撮影した。遺物写真および編集等は廣田佳久が行った。
5. 遺構については、SK(土坑または土坑墓)、P(ピット)等の略号も併用して表示している。遺構番号は各遺跡ごとの通し番号とした。また、掲載している遺構の平面図の縮尺はそれぞれに記しており、方位は(公共座標におけるGN)である。なお、この付近(国土基本図Ⅳ-HE72・82)の真北はGNに対し西に $0^{\circ}10'37''$ 、磁北はGNに対し西に $6^{\circ}18'1''$ 振っている。
6. 遺物については、原則として土器は縮尺1/3、鉄器類では鉄鍬が縮尺1/2、鉄剣が縮尺1/4、その他が縮尺1/3、装飾品類は原寸で掲載している。ただし、中に縮尺を変更しているものは、それぞれに縮尺を記している。図版番号は、各遺跡ごとの通し番号で写真図版の番号と一致している。
7. 平成6年度に行った長畝古墳群の本調査では、公共座標をもとにトラバース測量した上で、地形に合わせてグリッドを設定して行った。また、標高については工事に設定した第3級水準点を基準として実施した水準測量の成果を使用し、海拔高を示す。
8. 調査に当たっては、日本道路公団高松建設局高知工事事務所、高知県教育委員会、地元定林寺地区の方々に全面的協力をいただいた。また、下記の方々に洗浄、注記、接合、復元、遺物の実測、トレースなど整理作業で協力していただき、同センターの諸氏から貴重な助言を得た。記して感謝する次第である。
中西純子 西内宏美 小松経子 矢野雅 松下冬美 宮地留美
9. 発掘調査中、特に徳島文理大学石野博信教授、文化庁文化財保護部記念物課西田建彦・坂井秀弥両文化財調査官に貴重な助言をいただいた。記して謝意を表す。
10. 出土遺物は、長畝遺跡が「93-18NN2」、長畝古墳群が「94-3NN」と注記し、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターに保管している。

目次

第 I 章 序章

1. はじめに	1
2. 確認調査	1
(1) 長畝遺跡	1
(2) 長畝古墳群	2
3. 遺跡の地理的, 歴史的環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 歴史的環境	3

第 II 章 長畝遺跡

1. 調査の契機と経過	7
(1) 契機と経過	7
(2) 調査日誌抄	7
2. 調査の概要	7
(1) 調査の方法	7
(2) 調査の概要	9
3. 遺構と遺物	9

第 III 章 長畝古墳群

1. 調査の契機と経過	11
(1) 契機と経過	11
(2) 調査日誌抄	12
2. 調査の概要	16
(1) 調査の方法	16
(2) 調査の概要	17
3. 遺構と遺物	22
(1) 長畝2号墳	22
(2) 長畝3号墳	31
(3) 長畝4号墳	34
(4) その他の遺構	53

第 IV 章 考察

1. 長畝古墳群の築造時期とその意義	59
--------------------	----

2. 長畝2号墳の副葬品について	62
3. 長畝4号墳の須恵器について	64
4. まとめ	66

挿図

Fig. 1	南国市位置図
Fig. 2	長畝古墳群・遺跡と周辺の遺跡分布図
Fig. 3	長畝遺跡調査区及び遺構平面図
Fig. 4	調査区セクション図
Fig. 5	SK-1 出土弥生土器
Fig. 6	SK-1・2
Fig. 7	遺跡の範囲と工事区域図
Fig. 8	調査風景 1
Fig. 9	調査風景 2
Fig.10	調査風景 3
Fig.11	記者発表風景
Fig.12	現地説明会 1
Fig.13	現地説明会 2
Fig.14	長畝古墳群トラバースポイント配置図
Fig.15	長畝古墳群調査前地形測量図
Fig.16	長畝古墳群トレンチ設定図
Fig.17	Aトレンチ基盤層セクション図
Fig.18	長畝2・3号墳平面図
Fig.19	長畝2号墳1号主体部, 2号主体部
Fig.20	1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣 1
Fig.21	1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣 2
Fig.22	1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鍬
Fig.23	1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鎌, 鉄製鍬・鋤先, 鉄斧, 刀子
Fig.24	1号主体部(長畝2号墳)出土土師器
Fig.25	長畝3号墳主体部(小竪穴式石室)平面図
Fig.26	長畝3号墳主体部(小竪穴式石室)平面・立面図
Fig.27	長畝3号墳サブトレンチセクション図
Fig.28	長畝2・3号墳主体部完掘状態平面図
Fig.29	小竪穴式石室(長畝3号墳)出土鉄鍬
Fig.30	長畝4号墳平面図
Fig.31	長畝4号墳主体部(横穴式石室)平面図

- Fig.32 長畝4号墳主体部(横穴式石室)平面・立面図
 Fig.33 長畝4号墳主体部(横穴式石室)副葬品出土状態
 Fig.34 長畝4号墳主体部(横穴式石室)完掘状態平面図
 Fig.35 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 1
 Fig.36 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 2
 Fig.37 横穴式石室(長畝4号墳)出土馬具(轡), 鉄鎌, 鉄製鍬・鋤先, 鉄斧, 刀子
 Fig.38 横穴式石室(長畝4号墳)出土玉類(管玉, 練玉, ガラス小玉, ソロバン玉)
 Fig.39 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯, 台付碗)
 Fig.40 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(短頸壺, 直口壺, 広口壺, 長頸壺)
 Fig.41 長畝4号墳不整形土坑出土須恵器(杯蓋, 杯身)
 Fig.42 長畝4号墳墳丘周辺部出土須恵器(杯蓋, 杯身, 壺)
 Fig.43 土坑平面図(SK-1~9)
 Fig.44 SK-1~10
 Fig.45 南国市東崎遺跡出土鉄製品

表

- Tab.1 長畝古墳群・遺跡と周辺の遺跡地名表
 Tab.2 トラバース測量座標成果一覧表
 Tab.3 管玉, 練玉, ガラス小玉, ソロバン玉計測表
 Tab.4 土坑計測表
 報告書抄録

図版

- 巻頭図版 1 長畝古墳群(東上空より)
 長畝古墳群(西上空より)
 巻頭図版 2 長畝古墳群(西山頂より)
 長畝4号墳(西より)
 巻頭図版 3 1号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳) 1(南より)
 1号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳) 2(南より)
 巻頭図版 4 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
 1・2号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
 巻頭図版 5 横穴式石室(長畝4号墳)検出状態(南西より)
 横穴式石室(長畝4号墳) 1(北東より)
 巻頭図版 6 横穴式石室(長畝4号墳) 2(北西より)
 横穴式石室(長畝4号墳) 3(南東より)
 巻頭図版 7 横穴式石室(長畝4号墳) 4(北西より)

- 横穴式石室(長畝4号墳) 5 (南東より)
- 巻頭図版 8 横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 1 (東より)
横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 2 (東より)
- 巻頭図版 9 横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 3 (西より)
横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 4 (西より)
- 巻頭図版10 横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 5 (北東より)
横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品出土状態 6 (北より)
- 巻頭図版11 1・2号主体部(長畝2号墳)・小竪穴式石室(長畝3号墳) 完掘状態(南より)
横穴式石室(長畝4号墳) 完掘状態(北西より)
- 巻頭図版12 長畝2号墳1号主体部出土鉄剣(2)
長畝2号墳1号主体部出土鉄剣(3)
- 巻頭図版13 横穴式石室(長畝4号墳) 出土装身具(玉類)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯
- 巻頭図版14 横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯(106・107)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯(108・109)
- 巻頭図版15 横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯(110・111)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯(112・113)
- 巻頭図版16 横穴式石室(長畝4号墳) 出土有蓋高杯(114)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土台付椀(115)
- 巻頭図版17 横穴式石室(長畝4号墳) 出土短頸壺(116)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土短頸壺(117)
- 巻頭図版18 横穴式石室(長畝4号墳) 出土短頸壺(118)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土直口壺(119)
- 巻頭図版19 横穴式石室(長畝4号墳) 出土広口壺(120)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土広口壺(121)
- 巻頭図版20 横穴式石室(長畝4号墳) 出土長頸壺(122)
横穴式石室(長畝4号墳) 出土長頸壺(123)
- 長畝古墳群試掘調査
- PL. 1 調査前試掘トレンチ(西より)
試掘トレンチ完掘状態(北より)
- PL. 2 試掘トレンチ鉄剣出土状態(東より)
試掘トレンチ鉄剣出土状態(南より)
- 長畝遺跡
- PL. 3 調査前全景(東より)
調査前全景(西より)
- PL. 4 調査区全景(北上空より)

- 調査区全景(南上空より)
- PL. 5 SK-1セクション(南より)
弥生土器出土状態
- PL. 6 SK-2セクション(東より)
SK-2(東より)
- 長畝古墳群
- PL. 7 調査前全景(西より)
調査前樹木伐採後全景(西より)
- PL. 8 トレンチ全景(西より)
A・D・Eトレンチ(東より)
- PL. 9 遺構検出状態(西より)
遺構検出状態(西より)
- PL.10 遺構完掘状態(西より)
遺構完掘状態(南上空より)
- PL.11 バンク除去後遺構完掘状態(西より)
バンク除去後遺構完掘状態(西より)
- PL.12 小竪穴式石室(長畝3号墳), 1号主体部(長畝2号墳) 検出状態 1 (西より)
1号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳) 検出状態 2 (西より)
- PL.13 1号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
1号主体部(長畝2号墳) セクション(南より)
- PL.14 1号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳) 1 (南より)
1号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳) 2 (南より)
- PL.15 1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳) 完掘状態(西より)
- PL.16 1号主体部(長畝2号墳) 完掘状態(西より)
1号主体部(長畝2号墳) 完掘状態(南より)
- PL.17 2号主体部(長畝2号墳) セクション(西より)
2号主体部(長畝2号墳) 完掘状態(西より)
- PL.18 1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(北上空より)
1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
- PL.19 小竪穴式石室(長畝3号墳) 検出状態(西より)
小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)
- PL.20 長畝3号墳サブトレンチセクション 1 (南より)
長畝3号墳サブトレンチセクション 2 (東より)
- PL.21 長畝3号墳副葬品(19・20) 出土状態
小竪穴式石室(長畝3号墳)(南より)

- PL.22 小竪穴式石室(長畝3号墳)北壁(南より)
小竪穴式石室(長畝3号墳)南壁(北より)
- PL.23 小竪穴式石室(長畝3号墳)東壁(西より)
小竪穴式石室(長畝3号墳)西壁(東より)
- PL.24 小竪穴式石室(長畝3号墳),1・2号主体部(長畝2号墳)完掘状態(南より)
小竪穴式石室(長畝3号墳)完掘状態(南より)
- PL.25 長畝4号墳主体部検出状態(西より)
長畝4号墳不整形土坑検出状態(西より)
- PL.26 横穴式石室(長畝4号墳)検出状態(北東より)
横穴式石室(長畝4号墳)検出状態(南西より)
- PL.27 横穴式石室(長畝4号墳)セクション(南東より)
横穴式石室(長畝4号墳)(北西より)
- PL.28 横穴式石室(長畝4号墳)(北東より)
横穴式石室(長畝4号墳)(南東より)
- PL.29 横穴式石室(長畝4号墳)副葬品(須恵器)出土状態 1(南東より)
横穴式石室(長畝4号墳)副葬品(須恵器)出土状態 2(南東より)
- PL.30 横穴式石室(長畝4号墳)副葬品(鉄製鋤先,馬具,須恵器)出土状態(北東より)
横穴式石室(長畝4号墳)副葬品(鉄鏟,鉄製鋤先,馬具,須恵器)出土状態
- PL.31 横穴式石室(長畝4号墳)副葬品(須恵器)出土状態
長畝4号墳主体部 1(北西より)
- PL.32 長畝4号墳主体部 2(北西より)
横穴式石室(長畝4号墳)羨道トレンチセクション(北西より)
- PL.33 横穴式石室(長畝4号墳)羨道東壁(北西より)
横穴式石室(長畝4号墳)羨道西壁(北東より)
- PL.34 横穴式石室(長畝4号墳)奥壁(北西より)
横穴式石室(長畝4号墳)玄門部(南東より)
- PL.35 横穴式石室(長畝4号墳)西側壁(北東より)
横穴式石室(長畝4号墳)東側壁(南西より)
- PL.36 横穴式石室(長畝4号墳)(南西より)
横穴式石室(長畝4号墳)(北東より)
- PL.37 長畝4号墳 1(西より)
長畝4号墳 2(西より)
- PL.38 長畝4号墳 3(東より)
長畝4号墳 4(南上空より)
- PL.39 横穴式石室(長畝4号墳)完掘状態(北西より)
横穴式石室(長畝4号墳)完掘状態(南東より)

- PL.40 横穴式石室(長畝4号墳)完掘状態(南西より)
横穴式石室(長畝4号墳)完掘状態(北東より)
- PL.41 長畝4号墳不整形土坑遺物出土状態(東より)
長畝4号墳不整形土坑セクション(北より)
- PL.42 長畝4号墳不整形土坑,柱穴完掘状態(西より)
長畝4号墳不整形土坑,柱穴完掘状態(東より)
- PL.43 SK-1・9検出状態(北西より)
SK-3~6検出状態(西より)
- PL.44 SK-7~9検出状態(西より)
SK-10検出状態(北より)
- PL.45 SK-1(北西より)
SK-1完掘状態(北西より)
- PL.46 SK-2・9検出状態(西より)
SK-2・9(西より)
- PL.47 SK-3~6(西より)
SK-3~6完掘状態(東より)
- PL.48 横穴式石室副葬品(21)出土状態,横穴式石室副葬品(23)出土状態,横穴式石室副葬品(30)出土状態,横穴式石室副葬品(40)出土状態,横穴式石室副葬品(58)出土状態,横穴式石室副葬品(管玉等)出土状態,横穴式石室副葬品(練玉等)出土状態,横穴式石室副葬品(ガラス小玉,ソロバン玉等)出土状態
- PL.49 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣
- PL.50 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣
- PL.51 1号主体部(長畝2号墳)出土土師器
横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(高杯)
- PL.52 横穴式石室(長畝4号墳)出土馬具(轡)
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄製鍬・鋤先
- PL.53 横穴式石室(長畝4号墳)出土装身具(玉類)
横穴式石室(長畝4号墳)出土管玉
- PL.54 横穴式石室(長畝4号墳)出土練玉
横穴式石室(長畝4号墳)出土ガラス玉,ソロバン玉
- PL.55 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鍬 1
- PL.56 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鍬 2
- PL.57 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄斧,2号主体部(長畝3号墳)出土鉄鍬(19),横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鍬 1(21)
- PL.58 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鍬 2
- PL.59 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鍬 3

- PL.60 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 4
- PL.61 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 5
- PL.62 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 6
- PL.63 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃 7, 鉄斧
- PL.64 SK-1(長畝遺跡)出土弥生土器(1), 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鏃(10), 鉄鎌(14), 刀子(17), 鉄製鋤・鋤先(15)
- PL.65 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃(24・30・31), 鉄鎌(58), 刀子(61), 銀耳環(64)
- PL.66 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯)
- PL.67 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯)106・107, 108・109, 110・111は副葬時のセット
- PL.68 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯, 台付椀)112・113は副葬時のセット, 106・114, 108・107, 110・113, 112・111は製作時のセット
- PL.69 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(短頸壺, 直口壺, 広口壺)
- PL.70 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(長頸壺), 長畝4号墳不整形土坑出土須恵器(125), 長畝4号墳墳丘周囲からの出土須恵器(125~127, 129)

発掘調査に参加された方々

付図目次

付図1 長畝古墳群土層図(S=1:80)

付図2 長畝古墳群(長畝2~4号墳)全体図(S=1:200)

第 I 章 序章

1. はじめに

本書は、日本道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受け、平成5年度に実施した長畝遺跡並びに長畝古墳群の確認調査と平成6年度に行った長畝古墳群の本調査の結果をまとめたものである。これらの調査は日本道路公団高松建設局高知工事事務所が実施している高知自動車道（南国～伊野）の建設工事に伴い工事予定区域内に所在する遺跡（埋蔵文化財）について遺構等が影響を受けるものについて事前に発掘調査を行い記録保存を図ることを目的としている。

今回の発掘調査の契機となったのは、平成元年度に行われた高知自動車道（南国～伊野）の建設工事に伴う分布調査で古墳が発見されたことによる。発見当時は残存地形が前方後円墳に似ていること（長畝古墳群）から県内では宿毛市平田曾我山古墳について2基目、高知平野では最初の前方後円墳ではないかとみる向きもあった。また、西側の山頂にも古墳の可能性が考えられる部分（本書では長畝遺跡として報告）が認められた。

この結果を受け、日本道路公団高松建設局高知工事事務所と調整したところ、まず、平成5年度に地下レーダー探査を行った上で確認調査を実施することとなった。

地下レーダー探査は、両遺跡について行った。長畝遺跡部分をA地点、長畝古墳群部分をB地点とし、計12測線、測線延長合計211mの地下レーダー探査を実施し、古墳の遺構の存否およびその位置について検討を行った。その結果、まず、A地点では山頂付近に周囲とはやや異なった反射波の高まりがあり、その高まりのほぼ中央部には僅かな窪みが認められた。これは、その反射パターンからみて、遺構の可能性のあるものと考えられた。一方、B地点では、全般的に深さ3～4m程度の土坑状の窪みが散見されており、遺構の可能性のあるものと考えられた。

この結果を基に、それぞれ確認調査を行うこととなった。ただし、長畝古墳群部分については未買収地もあり、調査箇所を限定せざるを得なかった。

なお、発掘調査時点では、今回長畝遺跡としたものが長畝2号墳、長畝古墳群としたものは長畝3号墳と呼称して行った。

2. 確認調査

(1) 長畝遺跡

地下レーダー探査の結果を受けて平成5年7月15日から7月19日にかけて確認調査を行った。調査は山頂部を中心に試掘トレンチ（TR-1～8）を設定して行った。その結果、TR-2の落ち込み状の遺構（SK-1）から弥生土器（Fig.5-1）1点が出土した。それ以外に出土遺物は認められなかったが、原形が復元できる弥生土器の出土から考えて、周辺部にも同様の遺物の存在等が想定されたため本調査を実施することとなった。本調査は平成6年1月6日から3月7日にかけて実施した。

(2) 長畝古墳群

長畝遺跡の確認調査に引き続き、平成5年7月20日から7月22日にかけて試掘調査を実施した。工事予定地の買収の関係上、試掘トレンチが設定できる箇所が限定されたため、TR-1・2を尾根の南東端部に設定して調査を行った。その結果、TR-1から土坑墓とみられる遺構の一部を検出し、発掘したところ短刀、鉄剣、鉄鏃、鉄製鎌、鉄製鋤先、鉄製鍬先、袋状鉄斧、土師器片が出土した。この内、鉄剣は床面直上、鉄斧は埋土中位から出土したという。このような状況からみて、前期古墳の主体部である可能性が高まり、平成6年度に本調査を実施することとなった。

3. 遺跡の地理的、歴史的環境

(1) 地理的環境

長畝古墳群と長畝遺跡は、高知県の中央東部に位置する南国市岡豊町定林寺字長畝の標高約62mの尾根の上に所在する古墳群である。本古墳群が所在する南国市は旧長岡郡の大部分を占め、総面積124.98km²、人口は48,430人(平成8年1月末現在)で県内第2の市部である。地理的には、東経133°37′、北緯33°35′に位置し、東を香美郡吉川村・野市町、北は香美郡土佐山田町、長岡郡本山町、土佐郡土佐町、西は土佐郡土佐山村、高知市の1市4町2村と境を接し、北には四国山地が迫り、南は土佐湾に面する。北部にある笹ヶ峰(標高1,113m)を中心とした山々が連なり、山地以北を嶺北、以南の市街地部分を嶺南とも呼称され、笹ヶ峰から連なる山々は南へ標高を徐々に下げ嶺南では小丘陵となり、平野部と接する。この北部の山間部は、地質的には中央構造線の南に広がる外帯に属しており、北から南へと地層が形成されている。本

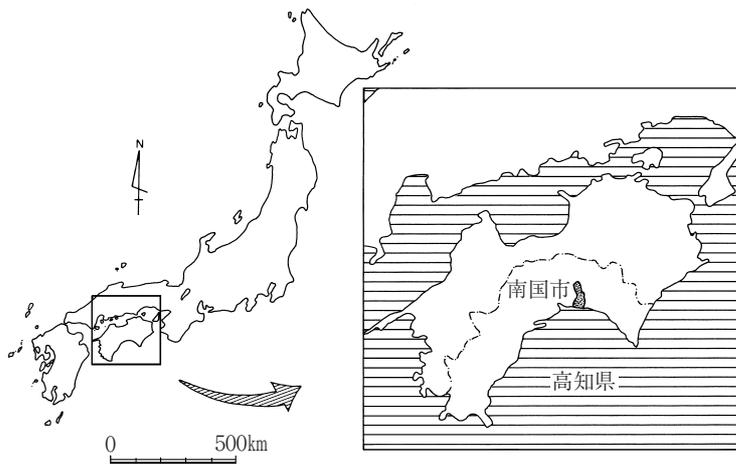


Fig.1 南国市位置図

古墳群はその小丘陵上に築造されており、眼下には高知平野さらには土佐湾を眺望することができる。一方、市の東部の隣町村とは平野で繋がり物部川を境とし、西北部では北から延びてきた小丘陵、西南部は平野で高知市と繋がっている。

県内最多の遺跡数を誇る当市を育ててきた地理的条件には、河川の存在が大きく、東

部には物部川が南流し土佐湾に注ぎ、当市が所在するその右岸には広大な扇状地が形成され、さらに遺跡の立地に適した自然堤防が散見され、香長平野と称される沖積平野が広がる。北東部の山間には穴内川が東流し、中部の平野部を国分川がその支流を合わせて南西流して高知市へ至っている。この国分川は土佐国衙や国分寺を擁し、古代の幹線であった。また、南

部では下田川が東流し、高知市を通り浦戸湾に注いでいる。

このような地理的条件の中、地勢は北側の小丘陵から平野部は徐々に標高を下げ海岸部に至っている。その中で、平野部には陣山、三畠山、折坂山、吾岡山、高間原山などの点在する独立丘陵と南部には南嶺と称され、稲生などで小丘陵地帯を形成する地域がある。また、海岸部分では東西に細長い砂丘がみられる。

今回調査対象となった岡豊町は、平野部の北端に面した小丘陵地帯にあり、県内では古墳が最も多く所在する箇所、平野部への展望が開けた古墳の立地に適した地域である。

(2) 歴史的環境

当遺跡のある岡豊町は、県下最大数を誇る舟岩古墳群や県内最大の円墳である小蓮古墳を擁する地域であると同時に古墳数でも他地域を圧倒している。このことは言い換えれば、それに見合った集落が存在したことに他ならない。また、南国市は県内の考古学の宝庫と言え、遺跡数は293遺跡を数え、2番目の土佐山田町(196遺跡)を大きく引き離している。時代別で見ると、縄文時代が7遺跡、弥生時代が54遺跡、古墳時代が136遺跡、古代が28遺跡、中世が62遺跡、近世が6遺跡となっている。近世については、現段階ですべてを対象としていないためにその数は少なくなっていることと同時に近世以降現代まで高知市が土佐の中心になっていることも少しは関係しよう。このように遺跡数自体でも他地域とは卓越した状況にある。以下、具体的に時代を追ってみてみることにする。

旧石器時代の遺跡は現在は確認されていないが、南国市と境を接する高間原古墳群中の1号墳の玄室床面からチャート製の細石刃石核が1点単独で出土しており、混入ではあるが周辺部に当時の遺跡の存在の可能性を窺わず資料となっている。

縄文時代は磨製石斧などが単独で発見され遺跡の存在が考えられるものの遺跡数自体は他の時代に比べ少ない。しかし、この数年発掘件数の増加に伴って新たな資料が発見されるようになった。現在最も古いものは、岡豊町小蓮の奥谷南遺跡から前期初頭に位置付けられる羽島下層式土器が発見され、さらに中期末から後期初頭にかけての貯蔵穴が確認された。谷部の低湿地部分に立地しており、今後周辺部からも発見される可能性もあろう。丘陵を挟んだ南側の栄エ田遺跡からは後期の遺物が比較的まとまって出土している。一方、平野部では田村遺跡群の調査で後期の包含層が検出され、磨消縄文を中心とした土器群と共に多量の打鍬が出土しており、当時の立地を考える上で注目されよう。縄文晩期の明確な遺跡は確認されていないが、田村遺跡群から弥生時代初頭の集落が検出されており繋がりが注目される。

弥生時代になると遺跡数とその規模が急激に増加する。広い平野部を有し、立地条件に恵まれているため県内では圧倒的にその数が多く、前期から後期にかけてほとんど絶えることはない。まず、田村遺跡群からは前期初頭に位置付けられる集落跡が確認されている。隣接部分からは前期の早い時期とみられる水田址も検出されている。北側には前期前半の環溝集落跡である西見当遺跡が所在する。これ以降、集落の拡散がみられ、平野部の自然堤防上のみでなく山間にも遺跡が散見されるようになる。中でも大篠遺跡は前期新段階の標準遺跡と

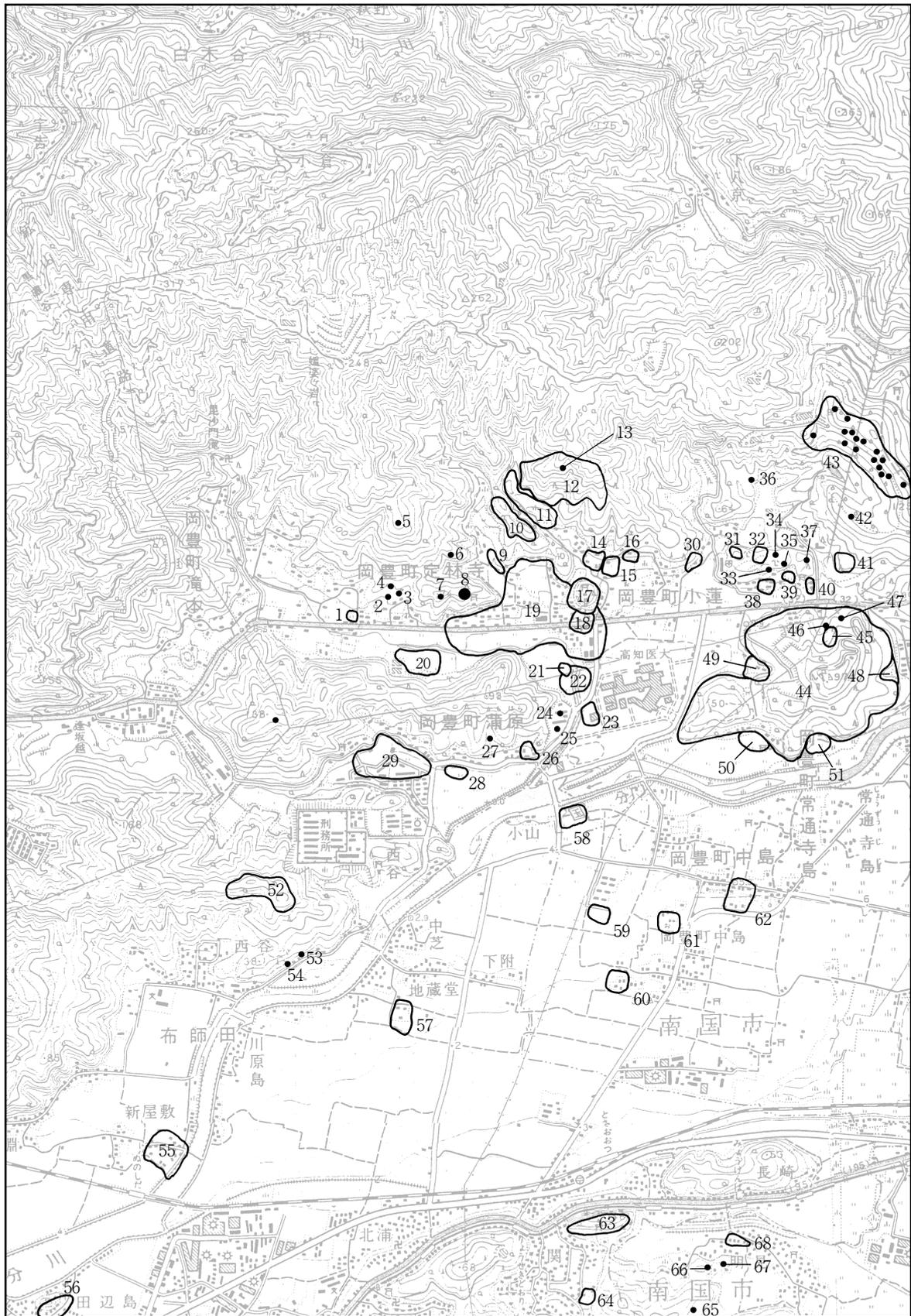


Fig.2 長畝古墳群・遺跡と周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

なっている。田村遺跡群では密度は低くなるも引き続き集落跡が確認され、中期後半から後期前半にかけて再び集落の拡大がみられ、香長平野の拠点集落の様相をみせる。後期後半になると集落の立地は北側の長岡台地上を中心にその縁辺部に移り、東崎遺跡、小籠遺跡など大規模な集落が営まれるようになる。また、岡豊町の奥谷遺跡のように山麓部にも集落を形成するようになる。特に、後期後半の時期は県下の集落の急増が認められ、山間部にも比較的大きな集落が形成されるようになる。しかし、古墳時代の集落跡の確認件数は少なく、古墳時代初めの明確な遺跡は確認されていない。

古墳時代に位置付けられる遺跡の約62%は古墳である。その内の96%は後期古墳に属する。同様に集落跡もその大半が後期に位置付けられる。最も古く位置付けられるものは今回報告する長畝2号墳である。時期的には4世紀後半と考えられる。5世紀代のものとして同じく長畝3号墳と同じ岡豊町に所在する狭間古墳を挙げることができる。6世紀になると長畝4号墳を皮切りに横穴式石室を主体とする古墳が北側の小丘陵上を中心に平野部の独立丘陵上や南嶺にも築造されるようになる。最盛期は6世紀後半から7世紀初頭であり、前述の小蓮古墳(径22～

Tab.1 長畝古墳群・遺跡と周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	滝本遺跡	古墳	24	蒲原山東2号墳	古墳	47	香川五郎次郎親和の墓	中世
2	芝の前1号墳	〃	25	蒲原山東1号墳	〃	48	西谷遺跡	〃
3	芝の前2号墳	〃	26	蒲原屋敷遺跡	中世	49	下野土居城跡	〃
4	芝の前3号墳	〃	27	蒲原山中古墳	古墳	50	天神丸遺跡	〃
5	長畝1号墳	〃	28	土居ノ前遺跡	〃	51	桑名屋敷遺跡	〃
6	野津古墳	〃	29	木ノ下遺跡	〃	52	布師田金山城跡	〃
7	長畝遺跡	弥生	30	岩原谷遺跡	弥生	53	布師田1号墳	古墳
8	長畝古墳群	古墳	31	大岩遺跡	近世	54	布師田2号墳	〃
9	藤ヶ井遺跡	弥生	32	梅ノ本遺跡	弥生	55	布師田新屋敷遺跡	古代
10	奥谷南遺跡	〃	33	小蓮古墳	古墳	56	田部島城跡	中世
11	奥谷遺跡	縄文	34	小蓮2号墳	〃	57	布師田八頭城跡	〃
12	奥谷北遺跡	弥生	35	小蓮3号墳	〃	58	黒領遺跡	弥生
13	唐流の儒墓	近世	36	小蓮4号墳	〃	59	中島町田遺跡	古墳
14	宮の前遺跡	弥生	37	天神の前古墳	〃	60	カヲツ池遺跡	中世
15	小野土居城跡	中世	38	石谷土居城跡	中世	61	中内土居城跡	〃
16	小山田遺跡	弥生	39	天神の前遺跡	古墳	62	中島土居城跡	〃
17	小野古城跡	中世	40	連如寺跡	中世	63	大津城跡	〃
18	千頭屋敷遺跡	〃	41	谷土居遺跡	〃	64	大津金子遺跡	古代
19	栄エ田遺跡	弥生	42	狭間古墳	古墳	65	明見彦山1号墳	古墳
20	大島遺跡	古墳	43	舟岩古墳群	〃	66	明見彦山2号墳	〃
21	窪添屋敷遺跡	中世	44	岡豊城跡	中世	67	明見彦山3号墳	〃
22	清山遺跡	〃	45	長宗我部一族の寺跡	〃	68	竹ノ後遺跡	弥生
23	山崎遺跡	古墳	46	長宗我部一族の墓所	〃	(遺跡の時代は中心となる時代である。)		

28m) や舟岩古墳群 (22基で構成) を代表として80基余りの古墳が築造される。形態的には畿内型の石室がほとんどで、一部に高間原古墳群のような小石室のものも見られる。7世紀前半以降は石室の形骸化や小規模化がみられるようになり、古墳の築造は終焉に向かう。一方、集落遺跡では、土佐国衙跡から6世紀後半の住居跡が比較的まとまって確認されている。これらは先の古墳の立地する小丘陵の山麓部や国分川の沖積平野に立地している。今後は、これらに先行する4～5世紀の集落の発見が重要になってこよう。そして、7世紀後半には白鳳期の比江廃寺が建立され、時代は古代へと移って行く。なお、長畝2～4号墳の周辺には、長畝1号墳、芝の前1～3号墳、野津古古墳などの後期古墳がみられる。

古代は南国市の歴史の中で最も華やいだ時期であろう。すなわち、土佐国衙跡や土佐国分寺を始めとして、その位置付けで議論の絶えない野中廃寺跡、香美郡衙の推定地である大領遺跡、田村荘の荘館跡とみられる田村遺跡群の寺の前地区など主要な遺跡のほとんどは南国市に所在する。正しく土佐の中心となった時期である。最近の調査では、先述の奥谷南遺跡の丘陵上で山岳寺院跡ではないかとみられる遺構や10世紀中ごろの窯跡や土師器の焼成土坑など新たな資料が加わってきている。

中世では戦国期の35余りの山城跡を中心に数多くの遺跡が確認されている。まず、鎌倉期では土佐国衙跡で12～13世紀の遺構が数多く発見され、「府中」のホノギもみられることから引き続き比江の土地が要衝を占めていたものとみられる。ほぼ同時期の岩村土居城跡も注目される。南北朝以降守護代細川氏が入国し、居館である田村城館を築いてからはこの地が土佐の中心となってくる。城下に広がる31ヶ所にも上る溝に囲まれた屋敷跡が発掘調査され、田村遺跡群を象徴する遺構となっている。戦国期には野田土居城跡、広井土居城跡、千早城跡など各地に有力国人の城館が造られる中で、勢力を拡大し、土佐さらには四国を平定した長宗我部氏が岡豊山に居城を築き、山下には屋敷が展開したものとみられ、土佐の中心が岡豊城周辺に移ってくる。

以後、慶長5年(1600)長宗我部氏が滅亡し、山内氏の高知への入城により中世の終焉そして近世へと移り変わっていく。

参考文献

『高知県地名大辞典』 角川書店 1986年

岡本健児・廣田典夫 他『高知県舟岩古墳群』(高知県文化財調査報告書第15集) 高知県教育委員会 1968年

森田尚宏『口ミノヲ谷古墳』日本道路公団・高知県教育委員会 1984年

森田尚宏『蔵本2号墳』(南国市埋蔵文化財調査報告書第8集) 南国市教育委員会 1989年

森田尚宏・松田直則『岡豊城跡』－第1～5次発掘調査報告書－(高知県文化財調査報告書第31集) 高知県教育委員会 1990年

第Ⅱ章 長畝遺跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

長畝遺跡は、平成5年度に実施した事前の試掘調査によってその所在が確認された遺跡である。当初、残存地形から古墳ではないかとの憶測もあったが、試掘調査では落ち込み状の土坑から口縁部を欠くが、ほぼ原形を復元できる弥生土器の出土を確認した以外古墳を裏付ける資料はなく、その状況から弥生時代の墓坑等の存在が推測された。よって本調査はその全容を解明するため同年度に道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受け、県教育委員会の協力を得て実施した。調査対象となったのは、工事によって影響を受ける部分である。調査期間は平成6年1月6日から3月8日までの実働37日間であった。

(2) 調査日誌抄

1994年1月6日～3月8日

- | | |
|--|--|
| 1.6 調査開始。山上の調査地区に至る作業道を設ける。A区中央の山頂に基準杭を設定する。 | 2.1 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 1.7 グリッドを設定すると共に、A区の土層の掘削を行う。 | 2.2～2.14 B区の土層の掘削を行う。 |
| 1.10～12 引き続きA区において土層を掘削し、遺構の検出に努める。 | 2.15 雨天のため現場作業を中止する。 |
| 1.13 雨天のため午後の現場作業を中止する。 | 2.22～23 A区中央部の写真撮影を行う。 |
| 1.14 A区での調査を進める。 | 2.24 A区中央部バンクセクションの実測を開始する。 |
| 1.17 雨天のため現場作業を中止する。 | 2.25～28 A区でのバンクセクションの実測及び写真撮影を行う。 |
| 1.18～20 A区での調査を進める。 | 3.1～4 A区遺構のバンクセクション及びB区のバンクセクションの実測を行う。遺構が検出されているA区を中心に、全体の再精査を行う。 |
| 1.21 山裾から調査地に至る道の整備を行う。 | 3.7 A区遺構の平面実測とレベル実測を行う。 |
| 1.24～27 A区での調査を進める。 | 3.8 産業ヘリコプターによる空撮を行い、調査を完了する。 |
| 1.28 雨天のため午後の現場作業を中止する。 | |
| 1.31 A区での調査を進める。 | |

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

試掘調査の際に弥生土器が出土した山頂部に基準点を設け、それを基に地形に即した任意の座標軸を設定し、調査を進めた。調査区内には、直径数十cmもある伐採した樹木の株が多数残っており、必要に応じ、それらを切断、又は除去しながらの調査となった。

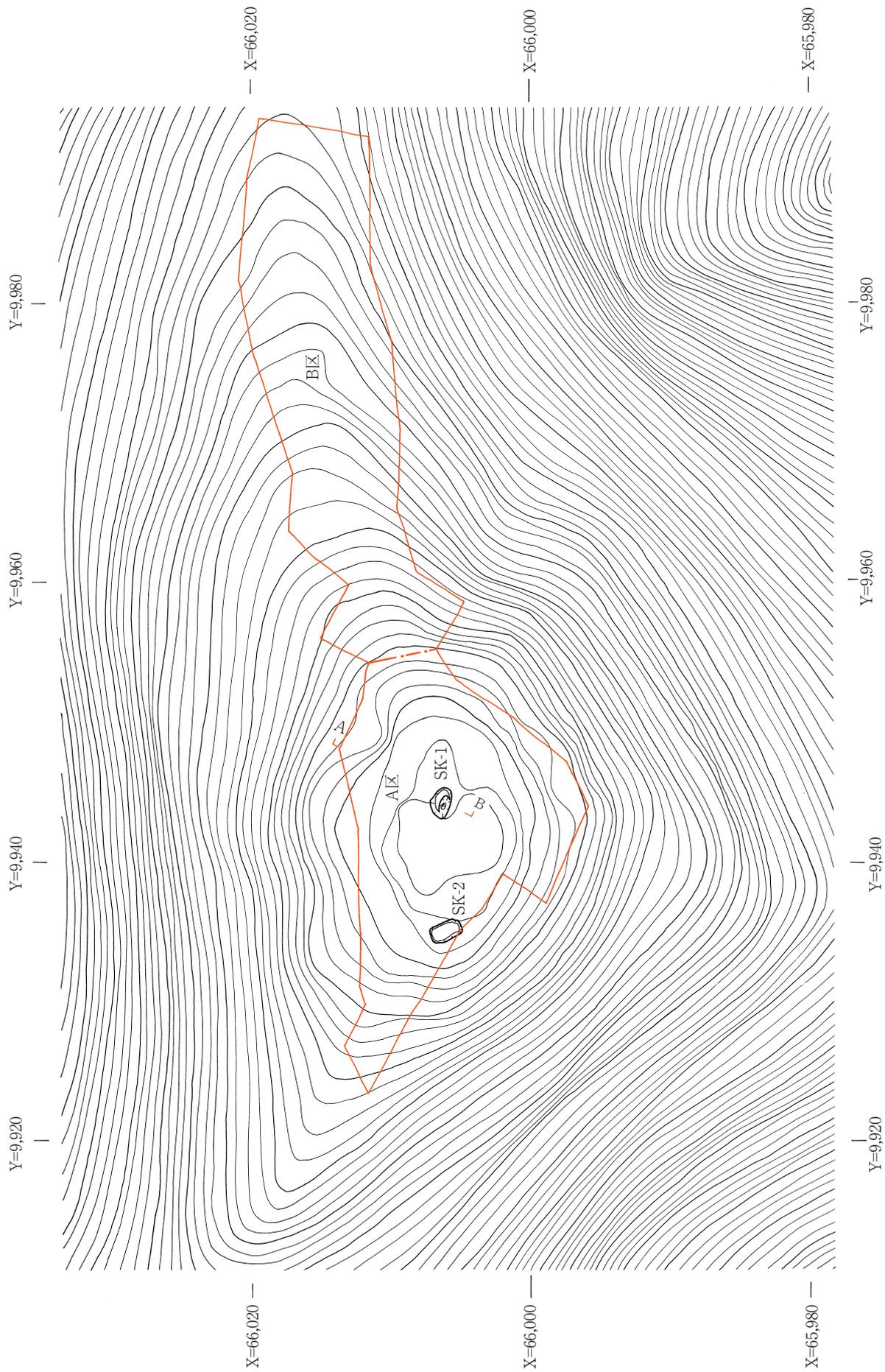


Fig.3 長畝遺跡調査区及び遺構平面図 (S=1:400)

調査区は東西に長いので、西側山頂部付近をA区、東側尾根状部をB区に分けて調査を実施した。調査対象面積は約2,000m²であり、各調査区の発掘調査面積は、A区が273m²、B区が337m²となり、最終的な発掘調査面積は610m²であった。

(2) 調査の概要

A区で土坑2基が検出され、B区は遺物、遺構とも皆無であった。基本層序は、全調査区を通じて、後に記すA区の基本層序とほぼ同じである。遺物包含層は存在せず、特に頂部では、薄い腐植土からなる表土の下は岩盤が露出するところが多く、風化、侵食の著しいことを窺わせる。以下、A区で認められた基本層序について記す。

層序

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 黒褐色粘質土層

第Ⅲ層 岩盤及びその風化土層

第Ⅰ層の表土層は、暗褐色の腐植土で厚さ約2～20cmを測る。第Ⅱ層は調査区下方で厚みを増し、20数cmを測る。無遺物層である。第Ⅲ層の岩質は蛇紋岩で、灰褐色や褐色を呈す。岩盤として残る部分と、土壌化が進んでいる部分は非常に複雑に入り組んでいる。確認された2つの遺構は、この層の上面で検出できた。

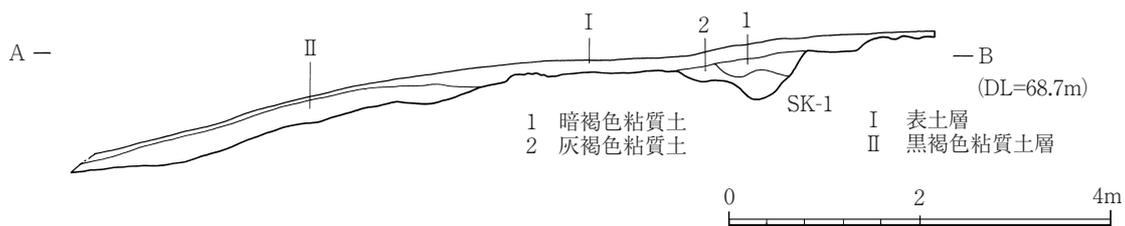


Fig.4 調査区セクション図

3. 遺構と遺物

前述したとおり、B区では遺構、遺物ともに皆無であったので、A区についてのみ記述する。

SK-1 (Fig.6)

A区中央頂部で検出した落ち込み状の不整楕円形土坑で、第Ⅲ層を掘削していた。遺構は、長径2.20m、短径1.40m、深さ0.44mを測る。長軸方向はN-84°17'-Wであった。断面形は舟底状をなす。埋土は二層に分層され、上層は暗褐色粘質土、下層は灰褐色粘質土である。底面から口縁部を欠くがほぼ原形を留めた弥生土器が出土した。

出土遺物

i 弥生土器 (Fig.5-1)

細頸の壺形土器で、頸部から口縁部にかけての上半部を欠き、残存高21.7cm、胴径20.3cm、底径5.4cmを測る。径約6.0cmの細い頸部はほぼ直立し、胴部は緩やかに内湾気味に下り、最大

径は下位1/3にある。胴部最大径を有する部分から大きく内湾し、上げ底の底部に至る。上胴部外面には4条と3条の細い粘土紐に区画された間にタテ方向に細い粘土紐を貼付する。下胴部外面にはタテ方向のヘラ磨き、胴部内面には成形時の指頭圧痕の上を指ナデ調整とヘラナデ調整を施す。ただし、器面は全般に摩耗しており不明瞭な部分が多い。胎土には0.5~3.0mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、内外面とも明黄褐色を呈する。

SK-2 (Fig.6)

A区東部で検出した不整形土坑で、第Ⅲ層を掘削していた。遺構は長辺2.17m, 短辺1.20m, 深さ0.52mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁はほぼ平坦な底面から急角度で上がる。長軸方向はN-19° 30'-Wである。埋土は中央の灰黄褐色粘質土を取り囲むように、黒褐色粘質土と暗褐色粘質土が認められた。これら埋土には小礫が含まれていた。出土遺物は皆無であった。

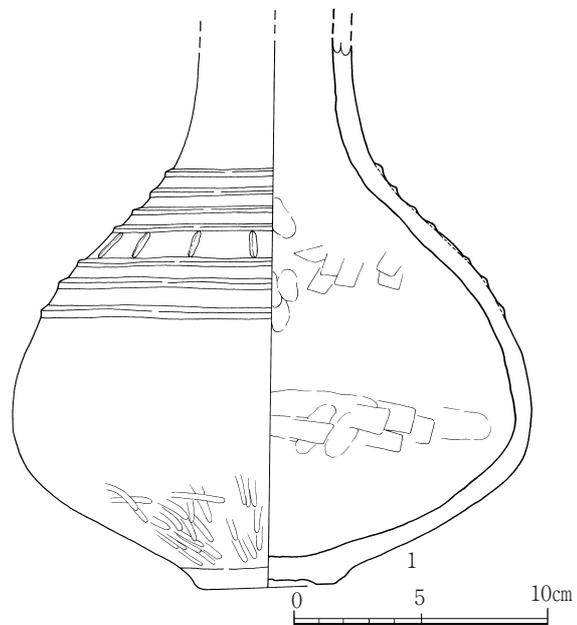


Fig.5 SK-1 出土弥生土器

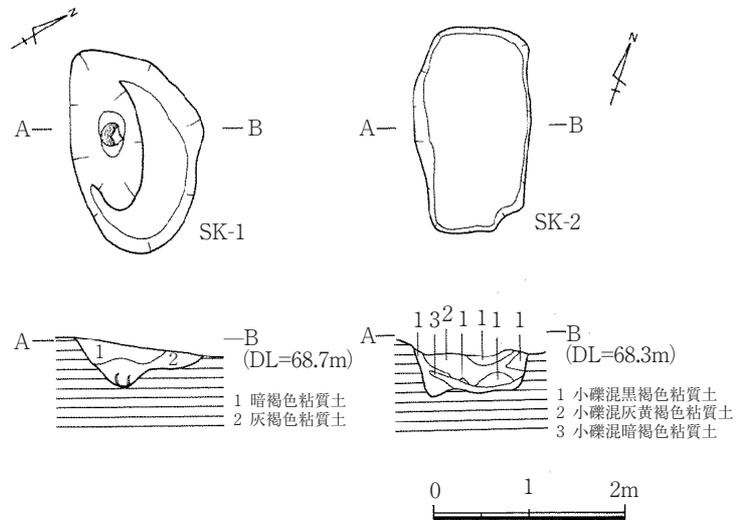


Fig.6 SK-1・2

第Ⅲ章 長畝古墳群

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

調査の契機は、先述のとおり平成元年度の分布調査の際、古墳と考えられる高まりが確認されたことである。それを受けて平成5年度に実施した地下レーダー探査で、土坑状のくぼみが、山頂部で2ヶ所、南側斜面よりで2ヶ所、西側で1ヶ所確認された。この結果と前方後円形の残存地形からして山頂部の土坑状のくぼみは後円部に設置された主体部の可能性があるのではな

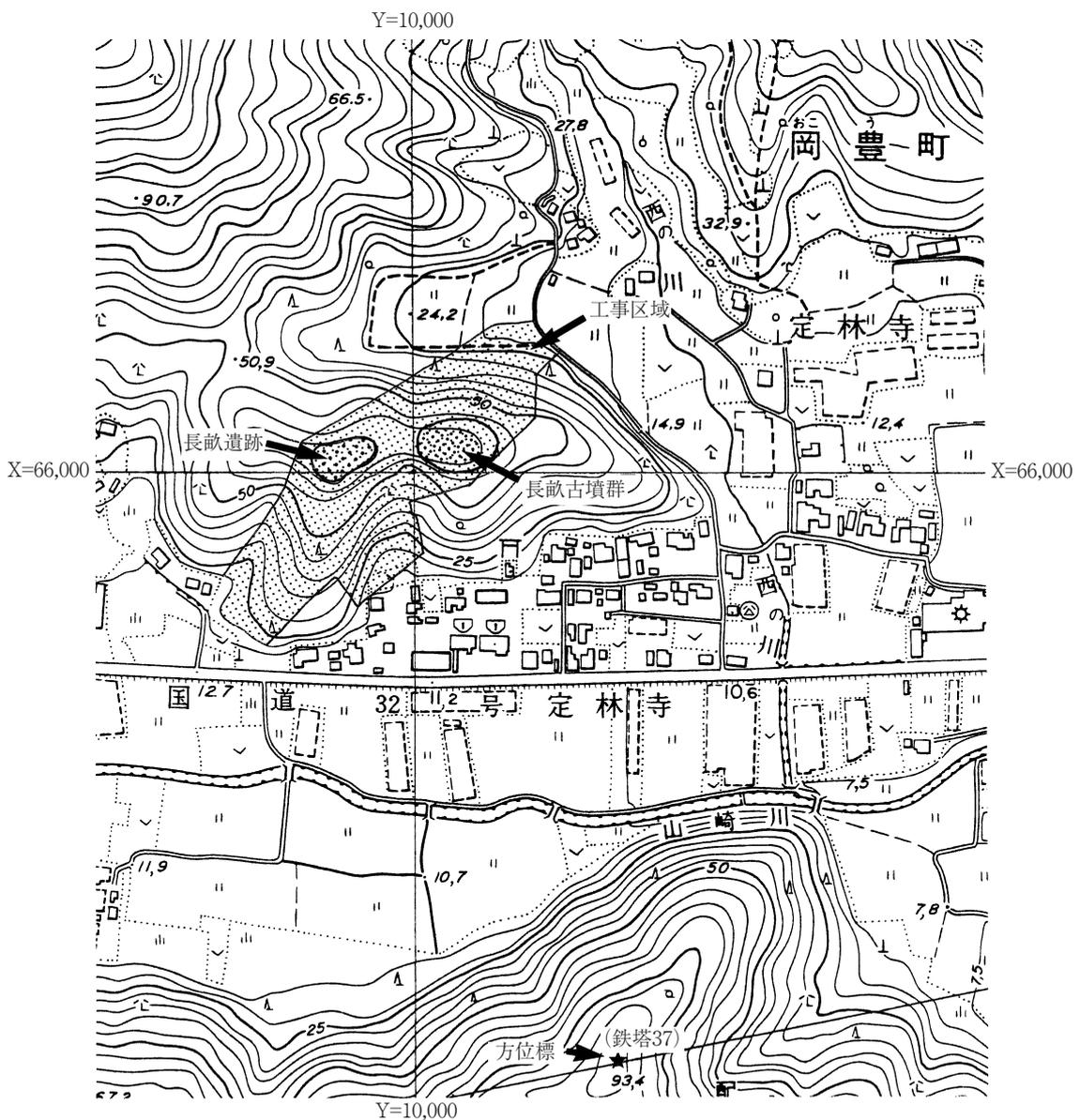


Fig.7 遺跡の範囲と工事区域図 (S=1 : 5,000)

いかとも考えることができ、長畝遺跡（調査時点では長畝2号墳と呼称）の確認調査に引き続き試掘調査に入ることとなった。しかし、土地買収の関係上、その部分の調査はできず、東側の尾根先端部に試掘トレンチを設定せざるを得なかった。ところが、その部分から予想していなかった土坑状のプランの一部が検出され、掘削したところ、土器片に始まり刀子、鉄鏃、鉄製鎌、鉄製鍬・鋤先、袋状鉄斧が次々と検出され、ついには鉄剣2振りが出土したのであった。この出土遺物からみて古墳の主体部である可能性が強いことから以後の調査は本調査に委ねられることとなった。ただし、主体部の位置が東に寄り過ぎていることから本来の主体部は別ではないかと考えられた。そのため調査は工事範囲が古墳群ほぼ全域に及ぶことから対象地域の全面発掘調査を行わなければならない可能性が高かった。

本調査は、平成6年度に道路公団高松建設局高知工事事務所の委託を受け、文化庁の指導のもと県教育委員会の協力を得て実施した。調査期間は平成6年6月13日から12月13日までの実働100日間であった。

(2) 調査日誌抄

1994年6月13日～12月13日

6・13 本日は発掘調査に先だて現場作業の安全祈願を行う。

6・14 樹木の植わった現況での調査前の全景撮影を西側の尾根にローリングタワーを設置して行う。

6・22 調査区の樹木の伐採作業を行う。本日は、主に東側を中心に行う。

6・23 引き続き西側の伐採作業を行う。

6・24 伐採した樹木の片づけと残りの草刈を行い、伐採作業をほぼ完了する。

6・27 麓に設置した現場事務所に発掘道具の搬入を行った後トラバースポイントの設置を行う。本日はTP-16まで設置する。

6・28 残りのトラバースポイントの設置を行う。基準点(M-27)を含めトラバースポイントは23ヶ所となった。

6・29 樹木伐採後の調査前の写真撮影を同じ西側のローリングタワーから行う。

6・30 本日は雨天のため現場作業を中止する。

7・1 トラバース測量を実施する予定であったが、セオドライトが調整不備だったため水準測量を行った。節点は42点で誤差+19mmであった。

7・5 トラバース測量をM-27からTP-13まで行う。

7・6 昨日に引き続きTP-14からM-27までトラバース測量を行う。

7・7 平板で地形測量を行う。

7・8 昨日に引き続き地形測量を行う。

7・11 調査範囲の打ち合わせを行う。午後から地形図を作成する。

7・12 昨日に引き続き地形図の作成を行う。現況が前方後円墳の形に似ているようである。

7・15 発掘区の設定を行う。尾根の長軸に沿ってAトレンチ、それに直行してB～Eトレンチを設ける。

7・18 本日より発掘調査に入る。まず、設定したトレンチの掘削作業から開始する。

7・19 A・Bトレンチの表土剥ぎを中心に行う。東側の頂部で土師器片が数点みられた以外遺物は全くみられない。

7・20 東側頂部のAトレンチで、昨年の試掘トレンチに切られた方形のプランと集石の一部を検出する。ほとんどの部分は表土直下が地山の蛇紋岩の岩盤となる。文化庁の坂井調査官が現場を視察に来

られる。

7・21 Aトレンチの斜面部の調査を行う。主に表土の掘削作業である。

7・22 本日は定例会のため現場作業は中止した。

7・25 雨天のため現場作業は中止した。

7・26 本日も雨天のため現場作業は中止した。

7・27 A・Bトレンチとも斜面部の調査を行う。表土直下は岩盤で古墳の盛土とみられるものは確認できない。

7・28 Bトレンチの北斜面部で黒ボクを主体とする黑色粘質土を検出したが、2次堆積とは考えられない。結局、試掘トレンチにおいては東側で古墳の盛土と考えられるものは確認できなかった。

8・1 本日は雨天のため現場作業は中止した。

8・2 頂上部付近に設定した試掘トレンチに調査を移す。この付近は表土層がさらに薄く、20cmに満たずその下は地山の岩盤である。

8・3 頂上部で規模は小さいが方形のプランを検出する。東側A・Bトレンチの写真撮影を行う。

8・4 Cトレンチの調査に並行してB-Nトレンチのセクションを実測する。

8・5 C-Sトレンチの調査に並行してB-Sトレンチのセクションを実測する。

8・8 西側のAトレンチとC-Sトレンチの調査を行う。本日も古墳の盛土は確認できない。また、地山の成形痕とみられるものも認められない。

8・9 C-SトレンチとB-Sトレンチの調査に並行してAトレンチのセクションを実測する。



Fig.8 調査風景 1

8・10 Dトレンチの調査に移る。C-Sトレンチのセクションを実測する。また、C-Sトレンチで地山の成形痕とみられる部分を検出する。

8・15 Cトレンチの調査とⅢ区のAトレンチのセクションを実測する。

8・16 本日はⅡ区のAトレンチとDトレンチの調査を行う。

8・17 I・Ⅱ区のAトレンチとEトレンチの調査を行う。E-Sトレンチの平坦部分で古墳の盛土とみられる部分を検出する。

8・18 I区のAトレンチ、Eトレンチを調査し、E-Sトレンチの古墳の盛土を確認する。しかし、残存部分は少ない。

8・22 Aトレンチ西端部分とE-Nトレンチを調査する。Aトレンチでは表土層直下が蛇紋岩の地山となる。

8・23 昨日に引き続きA・Eトレンチを調査し、Aトレンチから溝状のプランを検出する。尾根を掘り切るようなものではなさそうである。この遺構上面から須恵器片が出土する。

8・24 本日は試掘トレンチの最終精査を行った上で試掘トレンチの全景撮影を行う。

8・25 各所で遺構が検出されたため、本日から拡張作業に移る。まず、V区から開始する。

8・26 V区の拡張作業に並行して試掘トレンチの位置図と検出遺構の配置図を作成する。

8・29 IV-S区とⅢ-S区の拡張作業を行う。南側には人為的とみられる段部が残る。

8・30 本日も同区の拡張作業を行う。

8・31 本日も同区の拡張作業を行う。表土層から口縁部の内面に沈線のある土師器の口縁部片が出土する。南側は2~3段に削り出しがみられる。堆積は表土層のみで古墳の削り出しとは断定できない。

9・1 斜面部の拡張を行う。人為的な成形痕がみられる。

9・2 Ⅲ-S区斜面部の表土層の掘削を行う。

9・3 本日もⅢ-S区の掘削を行う。

9・6 Ⅲ-S区とⅡ-S区の拡張作業とV-S区とⅣ-S区の精査を行う。

9・7 Ⅲ-S区の頂部の精査と共にⅡ-S区とⅠ-S区の拡張に移る。

9・9 Ⅱ-S区の精査を行った結果、版築状の盛土を確認する。Ⅰ-S区から6世紀末の須恵器片が数点出土する。廃土処理のためユンボを導入する。

9・12 Ⅰ-S区の表土層の掘削をほぼ完了する。表土層から須恵器片が出土する。

9・13 Ⅰ-S区の精査を行い、不整形土坑の南側を確認する。やはり、尾根を掘り切ったものではなかった。

9・14 Ⅰ-N区の拡張作業に移る。不整形土坑の西側には全く遺構はなく、表土層の下は蛇紋岩の地山である。

9・16 Ⅰ-N区の拡張作業をほぼ終了する。

9・19 Ⅰ-N区の精査並びにⅡ～Ⅳ-N区の拡張作業に移る。Ⅰ-N区では不整形土坑の北側ならびに盛土部分を検出する。

9・20 本日も拡張作業を行うと共に廃土処理をユンボとキャリアを使い行う。

9・21 Ⅲ-N区の拡張作業並びに精査を行い頂部で土坑4基を検出する。

9・22 Ⅲ-N区斜面部の精査とV-N区の拡張作業を行う。

9・26 Ⅳ-N区の拡張作業を中心に行う。

9・28 本日は雨天のため現場作業は中止した。

9・29 台風26号のため現場作業は中止した。

9・30 Ⅳ・V-N区の拡張作業を行う。

10・3 昨日に引き続き同区の拡張作業を行う。

10・4 本日も同区の拡張作業を行い、Ⅳ-N区の表土層の掘削をほぼ完了する。

10・5 Ⅳ-N区の精査を行い3基の主体部とみられる遺構を検出した。内1基は小竪穴式石室とみられる。

10・6 V-N区の精査を行い古墳の盛土の一部とみられる部分を検出した。それ以外に遺構とみられるものは確認できなかった。

10・7 調査区全体の精査を行い、来週の写真撮影に備える。結局、古墳の盛土とみられるものは東端部と西端部で認められたのみであった。

10・11 本日は天候不順のため現場作業は中止した。

10・12 雨天のため現場作業は中止した。

10・13 遺構検出状態の写真撮影を西側の尾根上から行うと共に産業用ヘリコプターを使用して上空からも行う。

10・14 本日も昨日撮影できなかった部分の写真撮影を行う。

10・17 本日から遺構の調査を開始する。まず、西側で検出した不整形土坑から行う。遺物はすべて須恵器であり、6世紀後半のものが目立つ。

10・18 東側で検出した小竪穴式石室と土坑状を呈する主体部(1号主体部)の調査を行う。本日の段階では遺物は全く出土しない。なお、1号主体部では試掘の際埋め戻した土の除去を中心に行う。

10・19 昨日に引き続き小竪穴式石室と1号主体部の調査を行うと共に土層断面の実測を行う。

10・20 1号主体部ではバンクを残した状態で北側の調査を行う。小竪穴式石室ではバンクを除去し床面の精査を行う。北東部の床面から鉄鏝が2点出土する。並行して頂部で検出した土坑の調査を行う。

10・24 それぞれの遺構の精査並びに2号主体部の調査を行う。副葬品は全く認められない。合わせてそれぞれの写真撮影を行う。



Fig.9 調査風景 2

10・25 本日も各主体部と土坑の調査を行うが、全く副葬品や遺物は出土しない。合わせて断面実測と写真撮影を行う。

10・26 本日は各主体部の精査に合わせ、トレンチを設定して堆積状態の確認を行う。また、土坑の土層断面の実測を行う。

10・27 小竪穴式石室の東側に設定したトレンチで古墳の盛土と判断できる堆積を確認する。また、各遺構の土層分析のためにサンプリングを行う。

10・28 本日は雨天のため現場作業は中止した。

10・31 バンクに沿ってトレンチを設定して調査したところ西側の盛土部分から新たな遺構を確認した。本日の段階では何らかの主体部とはみられるが、全容は不明である。

11・1 昨日確認した主体部の検出作業を行う。この主体部の南側斜面からMT15並行の須恵器が出土する。

11・2 周辺の拡張作業を行ったところ、石室のプランと掘方を確認する。また、地形測量を行い、墳形の復元を行う。

11・4 調査したところ横穴式石室（竪穴系横口式石室の影響が考えられる初期横穴式石室）であることが判明した。天井石は全く認められなかった。

11・7 横口式石室の調査を中心に行う。玄室の入口右側で高杯4個体、長頸壺、短頸壺、広口壺、台付椀（グラス形土器）の副葬を確認する。また、床面から多数の副葬品が検出される。

11・8 本日も横穴式石室の調査を行う。

11・9 出土遺物とセクションの実測を行うと共に掘方の調査を行う。

11・10 横穴式石室の床面の精査並びに掘方の調査を行う。石野博信教授に助言を受ける。

11・11 横穴式石室の写真撮影並びに全体の掃除を行い写真撮影に備える。

11・14 本日は雨天のため写真撮影は明日に延期する。

11・15 本日は各遺構と全体の写真撮影を西の尾根に設置したローリングタワーから撮影すると共に産業用ヘリコプターによる空中撮影も行う。

11・16 昨日に引き続き産業用ヘリコプターによる航空測量のための撮影を行う。

11・17 本日は雨天のため現場作業は中止する。

11・18 記者発表を行う。



Fig.11 記者発表風景

11・20 現地説明会を開催する。午後からの開催であったが、午前中から見学者があり、現地説明会が始まる時には600名を越す参加者があった。これは田村遺跡群の最後の現地説明会（約1,000名）



Fig.10 調査風景 3



Fig.12 現地説明会 1

に次ぐ数である。

11・22 本日から調査区に残っていたバンクの除去作業と平面測量を開始する。

11・24 文化庁の西田調査官が視察に来られる。引き続きバンクの除去作業と平面測量を行う。

11・28 バンクの除去作業と並行して不整形土坑の調査も行う。

11・29 バンクの除去作業がほぼ終了し、全体の掃除を行う。並行して石室の実測も行う。



Fig.13 現地説明会2

11・30 本日は測量を中心に行う。横穴式石室の実測をする。

12・1 全体の写真撮影を地上からと上空から行う。引き続き盛土の除去作業を行う。合わせて平面実測も行う。

12・5 盛土の除去、周溝の調査、新たに設定したトレンチの調査等を行う。

12・6 トレンチ調査を引き続き行うが、新たに盛土等は確認できなかった。

12・7 検出遺構のレベル実測を行う。高等学校歴史分会の先生方が見学に来る。

12・8 最終の全景撮影並びに航空測量を行う。

12・9 雨天のため現場作業は中止した。

12・12 トレンチの調査と並行して石室の取り除きを行い写真撮影並びに完掘状態での平面実測を行う。

12・13 残りの測量を行うと共に発掘道具を撤収し、本調査を終了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

平成5年度の確認調査の結果、当該調査区の全面発掘調査を行なわなければならない可能性が高かったため、まず、トラバース測量による基準点と水準点の設置を行なった。工事に設置された公共座標(M-27)を基準点とし、X軸をGNに向かう値を正とし、Y軸はX軸に直交する軸としGEに向かう値を正とするようにとり、M-27からTP-1~22までを設定した。なお、トラバース測量は10秒読みの測距測角儀、測機舎SFT4Aを使用して行なった。また、丁度南側の蒲原山の尾根上にある第37番鉄塔を方位標とし、鉄塔37と呼称した。測量結果はTab.2に記し、同時に実施した水準測量(工用基準点M-27 H=18.095mを使用)の結果も同表に記載した。

調査においては、まず、樹木の伐採を行なった後、公共座標が調査区の尾根に比較的沿う形にはあったが、尾根の中軸ラインを基準とするグリッドを設定した。なお、この中軸ラインに直行する南北ラインは公共座標のGNに対して $5^{\circ} 34' 14''$ 東に振っている。トラバース測量に引き続き実施した地形測量では前方部とみられる部分や楕円形を呈するが後円部と考えられる部分が認められ、如何にも前方後円墳であったかのような形状を呈していることからそれを確認すべく、設定したグリッドを基に中軸に沿ってその南側に幅50cmの東西バンク、それに直行する幅50cmの南北バンクを要所に設定したうえで、それに沿って東西トレンチ(Aトレンチ)1

本と南北トレンチを4本設定した。南北トレンチは東から順にBトレンチ，Cトレンチ，Dトレンチ，Eトレンチとし，さらに中軸ラインの南北を区分するため，それぞれにSとNを付記しB-Sトレンチ，B-Nトレンチなどと呼称した。また，それぞれのトレンチによって区切られた部分をI～V区とし，それらも中軸ラインの南北を区分するためSとNを付記し，I-S区，I-N区などと呼称した。

各トレンチの調査を行ったところ，尾根の東側，頂上部分，西側でそれぞれ遺構が検出されたためバンクを残し，全域の遺構検出を行うこととした。その結果，尾根の東側で長畝2号墳（第1号主体部，第2号主体部），長畝3号墳（小竪穴式石室を主体部とする），頂上部分で土坑群，西側で長畝4号墳（初期横穴式石室を主体部とする）などを検出した。

また，各遺構の状況を確認するためのトレンチを必要に応じて設定して調査した。当初前方後円墳と考えられていた（長畝3号墳として調査を行った）現況の地形は，横穴式石室に伴う周溝がその東側で部分的ではあるが確認され結果的に，頂部に土坑群，尾根の東側に長畝2・3号墳，東側に長畝4号墳が存在したと考えるようになった。

調査対象面積は当初斜面部等も含め約3,000m²であったが，最終的な調査面積は1,600m²となった。

(2) 調査の概要

古墳群が存在する長畝の尾根上は戦後以来開墾が繰り返し行なわれ，南側の斜面部を中

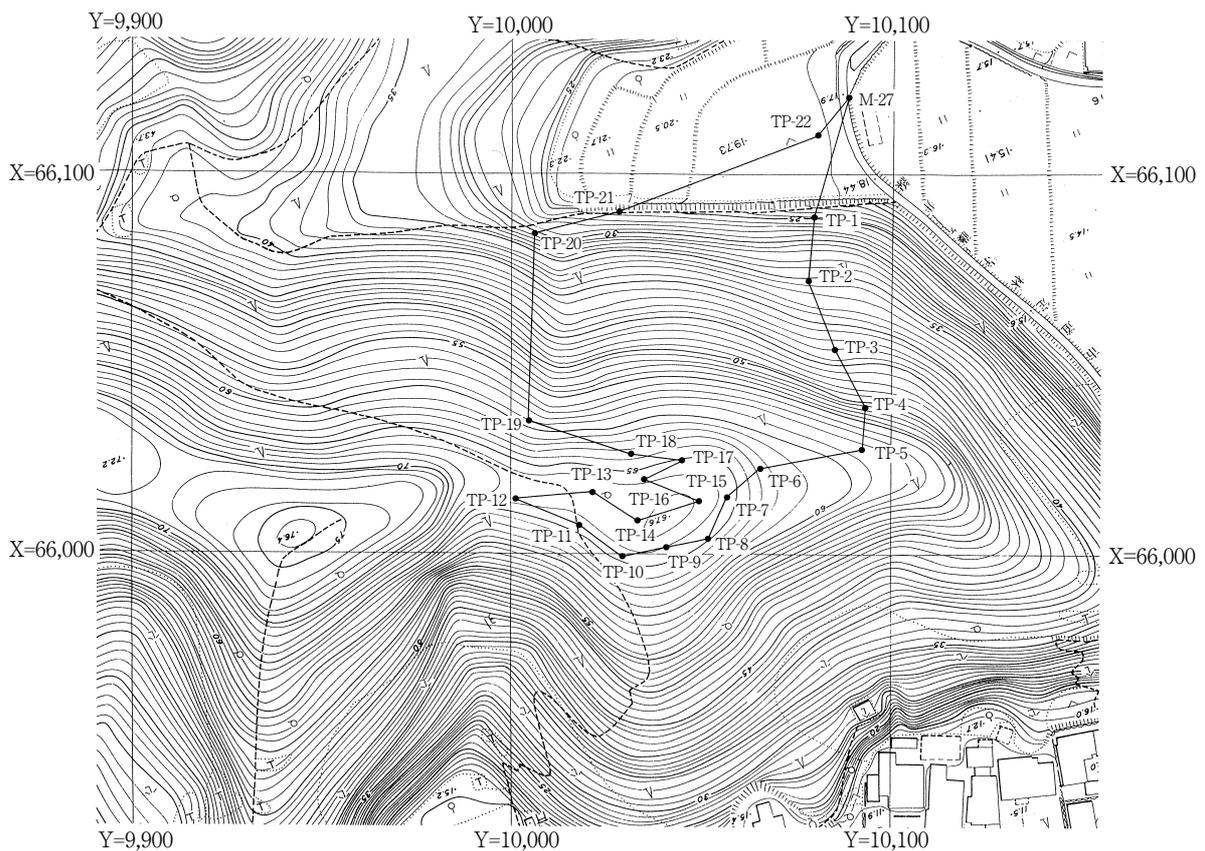


Fig.14 長畝古墳群トラバースポイント配置図 (S=1:2,000)

心に行く段もの段々畑が造られていた。頂部の平坦部分では表土層の堆積は認められるもののその直下はほとんどが基盤の岩盤となっており、斜面部の段々畑の岸側で頂部の流土と考えられる堆積が認められた程度であった。また、表土層下の地山が尾根の南側と北側では異なり、南側が蛇紋岩の岩盤が主であるのに対し北側は黒色粘質土となっていた。一方、尾根の東側と西側の一部に古墳の盛土と認められる部分もあり、調査に入る際樹木の伐採後に行なった地形測量では前方部や楕円形を呈するが後円部とみられる部分とくびれ部と考えることもできる部分の存在など前方後円墳を形作る諸条件を呈しているようにも思われた。また、斜面部を中心に栗を始めとして桜や杉など多くの樹木が植林されており、その根によって破壊されていた部分も認められた。以下、設定した5本のトレンチの概要を記す。

Tab.2 トラバース測量座標成果一覧表 (路線名 長畝古墳群
測角点 M-27~TP-1~22 実測精度1/86,953)

測角点	方向点	正整方向角	水平距離 (m)	X (m)	Y (m)	座標点	標高 (m)
TP-22	M-27	37° 14' 36"	13.564	66,121.563	10,088.468	M-27	18.095
M-27	TP-1	195° 19' 23"	35.737	66,087.096	10,079.024	TP-1	
TP-1	TP-2	181° 12' 30"	14.320	66,072.779	10,078.722	TP-2	
TP-2	TP-3	160° 56' 18"	19.918	66,053.953	10,085.227	TP-3	
TP-3	TP-4	151° 35' 45"	17.238	66,038.790	10,093.427	TP-4	
TP-4	TP-5	185° 24' 00"	11.359	66,027.481	10,092.358	TP-5	
TP-5	TP-6	260° 21' 41"	27.288	66,022.912	10,065.455	TP-6	57.398
TP-6	TP-7	225° 27' 13"	11.250	66,015.020	10,057.437	TP-7	60.388
TP-7	TP-8	205° 50' 11"	11.781	66,004.417	10,052.303	TP-8	59.362
TP-8	TP-9	256° 07' 20"	10.794	66,001.828	10,041.824	TP-9	60.782
TP-9	TP-10	255° 47' 59"	11.345	65,999.045	10,030.826	TP-10	59.321
TP-10	TP-11	302° 15' 56"	14.970	66,007.037	10,018.167	TP-11	60.622
TP-11	TP-12	292° 38' 38"	18.841	66,014.291	10,000.779	TP-12	61.498
TP-12	TP-13	82° 52' 07"	20.838	66,016.878	10,021.455	TP-13	62.376
TP-13	TP-14	125° 19' 42"	14.921	66,008.250	10,033.628	TP-14	62.884
TP-14	TP-15	70° 59' 05"	17.267	66,013.876	10,049.953	TP-15	62.374
TP-15	TP-16	291° 44' 43"	15.952	66,019.786	10,035.136	TP-16	62.536
TP-16	TP-17	67° 31' 04"	11.658	66,024.244	10,045.908	TP-17	60.628
TP-17	TP-18	280° 58' 35"	14.448	66,026.955	10,031.724	TP-18	59.699
TP-18	TP-19	286° 49' 11"	28.853	66,035.344	10,004.105	TP-19	
TP-19	TP-20	2° 22' 00"	49.134	66,084.436	10,006.134	TP-20	27.699
TP-20	TP-21	75° 20' 58"	22.789	66,090.200	10,028.182	TP-21	25.637
TP-21	TP-22	68° 27' 03"	55.990	66,110.765	10,110.765	TP-22	
TP-22	M-27	37° 14' 36"	13.564	66,121.563	10,088.468	TP-1	18.095
TP-12	鉄塔37	163° 24' 22"	455.909	65,577.369	10,130.980	鉄塔37	
TP-15	鉄塔37	169° 29' 03"	443.964	65,577.369	10,130.980	鉄塔37	

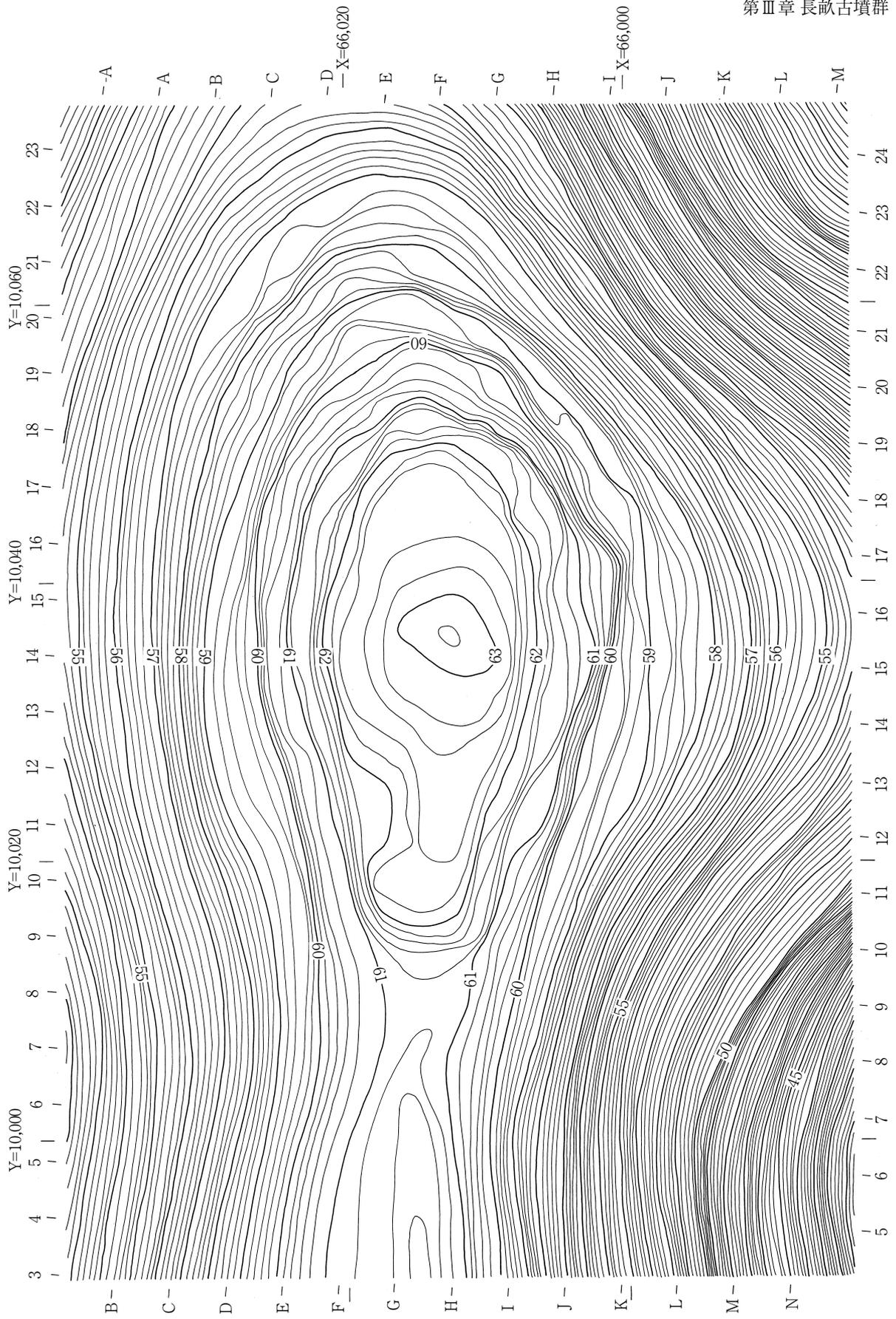


Fig.15 長畝古墳群調査前地形測量図 (S=1:400, 平面直角座標第IV系)

① Aトレンチ

尾根の中軸ラインに沿って北側に設定したⅠ区からⅤ区に及ぶ東西トレンチで、規模は幅2m、長さ54.5mである。尾根の頂部に当たるⅢ区とⅣ区では、表土層直下は蛇紋岩の岩盤で、古墳の盛土と認められるものは全く残存していなかった。東側のⅤ区でも上部の平坦部分は表土層直下が蛇紋岩の岩盤であり、斜面部において表土層下に流土が認められた程度で、古墳を裏付ける堆積は認められなかった。遺構としては、尾根上部の東端部分でチャートの塊石を巡らす遺構（長畝3号墳の主体部である小竪穴式石室）の一部とそれに切られた遺構（長畝2号墳の第1号主体部）を検出することができた。この遺構は平成5年度の確認調査の際発見された主体部で、蛇紋岩の岩盤を掘削していた。一方、西側では、Ⅰ区の東側とⅡ区で古墳の盛土を確認することができた。盛土確認のために設けたサブトレンチからチャートの塊石を巡らす遺構（長畝4号墳の主体部である初期横穴式石室）の一部を確認した。さらに、長畝遺跡に続く尾根上で不整形土坑を検出した。この部分についても表土層下は蛇紋岩の岩盤となっており、この不整形土坑はこの岩盤を掘削して掘り込まれていた。

② Bトレンチ

Ⅴ区でAトレンチに直行する幅2m、長さ31.0mの南北トレンチで、尾根の東側を縦断する形に設定した。土層の堆積状況は尾根の南側と北側では異なる。まず、南側は基本的に表土層下が基盤の蛇紋岩を主体とする岩盤で、段々畑の岸側で流土と考えられる堆積が厚いところで約1m認められた。また、この段々畑となった平坦部分では地山の削平痕も看取できた。現況からすると古墳築造の際の削平痕とは言い難く、やはり開墾の際の所産とみた方がよさそうである。一方、北側では、頂部付近は先述のように表土層下は基盤の岩盤であり、斜面部で黒ボクが混じる黒色粘質土層となり、その下部で純然たる黒ボク層も確認された。この黒ボク層下層はやはり基盤の岩盤であるが、斜面の下部に行くに従って黒ボク層の堆積が厚くなっていた。これら堆積層のうち表土層下にみられた黒色粘質土層は人為的な不純物を全く含まないことから黒ボク層の上層部がより土壌化したものと判断され他の堆積層と同じく自然堆積層と判断される。また、北側では南側で見られたような顕著な人為的削平痕は認められなかった。

③ Cトレンチ

Ⅳ区でAトレンチに直行する幅2m、長さ34.5mの南北トレンチで、尾根頂部を縦断する形に設定した。土層の堆積状況は尾根の南側と北側では幾分異なるが、その状況はBトレンチとほぼ同じである。ただ、南側においては、段々畑の幅が広い分、地山の削平範囲が広がっている。一方、北側では南側のような人為的削平痕は認められなかった。なお、遺構としては頂部で隅丸方形の土坑を検出した。土坑は基盤の蛇紋岩を掘削して掘り込まれていた。

④ Dトレンチ

当初前方部と後円部のくびれ部と考えられていた部分に設定した幅2m、長さ26.5mの南北トレンチである。また、トレンチはⅢ区の西端でAトレンチに直行する。南側は表土層直下が

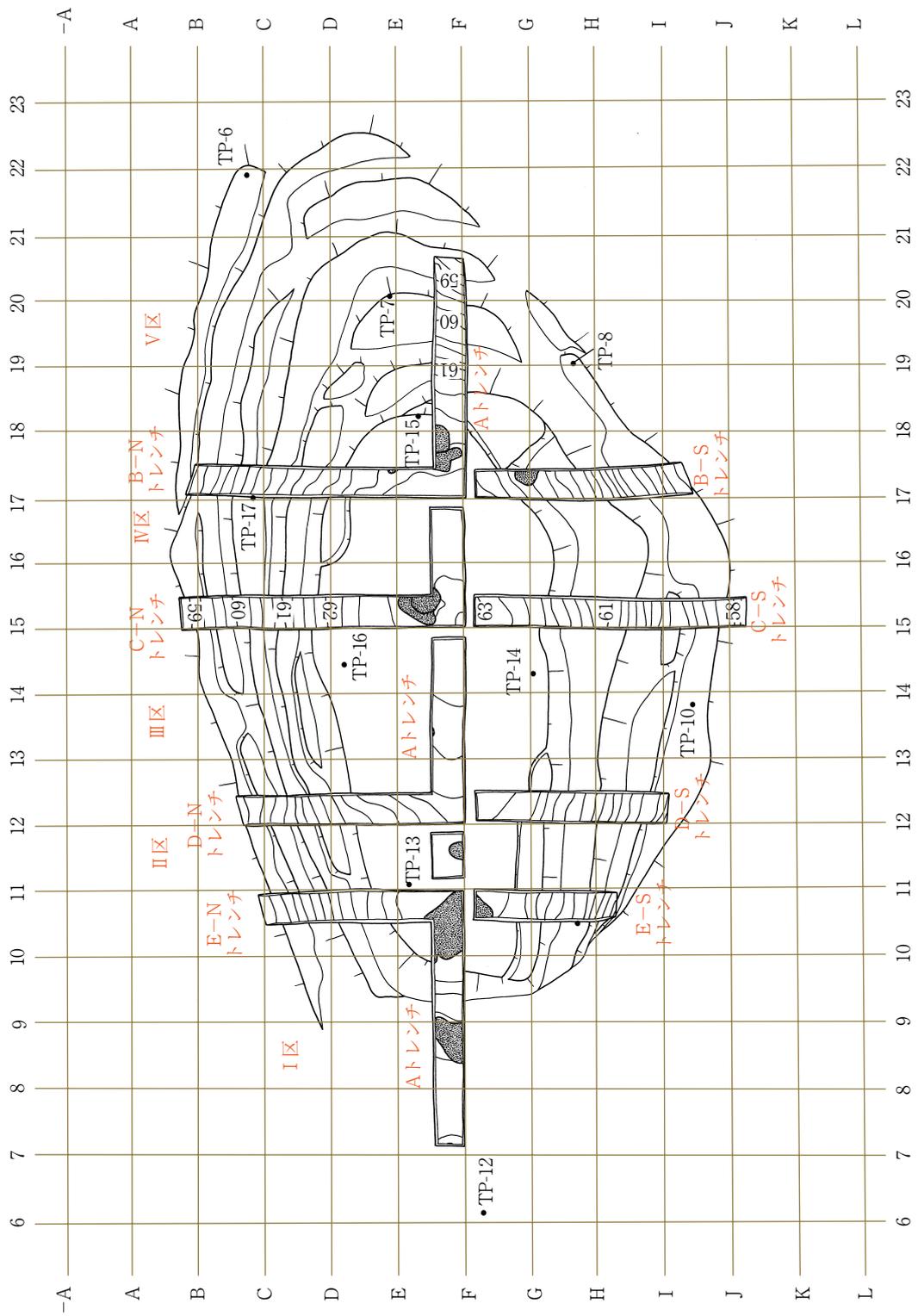


Fig.16 長畝古墳群トレンチ設定図 (S=1:400)

赤褐色粘質土となる部分と蛇紋岩の岩盤となる部分がみられたが、古墳の盛土と考えられる堆積は確認されなかった。しかし、尾根の平坦部分と斜面部の境に一見くびれ部ともみられる地山の削平痕が認められた。また、斜面部にもB-SトレンチとC-Sトレンチで認められた削平痕の続きと考えられる部分が僅かではあるが確認できた。一方、北側ではB-Nトレンチの状況と同じような黒色粘質土の堆積が認められた。しかし、遺構は確認されなかった。

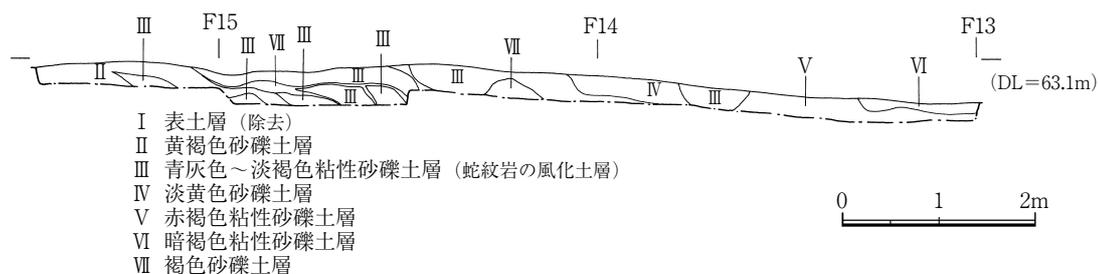


Fig.17 Aトレンチ基盤層セクション図

⑤ Eトレンチ

当初前方部ではないかと考えていた部分に設定した幅2m、長さ22.0mの南北トレンチである。また、トレンチはI区東端でAトレンチに直交する。尾根の平坦部分にかかるトレンチでI区Aトレンチ同様古墳の盛土とみられる版築状の堆積が確認された。しかし、盛土の堆積は厚いところで20cmと遺存状況は良くなかった。斜面部は、南側で表土層下が蛇紋岩の岩盤となり、北側で表土層下が黒色粘質土となっていた。

3. 遺構と遺物

(1) 長畝2号墳

当古墳の主体部は、礫床の1号主体部とその北側で直行する形に造られた2号主体部の2基である。それぞれ地山である蛇紋岩の岩盤を掘削して掘り込まれており1号主体部を中心に築造されたものと考えられる。現況では、当古墳に伴うとみられる周溝や墳丘が確認できないためそれによって古墳の規模を復元することはできないが、主体部の西側にみられる等高線が比較的緩やかになった部分を古墳築造の際の削り出しの残存地形とみることも可能である。一方では、1号主体部の検出面からまとまって出土した墓前祭祀の際に破碎したとみられる壺の破片が土器型式からみて弥生時代終末から古墳時代初頭に位置付けられ、新しくみても布留式の古段階より下らない可能性が強いことや墳丘がみられないことから単に弥生時代の土坑墓とみる向もある。しかし、副葬されている遺物が弥生時代に属するとは考え難いことから古墳の主体部として報告する。副葬品、中でも鉄製品と在地の土器との併行関係そしてその土器の位置付けについて、在地土器の型式編年の中で捉えるべきものであるが種々の問題を含んでおり、それについては第IV章の中で言及することにする。なお、それには畿内を中心とする地域とは異なる南四国という地域性が大きく関わっているように思われる。

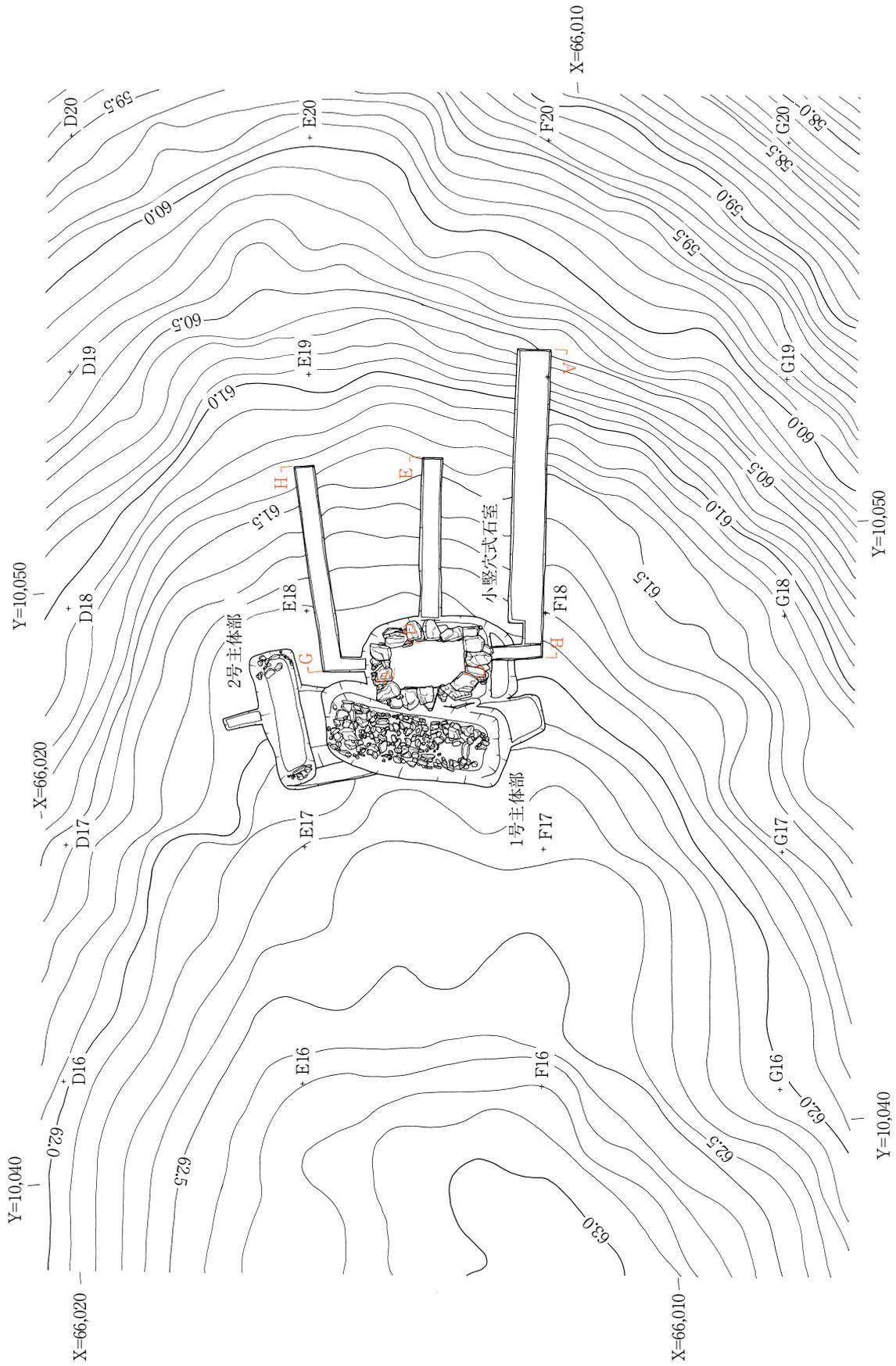


Fig.18 長畝2・3号墳平面図

① 墳丘の形態

先述のように現況では周溝や墳丘は確認できず、古墳の規模を明確にすることはできないが、1号主体部の西側にみられる等高線が比較的緩やかであること、周辺の等高線にややくびれた箇所がみられることから古墳築造の際の削り出しの残存地形とも考えることが可能である。そのように判断すると墳丘の規模は1号主体部を中心に直径10.50mの円墳であったものと推察される。また、1号主体部を切って掘削されている小竪穴式石室の東側で盛土とみられる版築状の堆積が認められているが、掘削状況からみて長畝2号墳築造の際のものとは判断するに足る資料は得られなかった。

墳丘の高さは、1号主体部が深さ0.95mと深いことと検出面で墓前祭祀の際に破碎されたものとみられる壺が出土していることから考え合わせると1mに満たないものではなかったかと推考される。

② 主体部の構造

2基の主体部が確認されている。以下、1号主体部と2号主体部について記す。

1号主体部

墳丘の中央部に位置していたものとみられる。遺構は平成5年度に南2/3が発掘されていたため、本調査では残りの北1/3を調査した。南側に張出のようにみられるのは試掘トレンチの掘削坑である。

遺構はまず、ほぼ方形の掘方で墓坑が掘削され、次に棺を安置するために礫岩の割石を床面に敷いていた。割石の横断面が舟底状を呈することから割竹形木棺を安置していたものと推察される。方形を呈する墓坑の規模は長辺3.31m、短辺1.38m、深さ1.01mを測り、割石を敷いた礫床の検出面からの深さは0.95mとなっていた。墓坑の主軸方向はN-16°10'-Eである。埋土は六層に分層され、1層が黒色粘質土、2層が暗褐色粘質土、3層が灰褐色粘質土、4層が蛇紋岩粒を僅かに含む黒色粘質土、5層が黒褐色粘質土、6層が青灰色粘質土(蛇紋岩の風化土)の六層に区分される。この内1~4層は木棺が腐食し崩壊した際に落ち込んだ土層とみられる。なお、墓前祭祀に使用したとみられる土器は1層中から出土した。出土遺物には鉄剣2、鉄鎌10、鉄製鎌1、鉄製鋤先1、鉄斧1、刀子1と先述の土師器の壺1がみられる。これらはすべて平成5年度の試掘調査の際出土したもので、今回出土したのは土師器の壺の残りの破片と形状不明の鉄片と2cmに満たない木片であり、主たる副葬品は全く出土しなかった。この内鉄剣2、鉄鎌(Fig.22-4~10・13)は床面直上、土師器以外の他の遺物は上部の層(2・4層に相当)から出土したという。

2号主体部

墳丘の中央部よりやや北よりに位置する主体部で、1号主体部の北に隣接してほぼ直行する形で設置されていた。遺構は褐色粘質土層と蛇紋岩及び青灰色粘性砂礫土層(蛇紋岩の風化土層)を掘削して掘り込まれていた。

遺構はまず、方形の掘方の墓坑を掘削した上で、両小口に1号主体部の床面に敷いていたのと同じ礫岩の割石を据えていた。この両小口の割石は木棺の両小口板を支えるために使用した

ものとみられる。また、床面には粘土の堆積が認められ、床面は粘土床であったものと考えられる。これらのことからみて、この墓坑では組み合せ式木棺を安置していたものと推察される。方形を呈する墓坑の規模は長辺2.30m、短辺0.74m、深さ0.42mを測り、床面の規模は長辺2.00m、短辺0.38mであった。墓坑の主軸方向はN-85°43'-Eである。埋土は六層に分層され、1層が褐色粘質土、2層が赤褐色粘質土、3層が黒褐色粘質土、4層が明褐色粘質土、5層が灰褐色粘質土、6層が赤黄色粘質土であった。この内3層が木棺部分に当たり、2・4層が木棺を支えるために入れられた土層とみることができよう。副葬品を始めとした遺物は全く検出されなかった。

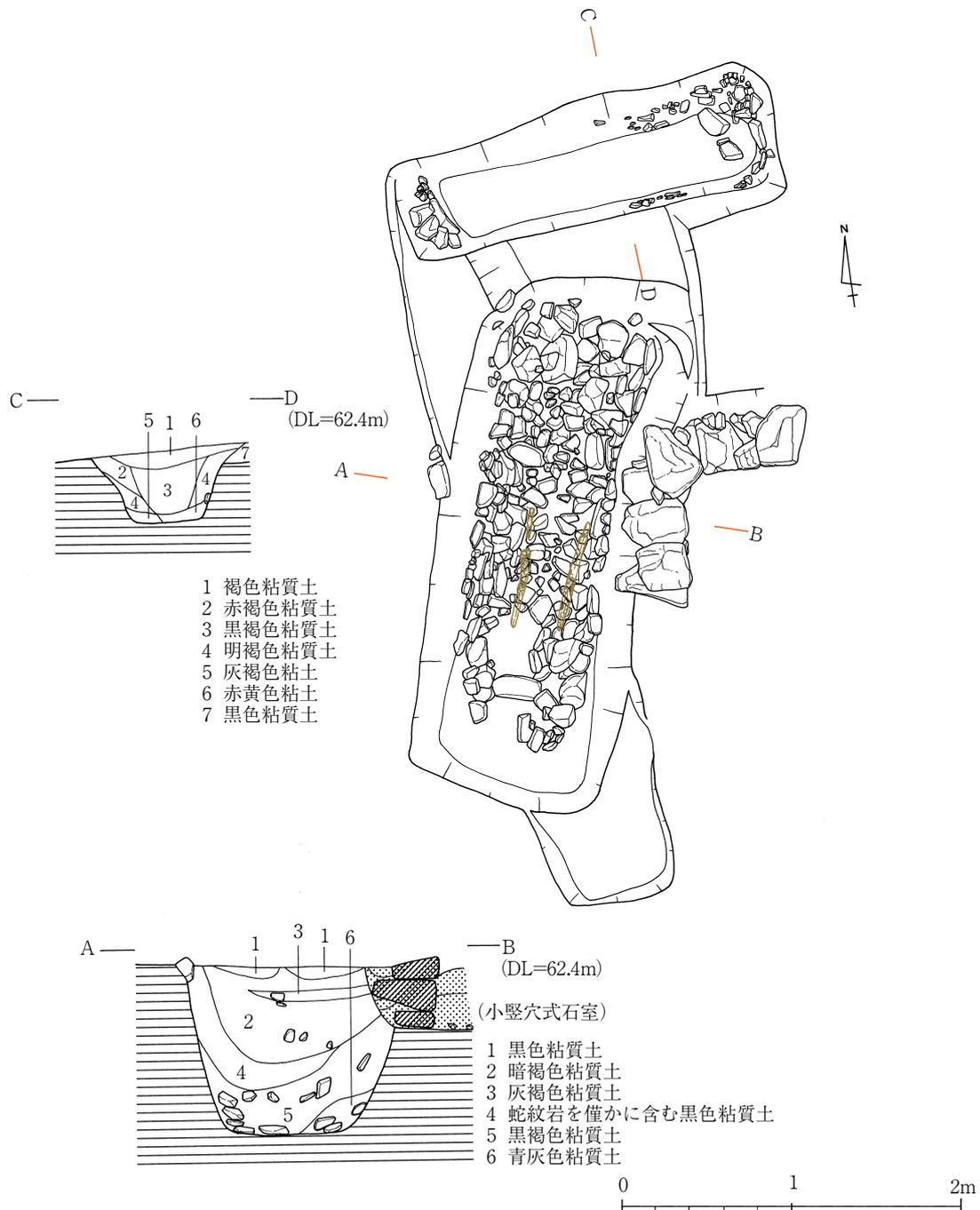


Fig.19 長畝2号墳 1号主体部, 2号主体部

③ 副葬品

2号主体部からは遺物が全く検出されなかったため、ここでは1号主体部から出土した遺物について記す。

鉄製武器

i 鉄剣 (Fig.20・21-2・3)

礫床の床面直上で検出されたもので、それぞれ鋒を南(足側)に向けて、2が東側、3が西側から副葬された状態で出土した。

2は全長67.7cm、刃部長55.5cmを測り、刃身の鋒側約1/2に鞘の木質が残存している。刃部基部側には刃部身のほぼ中央に鑄の稜線が認められる。身の断面は明瞭な菱形ではなく、両丸造の扁平な楕円形を呈し、刃身先端部で厚さ0.30cm、中央部で0.55cm、元部で0.45cmを測る。関は直角に刳り込む無関で、刃区と棟区からなる両区となる。茎は茎尻から緩やかなカーブを描きながら刃身に近い目釘穴付近の8.0cmまでは長さ1.60cmで、そこから関まで幅を広げ、関で幅3.1cm、厚さ0.45cmを測り、一文字ではなく、内反り茎となる。目釘穴は2つで、茎尻から3.9cmと7.9cmの位置にある。

3は全長66.2cm、刃部長は鞘と柄の木質が遺存しているため確認できないが約50.5cmではないかとみられる。また、X線写真でも確証は得られなかった。また、刃身の元部側約1/2と関から3.5cmまで柄の木質が残存している。刃部鋒側には刃部身のほぼ中央に鑄の稜が認められる。身の断面は2同様明瞭な菱形ではなく、両丸造の扁平な楕円形を呈し、刃身先端部で厚さ0.65cm、中央部で0.60cm、元



Fig.20 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣 1

部で0.70cmを測る。関は鞘と柄の木質が遺存するため不明である。茎は錆化がみられ目釘穴も塞がっている部分もある。茎は茎尻(幅1.6cm, 厚さ0.4cm)から11.5cmのところ(幅2.4cm, 厚さ0.4cm)まで非常に緩やかなカーブを描きながら幅を広げ, さらに関に向かって幅を広げるものとみられる。茎はその形態からみて一文字ではなく, 2同様内反り茎とみられる。目釘穴は2つで, 茎尻から2.5cmと6.9cmの位置にある。

鞘は刃身の元部から30cmに亘って残存しており, 白木を2枚合わせていたものではないかとみられ, 関に近い部分には革ではないかとみられる部分もあり, 革を巻いていた可能性もある。柄は3.5cmが残存しており, 鞘同様白木ではなかったかとみられる。

ii 鉄鏃 (Fig.22-4~13)

鉄鏃には柳葉鏃(4~8), 圭頭鏃(9・10), 三角形鏃(11~13)がみられ, 11と12が埋土上層部, 他が床面直上から出土したという。

4は残存長19.0cm, 鏃身長9.5cmと大形で, 茎部には木質(桜の皮)の装着部が残存している。刃部は鋒よりふくらみを有した後, 緩やかに内湾して関に至り, さらに内湾する茎となる。鏃身は両丸造で, 鏃は僅かに認められる程度である。刃部には布の付着が認められる。茎の長さは装着部分の木質が残存しているため明確ではないが, 7.1cmまで確認でき, 断面は関に近い部分が長方形, 基部が正方形を呈する。5も大形の柳葉鏃で, 残存長18.8cm, 鏃身長10.1cmで, 関を境に歪みが認められ, 鏃身の関に近い部分に布の付着, 茎には木質(桜の皮)の装着部が残存する。刃部は鋒よりふくらみを有した

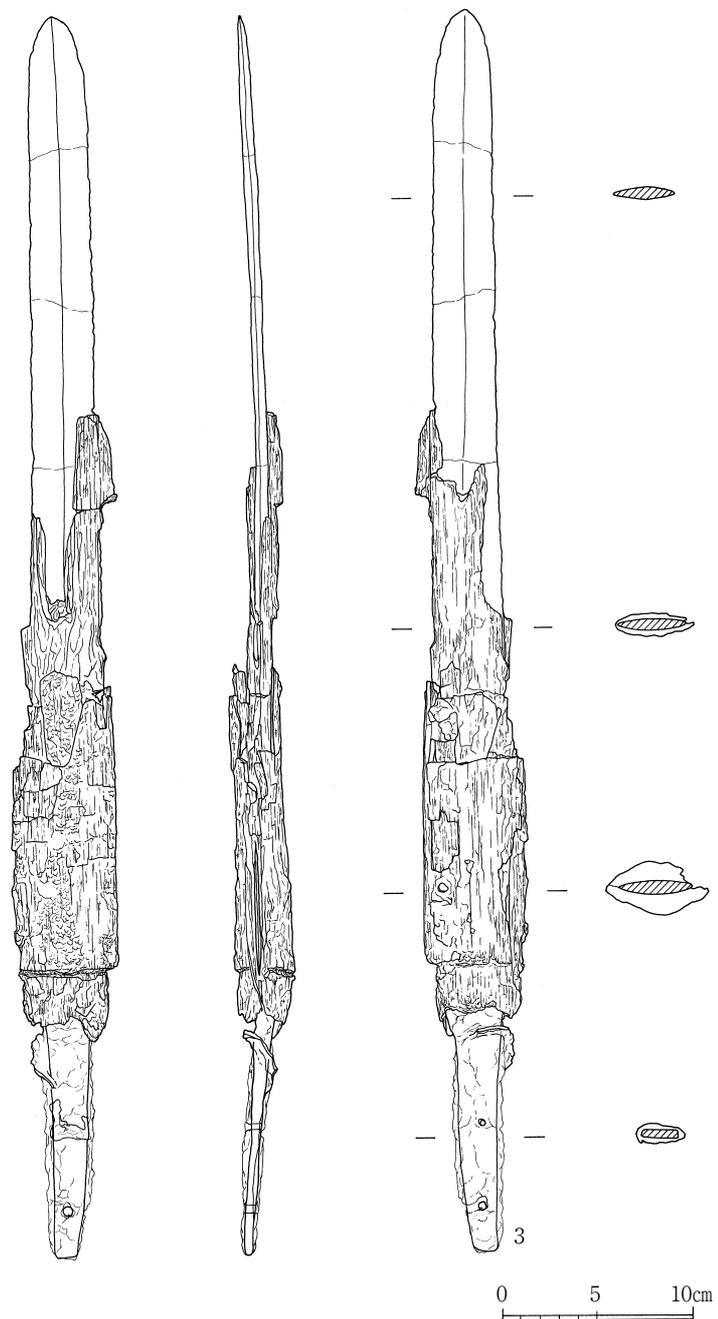


Fig.21 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣 2

後、若干内湾気味に関に至り、関を境に内湾して続く茎となる。鍬身は両丸造で、鑄は僅かに認められる程度である。茎の長さは装着部分の木質が残存しているため明確ではないが、5.0cmはあるものとみられ、断面は正方形を呈する。6も大形の柳葉鍬で、茎部が欠損する。残存長は10.3cmで、鍬身長10.0cmを測る。鍬身部には布の付着が部分的に認められる。刃部は鋒よりふくらみを有した後、緩やかに内湾して関に至る。茎はさらに内湾するものとみられる。鍬身は両丸造で、鑄は僅かに認められる程度である。7も大形の柳葉鍬とみられるが、鍬身の刃部が残存するのみで、11のような三角形鍬の可能性もある。残存長は3.3cmで、刃部の鋒からふくらみを有した後、緩やかに内湾するとみられる部分までが確認できる。また、鍬身は両丸

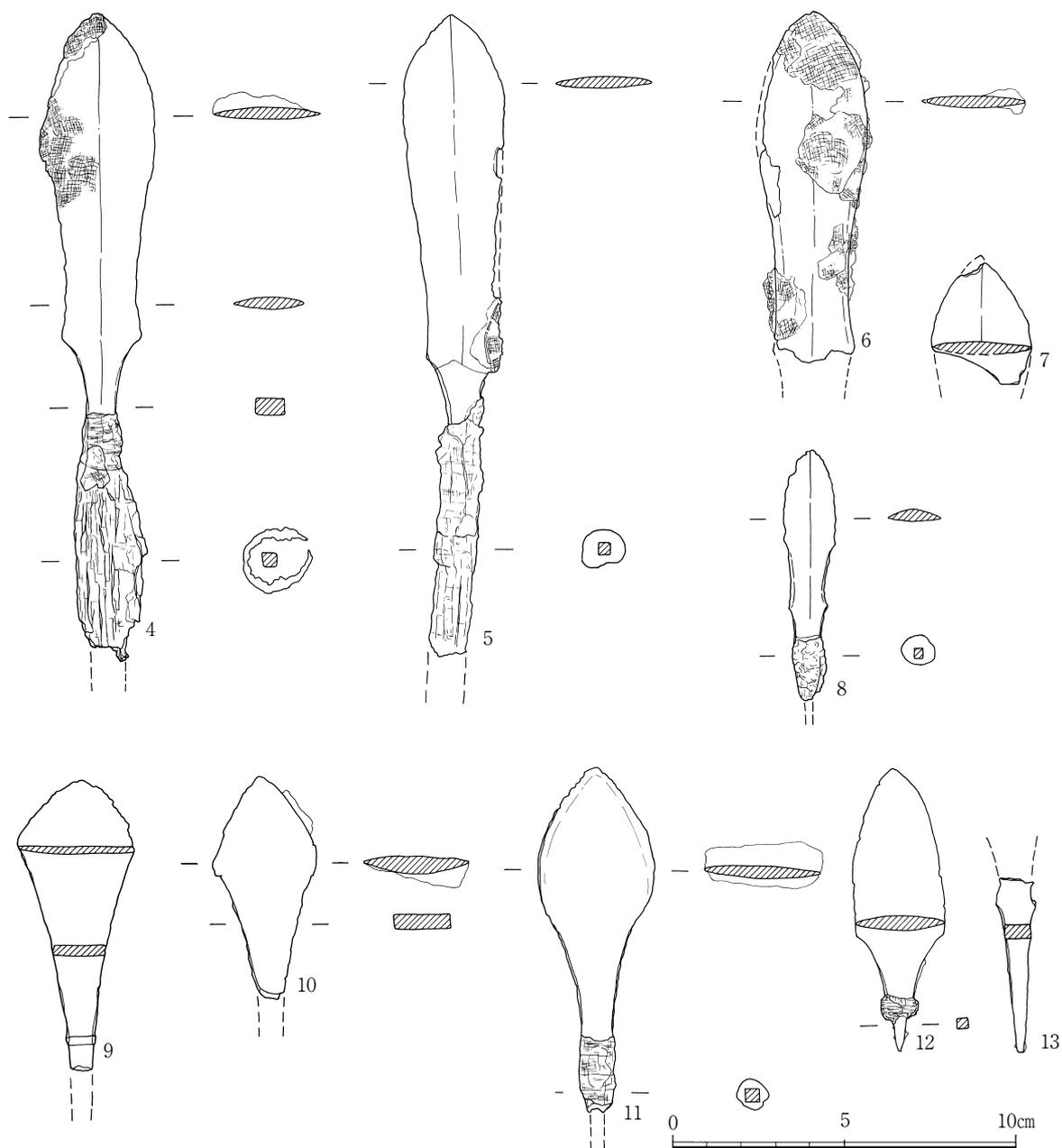


Fig.22 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鍬

造で、鏃は僅かに認められる程度である。8は普通の柳葉鏃で、残存長7.3cm、鏃身長4.6cmを測り、茎には木質の装着部が残る。刃部は鋒より小さなふくらみを有した後、緩やかに内湾して関に至り、さらに内湾して茎となる。鏃身は両丸造であるが、ややふくらみがあり、鏃は比較的明瞭である。茎の長さは装着部分の木質が残存しているため明確ではないが、2.6cmまで確認でき、断面は正方形を呈する。

9は中形で扁平な圭頭鏃で、残存長8.5cm、鏃身長7.5cmを測る。刃部は部分的に欠損のみられるものの圭頭をなし刃部を境にやや内湾気味に関に至る。関は所謂棘状関をなす。茎は関からそのまま続くが0.9cmが残存するのみである。鏃身は平造で、扁平であり、関に近づくに従って厚みを増す。10も中形の圭頭鏃で、残存長(残部は鏃身部)6.5cmを測り、関、茎部は欠損する。全般に銹化が進み、形状が不明瞭な部分もある。刃部は圭頭をなし、刃部を境にやや内湾気味に茎に向かう。鏃身は両丸造で、基部で長方形をなす。

11は大形の無関三角形鏃で、残存長10.1cm、鏃身長7.5cmを測り、茎には木質(桜の皮)の装着部が残存する。刃部は鋒から丸味を有した後、頸部はやや丸みを持って斜行しそのまま茎に至る。鏃身はやや扁平な両丸造である。茎は2.6cmが残存し、断面は正方形をなす。12は頸部が明瞭な斜行となる三角形鏃で、全長8.3cm、鏃身長4.9cmを測り、茎には木質の装着部が残存する。刃部は比較的長く鋒から丸味を有し、頸部は大きく斜行して関に至る。関は有関であるが、木質部が残存するため明確ではない。鏃身は両丸造である。茎は長さ1.1cmで、断面は方形をなし、基部が細くなる。13は関部から茎部が残存するもので、三角形鏃として扱っているが、柳葉鏃のものである可能性も十分ある。残存長は5.1cmで、頸部基部から先端が欠損する。頸部は山形をなし、関から小さく内湾してからほぼ直線的に茎基部に至る。茎の断面は方形をなす。

鉄製工具

i 鉄鎌 (Fig.23-14)

大形の直刃鎌で、全長19.7cm、刃部長19.0cm、刃部幅3.5cm、重量60.5g(保存処理をした状態での計測)を測り、刃部先端近くが欠損する。刃部は部分的に欠損がみられ、棟は中央部を境に先端に向かってやや外反し、先端部分で弧状をなし、刃部先端に繋がる。基部の折返の角度は鈍角で、折返部を上にして刃を手前に向けると柄は右側に付く。折返部の厚さは0.3cmである。

ii 鉄製鍬・鋤先 (Fig.23-15)

大形の方形板刃先で、約1/3が欠損する。残存する刃部長は7.7cmで、復元すると約10cmではないかと推測される。刃部はやや外湾し、刃部幅は9.7cm、厚さは基部で0.2cm、中央部で0.6cmを測る。折返は、断面U字形をなし、長さ5.9cm、幅2.6cm、厚さ0.2~0.5cmを測る。残存重量は87.1g(保存処理をした状態での計測)である。

iii 鉄斧 (Fig.23-16)

鍛造袋状鉄斧で、表面の銹化は進んでいるが、X線写真で見ると内部は全く銹化しておらず現状でも銹を落とせば使用可能な状態である。全長13.0cm、刃部幅4.9cm、厚さ(中央

部) 1.8cm 袋部上端の外径3.9×4.4cm, 内径2.7×3.5cmを測り, 重量は277.9g (保存処理をした状態での計測)である。袋部の合わせ目は0.5cm開いている。刃部は両側がやや外湾するがほぼ真直ぐで, 右片端が欠けているので, 袋の閉合部を左主面とする縦斧の可能性が考えられる。袋部には木質の痕跡は認められない。

iv 刀子 (Fig.23-17)

残存長は8.7cmであり, その形状からみて復元長が30.3cmに満たないと考えられることから刀子とした。平造りで, 扁平な形姿をなし, 棟は平棟となる。鋒はフクラ枯をなす。厚さは棟で0.4cmを測る。また, 鋒と棟の2ヶ所に大きな錆がみられる。

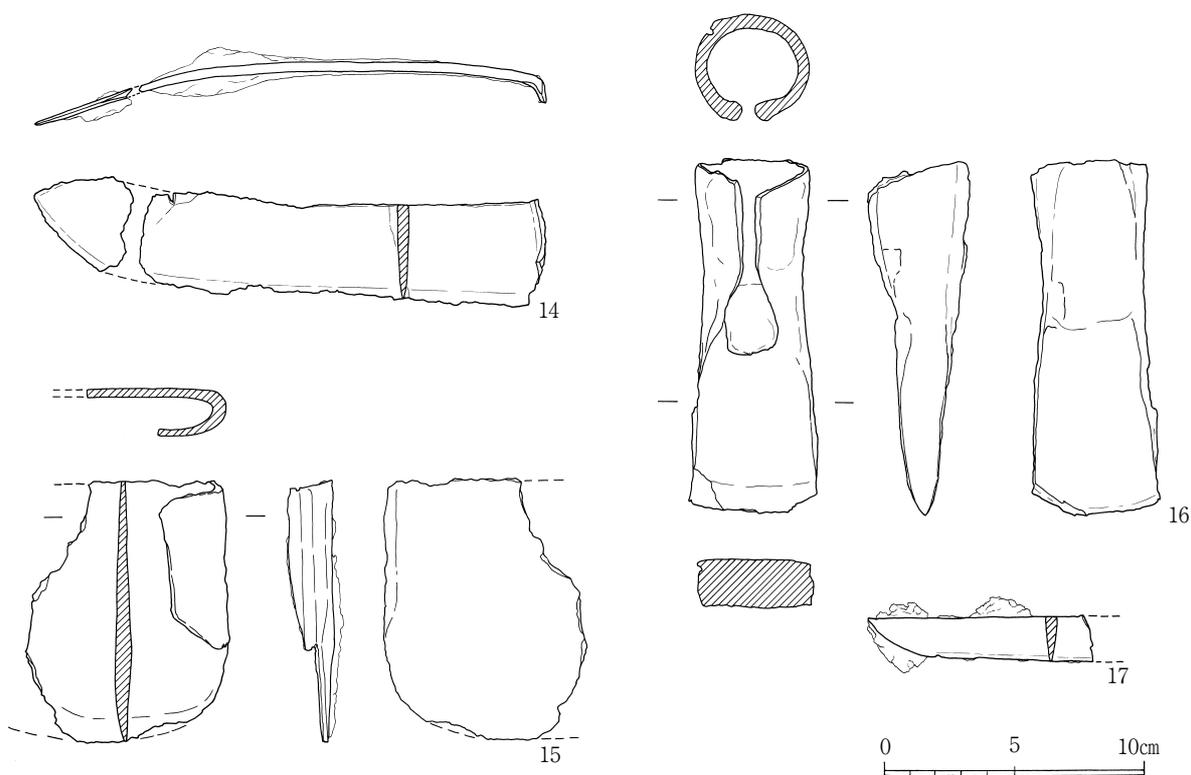


Fig.23 1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鎌, 鉄製鋏・鋤先, 鉄斧, 刀子

④ その他の遺物

1号主体部検出面と埋土の上層部(1層)から出土した遺物が1点認められた。その状況からみて墓前祭祀に使用された後, 破碎されたものとみられる。この土師器は平成5年度の試掘調査の時にも出土している。

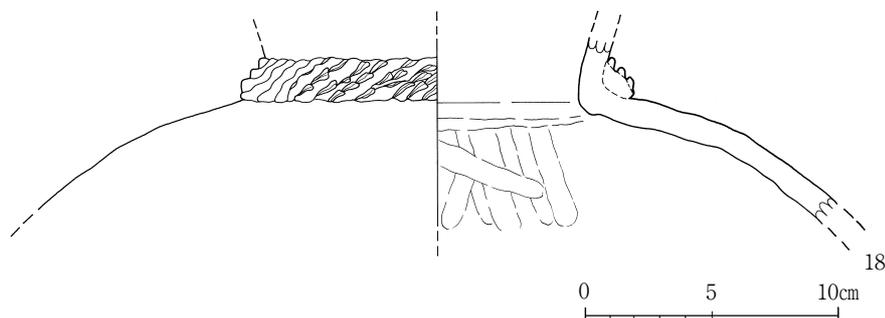


Fig.24 1号主体部(長畝2号墳)出土土師器

検出面出土土器

i 土師器 (Fig.24-18)

壺の頸部から上胴部にかけての破片である。頸部は外傾し、屈曲して大きな胴部に続く。頸部と胴部の境の外面には粘土紐を添付した上にヘラ状工具で3~4段に刺突文を施している。外面はナデ調整、内面は、胴部で指ナデ、頸部でナデ調整が施される。

(2) 長畝3号墳

本古墳は、小竪穴式石室を主体部としている。主体部は長畝2号墳の1号主体部の東端を掘削して設置されていた。このような状況からみて、長畝2号墳の築造とは時期的に少なからず隔たりがあるものとみられる。

① 墳丘の形態

長畝2号墳の主体部と隣接しているため、墳丘もほぼ同一のところに築かれたものとみられるが、現況では周溝や明確な墳丘は確認できず、古墳の規模を明確にすることは難しい。しかしながら、主体部

(小竪穴式石室)の東側で確認できた盛土の一部とみられる堆積から少なからず墳丘があったものと考えられるし、石室の天井部が全く残存していなかったことからそれを推測することもできよう。現況で墳丘の規模を推測すると、主体部の西側にみられる等高線が比較的緩やかになっているところを裾部と考え、直径11.80mの円墳であったとみることはできるのではなかろうか。主体部

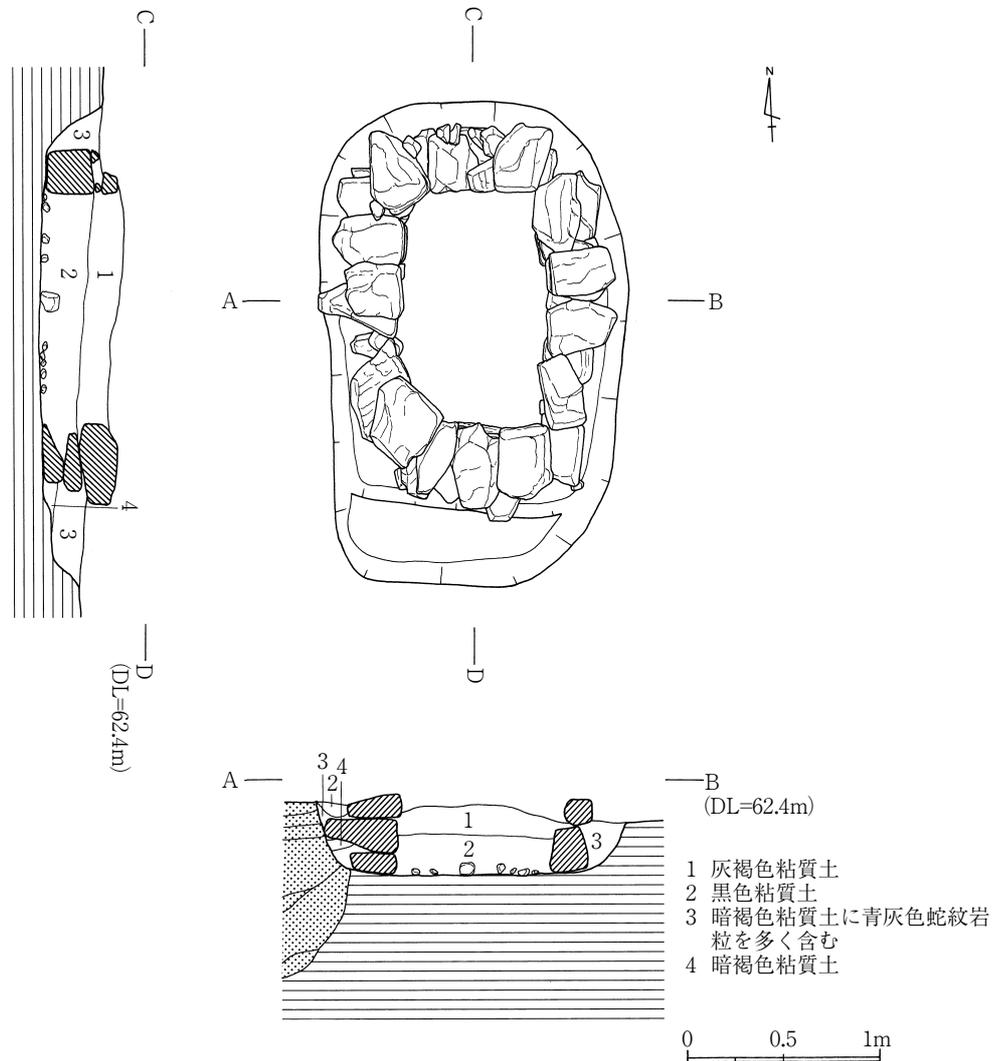


Fig.25 長畝3号墳主体部(小竪穴式石室)平面図

の東側で認められた盛土は、礫混暗褐色粘質土と礫混黄褐色粘質土であり、実際は版築状にしていたものと考えられる。

墳丘の高さは、主体部の残存状況からみて少なくとも検出面から1m程度はあったものと推察される。

② 主体部の構造

遺構はまず、隅丸方形の墓坑を掘削した後、北の側壁を基準に小竪穴式石室を構築しており、南側の底面は40cm余している。主体部は西半分が地山の蛇紋岩の岩盤、東半分が黒ボク層と青灰色粘性砂礫土層（蛇紋岩の風化土）を掘削していた。墓坑の規模は長辺2.52m、短辺1.50m、深さ0.44mを測り、主軸方向はN-4°34'-W。これらの数値は検出面からの数値であり、もとの規模はこれより大き

かったはずである。石室の規模は長さ最大1.23m、同最小1.28m、幅最大0.80m、同最小0.68m、残存高0.45mを測る。石室はチャートの塊石を使用して横置きに段積みしている。基底石は北壁と南壁が2石、東壁が4石、西壁が3石で、それぞれ横置きに据えた後、段積みし、各壁とも3段分が残存しており、上部の天井石は残存していなかった。なお、天井石に使用可能とみられる石が、山麓部に転がっており、開墾の際取り除かれ、何らかに転用されたものと考えられる。

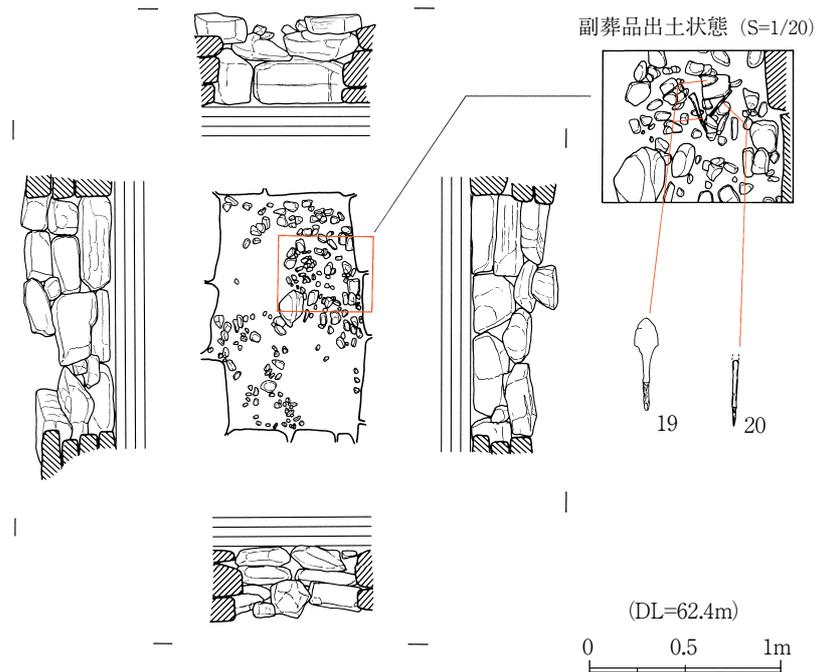


Fig.26 長畝3号墳主体部(小竪穴式石室)平面・立面図

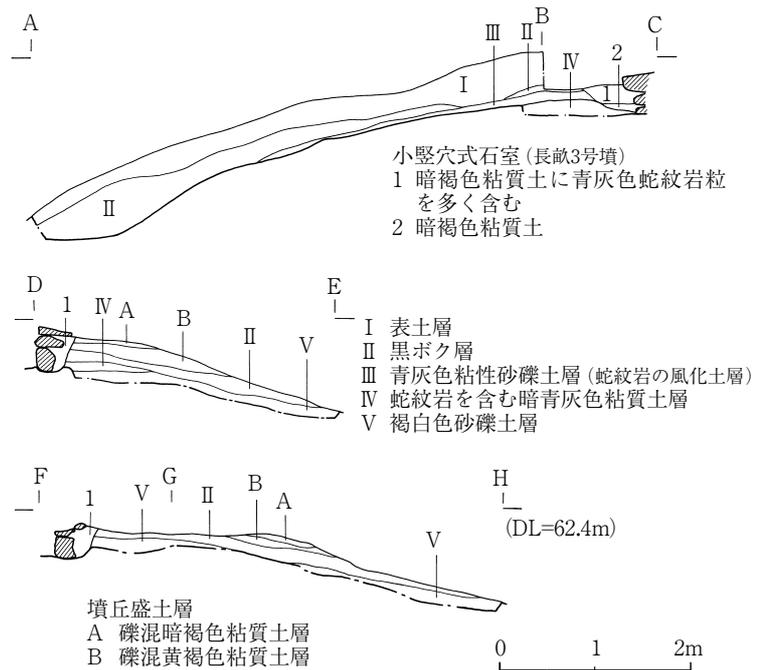


Fig.27 長畝3号墳サブトレンチセクション図

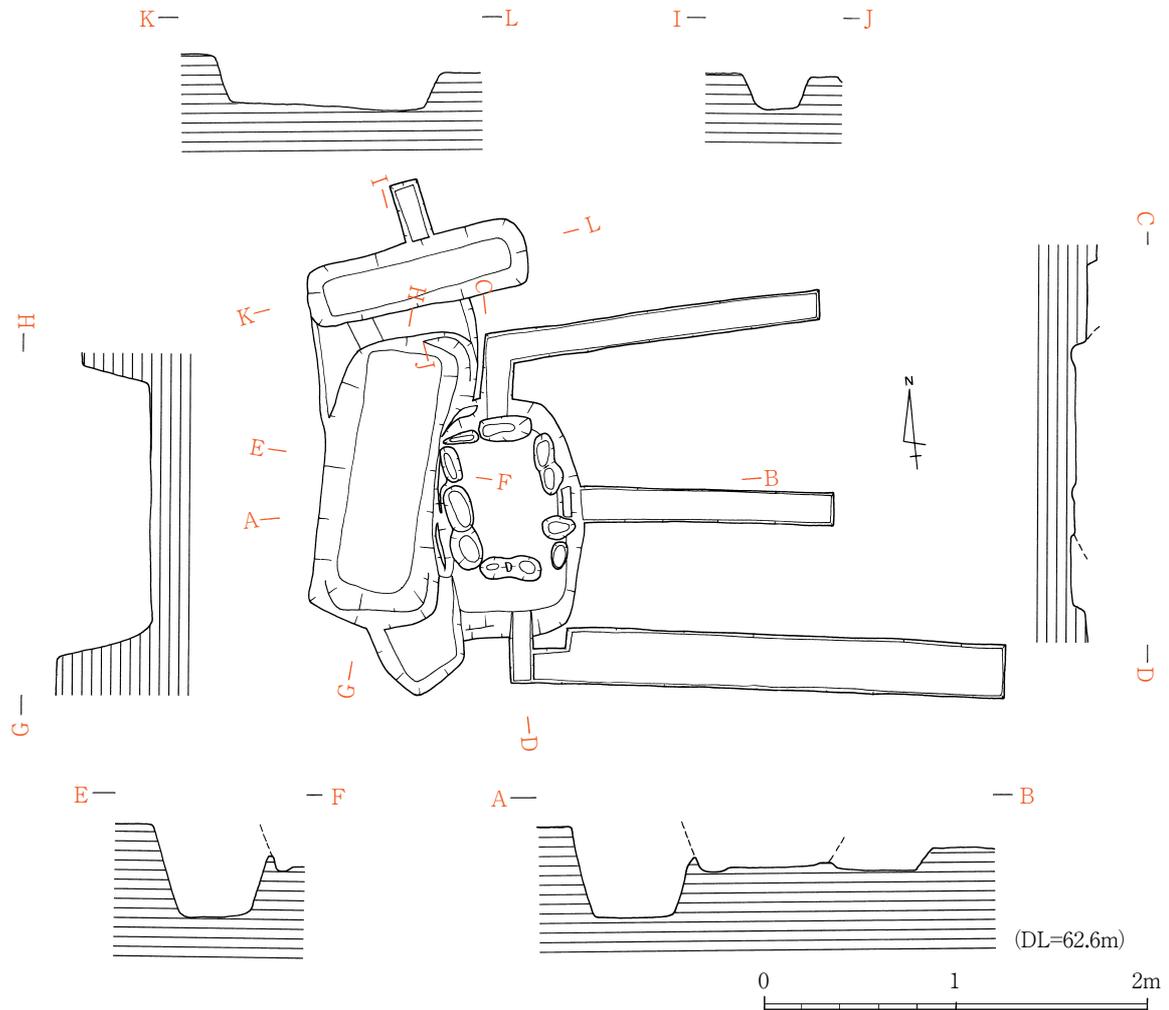


Fig.28 長畝2・3号墳主体部完掘状態平面図

石室の床面はほぼ平坦で、小さな河原石を敷いていた。また、石室内は流土で埋まっており上下二層に分層され、1層が灰褐色粘質土、2層が黒色粘質土となっていた。遺物は極めて少なく石室北東部の床面から鉄鏃2点と石室の掘方と石室の石の間からそれぞれ土師器片1点、埋土上層から7点の土師器の細片が出土したのみである。

③ 副葬品

鉄製武具

i 鉄鏃 (Fig.29-19・20)

鉄鏃には2点あり、三角形鏃 (Fig.29-19) と長頸鏃 (Fig.29-20) である。

19は茎の基部が僅かに欠損する以外、ほぼ原形を留めている。残存長12.3cm、鏃身長3.6cm、頸部長5.0cmを測り、茎に木質の装着部が残存している。刃部は鋒より丸味を有し、頸部は斜行をなし関に至る。関は台形関で、よく原形を留めている。刃部は扁平な両丸

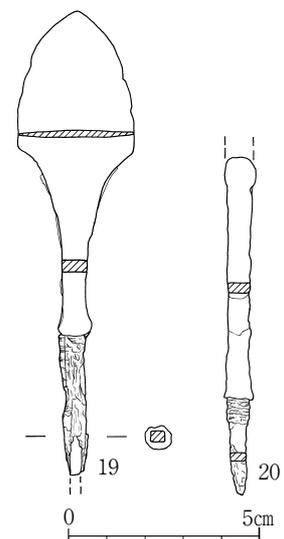


Fig.29 小竪穴式石室 (長畝3号墳) 出土鉄鏃

造である。茎の残存長は3.7cmで、断面方形をなす。20は長頸鏃の頸部と茎部が残存するもので、残存長8.9cm、残存する頸部長は6.4cmで、直線的に延び関に至る。断面は方形をなす。関は台形関で、よく原形を留めている。茎は長さ2.5cmを測り、断面方形をなし、基部が細くなる。また、部分的に皮質が付着している。

④ その他の遺物

先述のように主体部の掘方と石室の石の間から出土した土師器と埋土中から出土した土師器の細片7点があった。これら土師器片については胎土からそれと判断される程度で、原形を復元することはできなかった。残存する形状からすると甕の胴部の破片とみられる。

(3) 長畝4号墳

本古墳は、当初長畝3号墳として調査を開始した時その形状から前方部ではないかと考えられていた部分で新たに確認したもので、Aトレンチの調査において古墳の盛土とみられる部分が確認され、さらに西の尾根上から古墳を区画するとみられる溝状の遺構が検出されたことからその盛土は前方部の盛土であり、その溝状の遺構は前方後円墳と尾根とを区画するものとみられたが、サブトレンチにおいて新たな主体部そしてその東側で周溝の一部が確認され、独立した一古墳であると判断するに至った。

本古墳は、西の山頂から続く尾根が尾根先端に向かって高くなる付根部分に築造されており、西の尾根側を明確に区画しているのに対し東側は簡単な周溝で区画する程度で、その等高線も墳形を明瞭にトレースするものにはなっていない。なお、築造に関わる事項については考察に譲り、ここでは現況で認められる事柄について以下に記す。

① 墳丘の形態

本古墳の場合は、長畝2・3号墳とは異なり、東側以外で等高線が墳形を表しており、かつ、周溝が、東側で2ヶ所、西側で1ヶ所認められ、ほぼ墳形を推察することができる。また、盛土も主体部周囲で確認できる。これらのことから本古墳は、直径10.1mの円墳で、周溝を含めた規模は東西13.8m、南北11.6mとやや楕円形を呈する。高さは現況で1.7mで、復元高は約2.5mではないかと推測される。主体部は墳丘のほぼ中央部に北西方向に開口する初期横穴式石室を構築していた。この初期横穴式石室は竪穴系横口式石室の系統を引くものと考えられる。盛土は残存状況の良いところで約40cm確認され、地山の蛇紋岩と黄色砂礫土の岩粒を混ぜた褐色～暗褐色粘質土と黒色粘質土の交互に盛った版築状を呈していた。

周溝

古墳の北東側、南東側、西側の3ヶ所で確認された。まず、北東側の周溝は明灰色粘性砂礫土層を掘削しており、長さ2.7m、幅0.9～1.2mで墳形に沿ってやや弧状をなす。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。南東側の周溝は蛇紋岩の岩盤と赤色粘性砂礫土層を掘削しており、長さ4.3m、幅0.9～1.0mで墳形に沿ってやや弧状をなす。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。西側で検出したものは周溝と墓前祭祀用の土坑とを合わせ持った形状となり、完掘状態では不

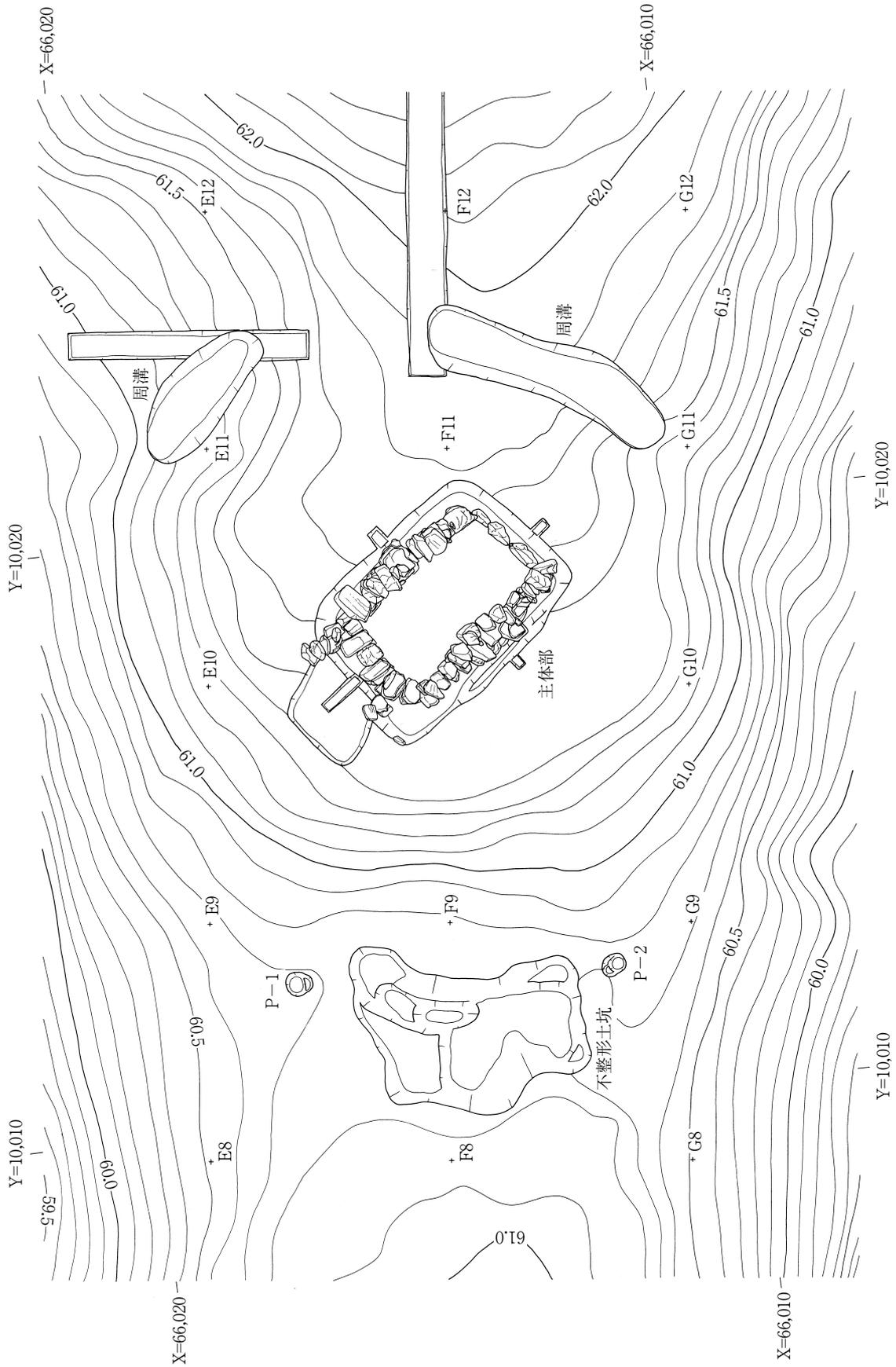


Fig.30 長畝4号墳平面図

整形を呈する。詳細は事項で記すが、溝状になす部分が認められることから周溝としての機能も果していたものと考えられる。

不整形土坑

古墳西側の蛇紋岩の岩盤上面で検出した遺構で、長辺3.8m、短辺2.3mを測り、形状的には不整形をなす。ただし、遺構の状態からみれば溝状の周溝に不整形の土坑が取り付け、一つになったものと考えた方がよいのではなかろうか。遺構の東側には周溝の一部と考えられる溝状の掘り込みがみられ、西側は一段高い平場を設けている。遺物は散在して出土した。埋土は二層に分層でき、上層が蛇紋岩粒を若干含む暗黄褐色粘質土で下層が同じく蛇紋岩粒を若干含む黒色粘質土であった。堆積状態からみれば先に東側の溝状部分が埋まってから不整形の土坑が掘削された可能性も考えられる。また、この遺構の両側から柱穴が検出されている。

柱穴

不整形土坑の南北両側から各1個ずつ検出され、それぞれ掘り換えを行っている。北側の柱穴は明灰色粘性砂礫土層上面で検出され、新しい方が径40cmの円形で深さ22cm、古い方は径約35cmで深さ11cmを測る。埋土は同じで、上層が黒色粘質土、下層が礫混暗黄褐色粘質土であった。一方、南側の柱穴は赤色粘性砂礫土層上面で検出され、新しい方が径28～34cmの楕円形で深さ36cm、古い方は径約35cmで深さ27cmを測る。埋土は同じで、礫混黄褐色粘質土であった。

このような状況からみてこの南北の柱穴は、墓前祭祀に関係したものとみられ、門として柱を建てていたのではないかと推測される。

② 主体部の構造

竪穴系横口式石室の影響が考えられる単室両袖型の初期横穴式石室である。主軸方向をN-41°52'-Wにとり、北西方向の谷部に向かって開口する。石室の中心が墳丘の中央より東寄りにあり、石室基底面は、東側の周溝底の最高所より0.83m低く、西側の周溝底の最高所より0.66m高くなっている。石室は玄室が腰石上に5段、羨道の右側壁が腰石上に3段の石積みを残していた。

石室の掘方は、西壁が東壁に比べやや広い西壁を下底とする台形状に羨道部より1段低く掘削しており、羨道底面と玄室底面との比高差は0.36mとなっている。玄室の掘方の長さは3.39～4.06m、幅2.75～3.07mを測り、基盤である蛇紋岩の岩盤から0.74m掘り込んでいた。

石室は、玄室で奥壁と玄門部が掘方一杯、側壁がやや余裕を持たせて、羨道部で掘方の肩に沿わせて構築していた。石材はほとんどが小竪穴式石室と同じチャートで、ごく一部に砂岩を使用していた。石室と掘方の間は比較的幅のある部分は青灰色砂礫土と赤褐色砂礫土が互層に堆積し版築状を呈する部分もみられるが、間隔の狭い部分は礫混黒色粘質土単一層となっていた。

玄室は平面形が長方形で、中央長5.45m、奥幅2.88m、中央幅3.40m、前幅2.85mを測り、長辺の中央部がやや広がる胴張りを呈す。周壁は奥壁に3枚の石を縦位に立て、両側壁は6

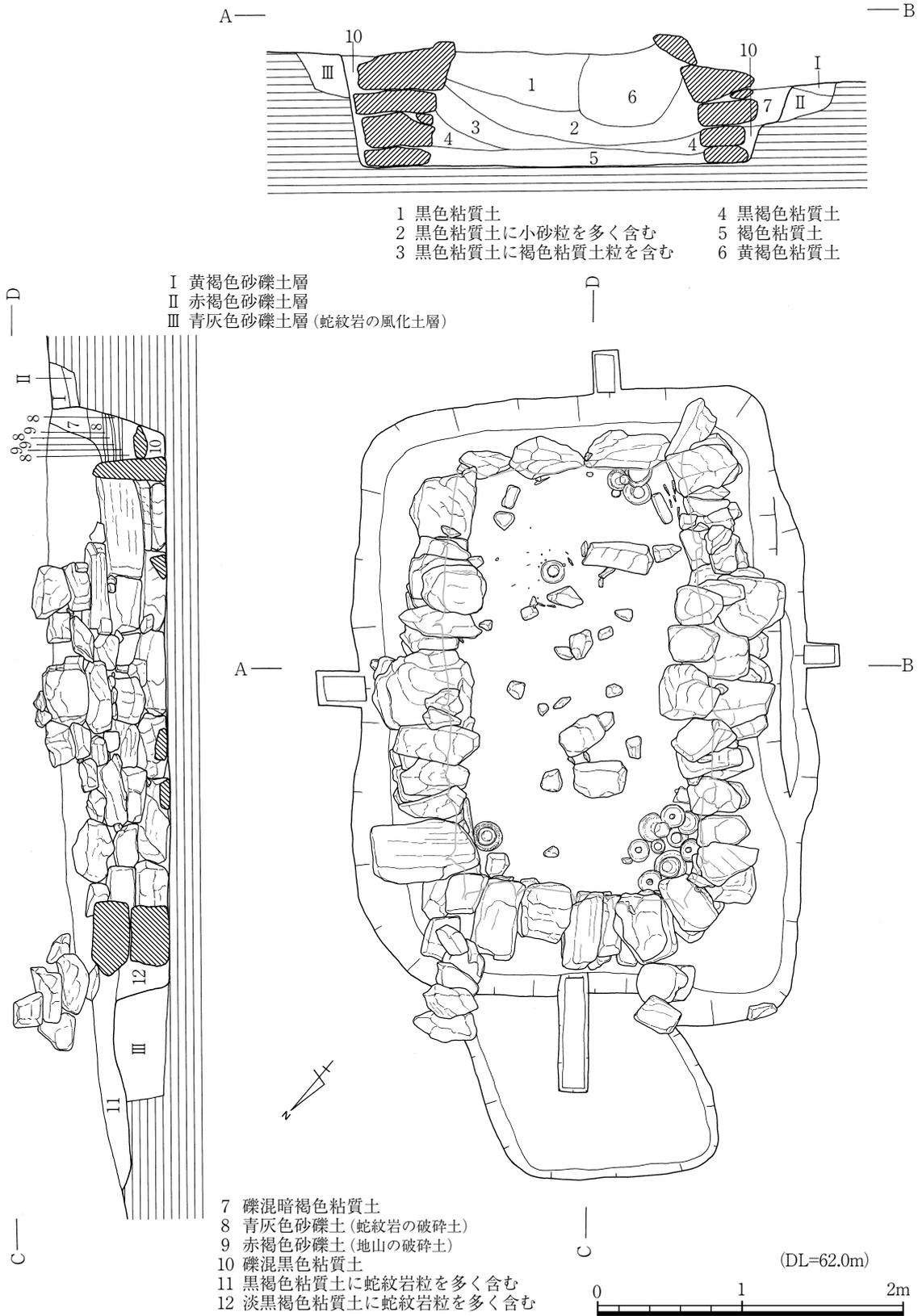


Fig.31 長畝4号墳主体部(横穴式石室)平面図

枚の石を腰石とした上に塊石を各5段平積みも見られるものの概ね小口積みし、根石、裏込め石はほとんどみられない。また、石と石の間隙には礫を入れ塞いでいる。玄室の四隅は袖石右隅が直角である以外は95~120度と鈍角となっている。壁面の残存高は0.81~1.79mで、奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが、側壁は持送りが顕著で横断面は穹隆状をなす。

玄門は、石の据え方からみて両袖石と地山削り出しによる35cmの段により形成されており、幅1.57mを測る。両袖石は右側が2枚、左側が3枚の石を平積みしている。その間に平積みないし小口積みあるいは落とし込みによって閉塞している。床面は蛇紋岩の岩盤の上に小石を敷き、左側奥壁寄りに長さ90cm、幅45cm、厚さ19cmの細長い石、左側玄門寄りに長さ70cm、幅40cm、厚さ14cmと長さ50cm、幅45cm、厚さ11cmの比較的大きな石が据えられており、その状態から棺台に使用されたものと考えられる。周りには補助的に使用

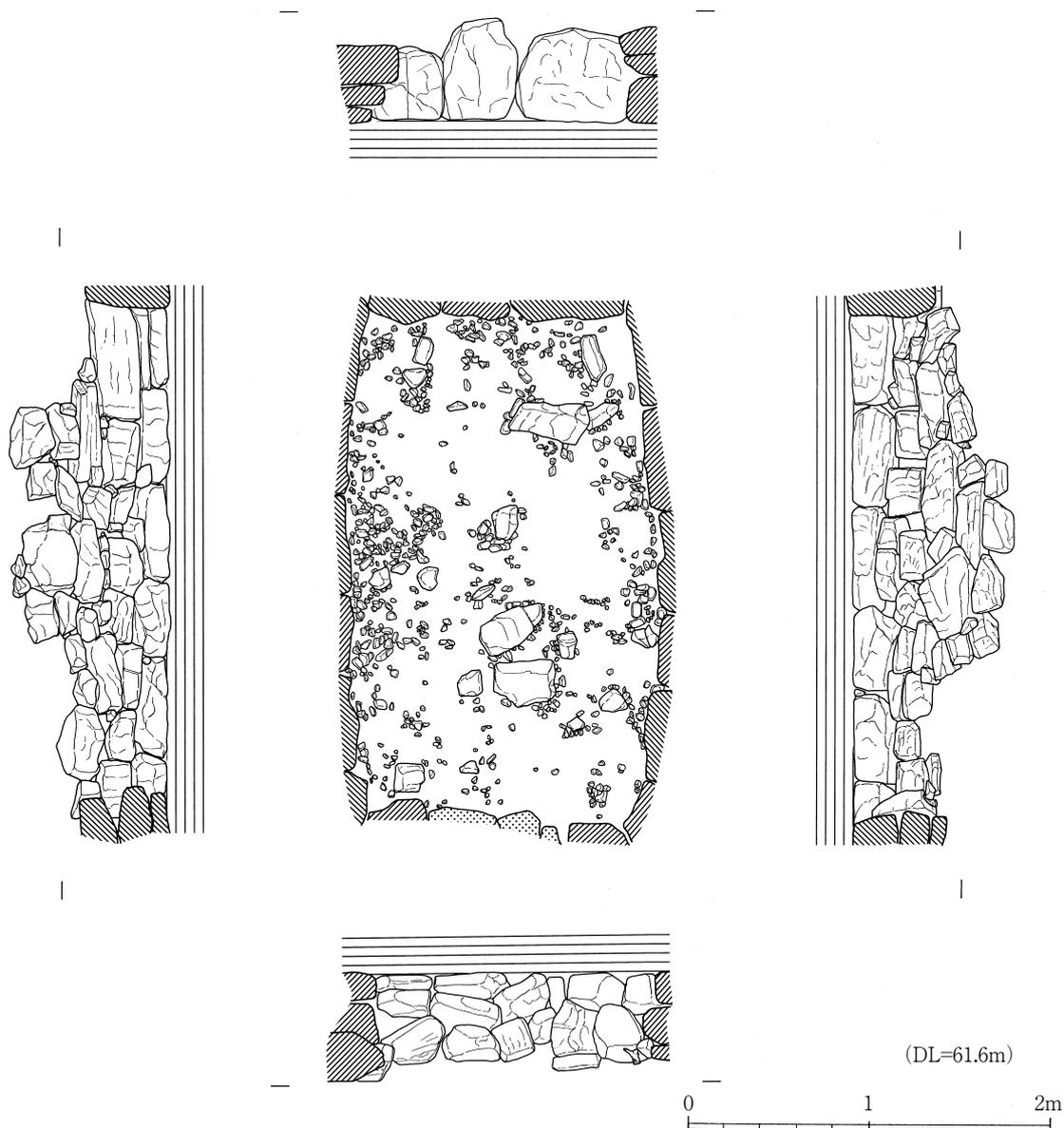


Fig.32 長畝4号墳主体部（横穴式石室）平面・立面図

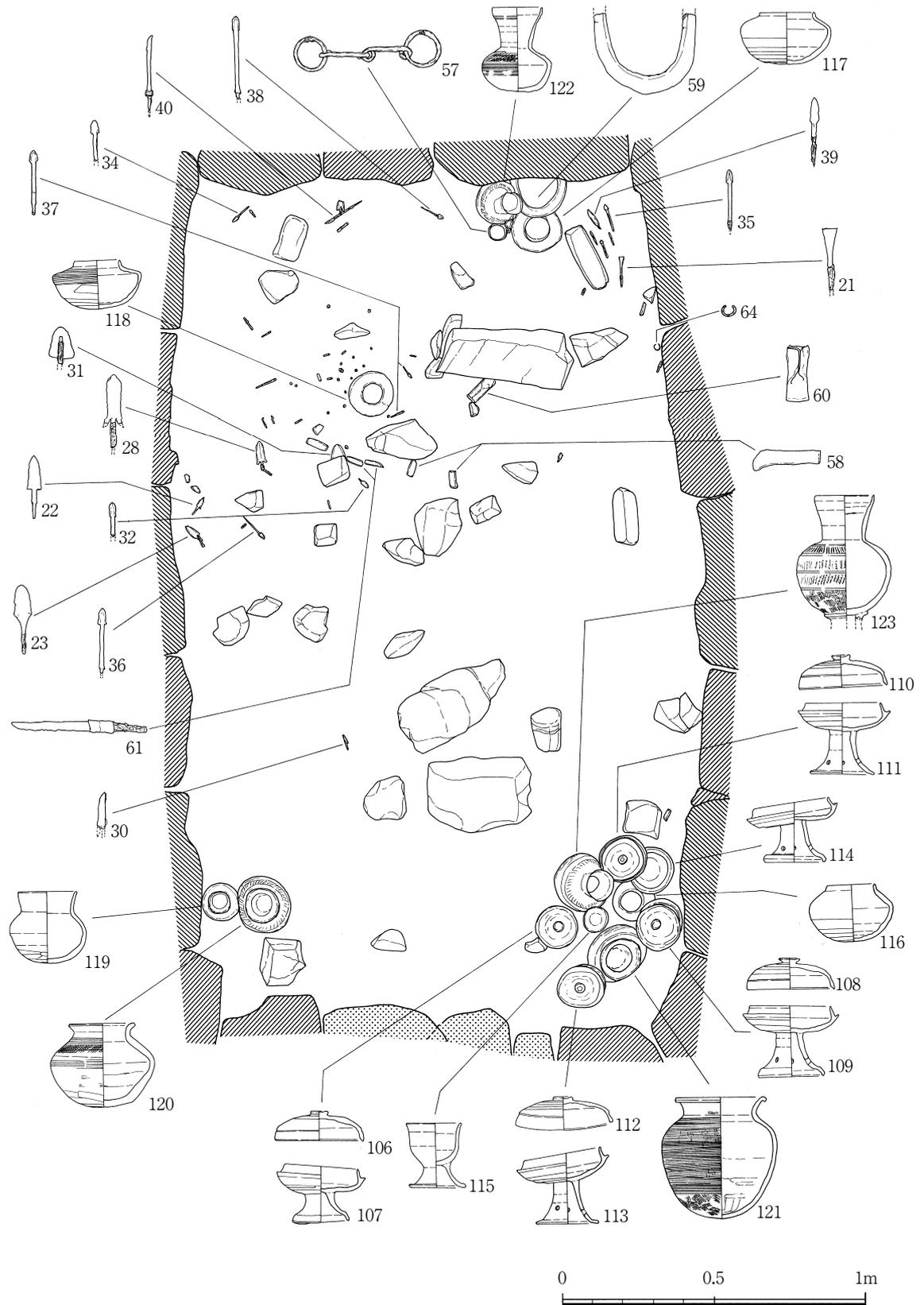


Fig.33 長畝4号墳主体部（横穴式石室）副葬品出土状態

されたとみられる人頭大の石もみられる。

また、玄室は天井石がないことから土で埋まっており、その埋土は六層に分層される。その内純然たる埋土は五層（1層は黒色粘質土、2層は小砂粒を多く含む黒色粘質土、3層は褐色粘質土粒を含む黒色粘質土、4層は黒褐色粘質土、5層は褐色粘質土）で、6層の黄褐色粘質土は盗掘坑の跡ではなかろうか。開墾の時に天井石が取り除かれた際に掘り込まれたものではなかろうか。

羨道は長さ1.25m、幅1.42mを測り、玄室に向かって若干傾斜している。側壁は右側が腰石の上に塊石を平積みし、左側は腰石1枚が残っていた。埋土は上下二層に分層され、上層が蛇紋岩粒を多く含む黒褐色粘質土、下層が蛇紋岩粒を多く含む淡黒褐色粘質土となっていた。

副葬品には須恵器を始め、鉄製武器、鉄製工具、装飾品等がみられた。まず、玄室の入口左側に高杯5、長頸壺1、短頸壺1、広口壺1、台付椀（グラス形土器）1、同右側に広口壺2が副葬されていた。奥壁左隅に鉄鏃、奥壁と棺台とみられる石の間には長頸壺1、短頸壺1、鉄製鋤先、馬具等が副葬されていた。また、玄室右側奥壁よりに管玉、ガラス小玉を始めとする装飾品、短頸壺1、鉄鏃とがみられ、奥壁に近い左側壁際で銀環1が検出された。全体的には棺を安置していたとみられる部分には副葬品は少なく、奥壁に近い棺周辺と玄室入り口の左右に副葬されていた。

③ 副葬品

副葬品には鉄鏃などの鉄製武器、馬具、鉄製工具、装飾品、須恵器などがみられる。

鉄製武器

i 鉄鏃 (Fig.35・36-21~56)

鉄鏃には方頭鏃(21)、三角形鏃(22~27)、腸袂三角形鏃(28・29)、片刃鏃(30)、無茎鏃(31)、長茎鏃(32~56)がみられる。

21は方頭鏃で、残存長10.3cm、鏃身長6.3cmを測り、茎には木質の装着部が残存する。刃部は一部を欠くが方頭で、平造りとなり断面は方形をなす。鏃身部関は両角関とみられる。茎の長さは木質が残存するため明確ではないが2.5cmまで確認でき、断面は方形をなす。22は三角

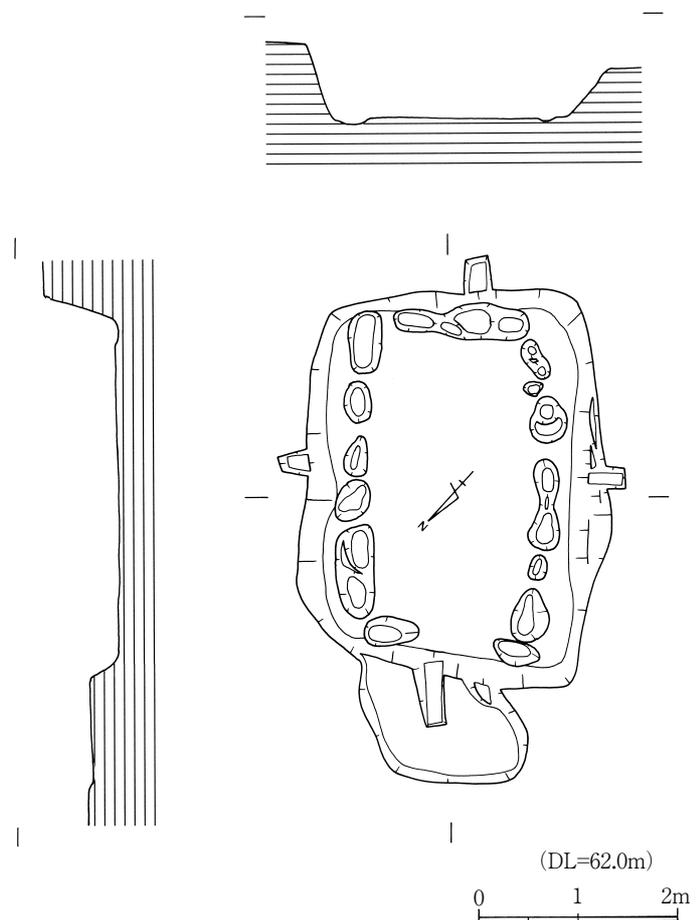


Fig.34 長畝4号墳主体部（横穴式石室）完掘状態平面図

形鏃で、残存長10.4cm、鏃身長5.6cmを測り、茎基部を欠いている。刃部は三角形をなし、直線的にやや広がって鏃身関に至る。鏃身は両丸造りで、鏃身関は角関でやや逆刺的形態ともみれる。頸部は長さ2.4cmを測り、直線的に関に向かってやや広がり、断面は方形をなす。関は角関である。茎は約2.0cm残存し、断面は正方形に近い。23も三角形鏃で、残存長11.6cm、鏃身長4.9cm、頸部長3.4cmを測り、茎には木質の装着部が残存する。刃部は鋒から丸味を有した後、頸部は斜行して関に至る。鏃身は片丸造りで、頸部断面は方形をなし、関部は台形関となる。茎の残存長は3.3cmで断面はほぼ正方形である。24も三角形鏃で、残存長6.7cm、鏃身長5.6cmを測り、頸部の途中から欠損する。刃部は三角形をなし、直線的にやや広がり斜行する頸部に至る。鏃身は両丸造りである。25は一部に鏃身部が残存し、表面には木質(桜の皮)と皮質が残存する。鏃身は両丸造りとみられる。頸部と茎部の形状は木質が残存するため明確ではない。茎の断面は方形をなす。26・27は三角形鏃の茎とみられるが、鏃身部を欠損し明確ではない。26には木質が残存し、茎の断面は方形をなす。27も木質が残存する茎の一部で、断面はほぼ正方形をなす。28は腸袂三角形鏃で、残存長12.4cmを測り、逆刺部の先端と茎の基部が欠損する。刃部は三角形をなした後、やや幅を狭めほぼ直線的に逆刺に至る。逆刺は大きく外反するが先端を欠く。鏃身は両丸造りである。頸部の途中から木質と布が残存するため、関の形状は不明である。頸部の断面は方形、茎の断面はほぼ正方形をなす。29も腸袂三角形鏃であるが、鏃身の約1/2が欠損する。残存長は8.9cmで、茎には木質が残存する。鏃身は両丸造りで、逆刺は斜めに開いた後、さらに外に開く。頸部は長さ2.7cmで、ほぼ直線的にのび関に至る。断面は方形をなし、幅は頸部付け根より関の方が広い。関は角関である。茎の長さは4.0cmで、木質が残存する。断面は方形をなす。30は片刃鏃で、頸部以下が欠損する。鏃身長は逆刺が欠損するが、7.5cm前後とみられる。鋒はフクラ枯状をなした後、やや幅を増し刃部を形成する。鏃身はほぼ刀子形を呈し、片平刃造りとなる。逆刺と頸部は付け根のみ残存する。31は無茎鏃で、残存長6.3cm、鏃身長5.3cmを測り、木質の装着部が残存する。鏃身は三角形状を呈し、両切刃造りとなり、方形の透かし穴を有す。32は長茎鏃で、残存長5.6cm、鏃身長2.4cmを測り、頸部の大半が欠損する。鏃身は三角形状を呈し、両丸造りとなり、関は角関である。頸部は長く、断面は方形をなす。33も長茎鏃で、残存長9.2cmを測り、茎には木質が残存する。鏃身はその大半を欠くが三角形状を呈するとみられ、両丸造りとなり、関は角関である。頸部は長さ7.4cmで、断面は方形をなし、関は角関となる。木質の残る茎は0.9cmが残存し、断面は方形をなす。34も長茎鏃で、残存長6.9cm、鏃身長2.1cmを測る。鏃身は三角形状を呈し、片丸造りとなり、関は角関である。頸部は4.8cmが残存し、断面は方形をなす。35も長茎鏃で、残存長10.0cm、鏃身長2.2cmを測り、茎には木質が残存する。鏃身は三角形状を呈し、片丸造りとなり、関は角関である。頸部は長さ約6.7cmとみられ、断面は方形をなす。関から茎にかけては木質が残り、形状は明確ではないが、茎の断面は方形をなす。36も長茎鏃で、残存長10.8cm、鏃身長2.8cmを測る。鏃身は三角形状を呈し、片丸造りとなり、関は角関である。頸部は長さ7.4cmを測り、断面は方形をなす。関は台形関となる。茎は0.6cmが残り、断面は方形をなす。37も長茎鏃で、残存長10.9cm、鏃身長2.0cmを測る。鏃身は三角形状を呈し、片丸造りと

なり、関は銹化が進むが角関とみられる。頸部は長さ7.2cmを測り、断面は方形をなし、関は台形関となる。茎は1.7cmが残り、断面は方形をなす。38も長茎鏃で、残存長13.7cm、鏃身長2.4cmを測る。鏃身は三角形状を呈し、片丸造りとなり、関は角関である。頸部は長さ10.4cmを測り、断面は方形で、関は台形関となる。茎は0.9cmが残り、断面は方形をなす。39は長三

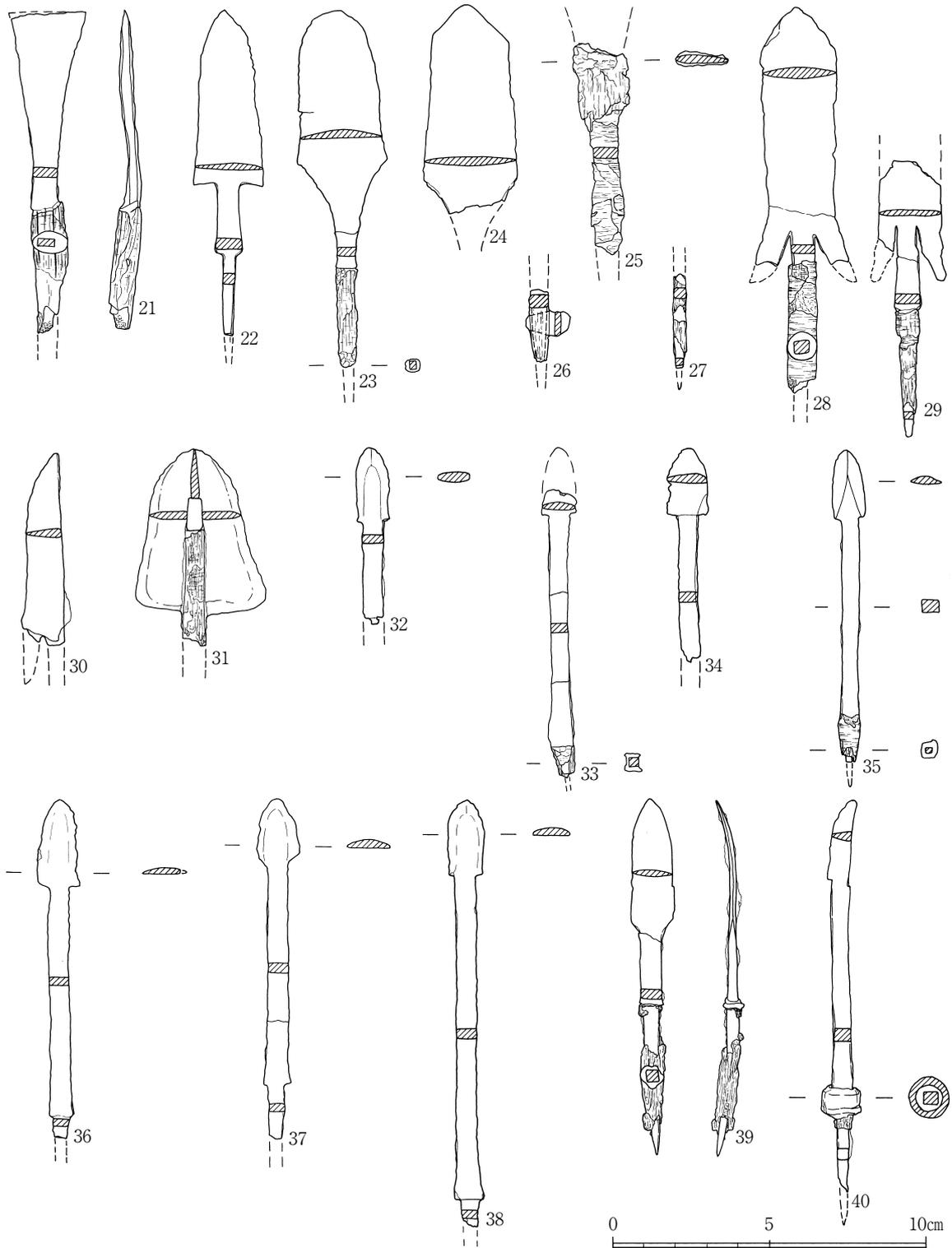


Fig.35 横穴式石室（長畝4号墳）出土鉄鏃 1

角形の鍬身を有する長茎鍬であり、全長11.4cm、鍬身長4.4cmを測り、関から茎にかけて木質が残存する。鍬身は両丸造りで、関は斜関となり、やや反っている。頸部は長さ約2.6cmで、断面は方形をなし、関は角関とみられる。茎は長さ4.4cmを測り、断面はほぼ正方形をなす。40は片刃の鍬身を有する長三角形鍬で、残存長12.5cm、鍬身長2.5cmを測り、関部に木質が残存する。鍬身は平片刃造りで、関は角関である。頸部は長さ約7.0cmで、断面は方形をなす。茎は約3.0cmが残り、断面はほぼ正方形をなす。41～56は鍬身部が欠損し、頸部から茎部が残存するもので、形態的には長頸鍬とみられるが、残部が少なく明確ではないものもある。41は残存長8.4cmを測り、頸部の付け根が欠損する。頸部は4.5cmが残り、断面は方形をなし、関は角関である。茎は長さ3.9cmで、断面はほぼ正方形をなし、付け根部分を中心に木質が残存する。42もほぼ同じ部分が残存し、残存長7.5cmを測る。頸部は4.2cmが残存し、断面は方形をなし、関部の幅がやや広い。茎は3.3cmが残り、断面は方形をなし、木質(桜の皮)が残存する。43は頸部と茎の一部が残存し、残存長は5.1cmを測る。頸部は直線的にのび、断面は方形をなし、関は明瞭な台形関である。茎は2.4cmが残り、断面は方形をなし、付け根部分に木質が残存する。44も同じ部分が残存し、残存長4.7cmを測る。頸部は比較的太く断面は正方形に近い方形をなし、関は角関である。茎は2.8cmが残り、断面はほぼ正方形で木質(桜の皮)が残存する。45は茎の破片で、残存長3.0cmを測り、断面はほぼ正方形をなし、部分的に木質が残存する。46も同じく茎の破片で、残存長3.0cmを測り、断面は方形をなし、木質と皮質が残存する。47は二つに破損した茎が残存し、推定残存長5.4cmを測る。茎の断面は方形をなす。48は頸部の破片とみられるもので残存長7.1cmを測り、断面は方形をなす。49も頸部の破片とみられるもので、4.7cmが残存し、断面は方形をなす。50は茎の破片で、3.7cmが残存し、断面は方形をなす。51も茎の破片で、3.8cmが残存し、断面はほぼ正方形をなす。52も同じく茎の破片で、4.4cmが残存し、断面はほぼ正方形をなし、木質が残る。53も茎の破片で、3.7cmが残存し、断面は方形をなし、一部に木質と皮質が残る。54も茎の破片で、2.5cmが残存し、断面は方形をなす。木質(桜の皮)が比較的良く残る。55は茎の先端で、1.3cmが残存し、断面は円形をなし、木質が残る。56も茎の破片で、2.8cmが残存し、断面は方形をなし、先端が曲がる。

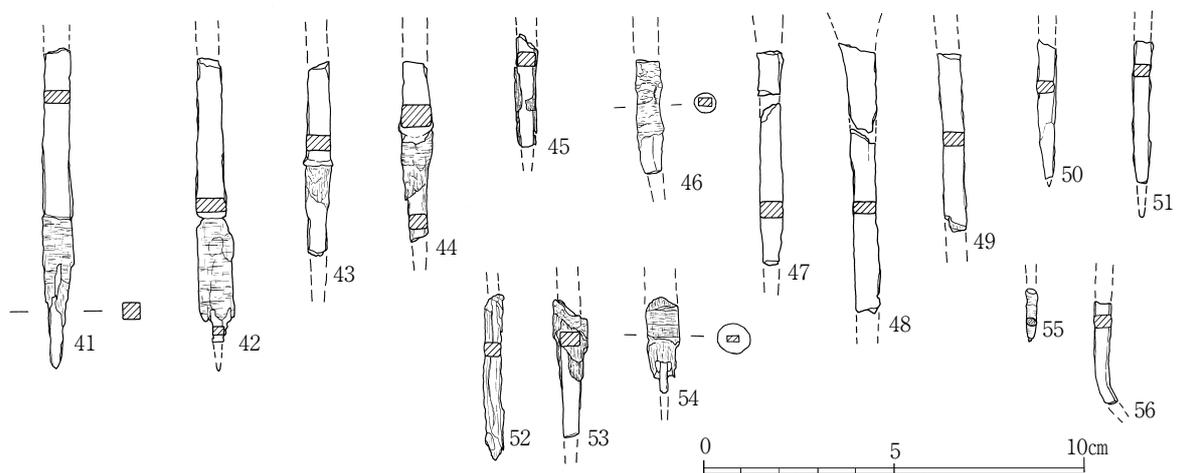


Fig.36 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鍬 2

馬具

i 轡 (Fig.37-57)

銜と環状の鏡板が残存し、鏡板には皮質が付着している。銜は径0.7cmの鉄棒の両端を丸めて繋ぎ合らし、さらに環状の鏡板とも繋いでいる。鏡板は銜とほぼ同じ鉄棒を環状にしたもので、径は0.5~0.6cmを測る。引手は欠損する。

鉄製工具

i 鉄鎌 (Fig.37-58)

小形の曲刃鎌で、全長11.4cm、刃部長10.5cm、刃部幅2.6cm、重量17.7g(保存処理をした状態での計測)を測る。刃部は長方形板の先端だけを尖らせ下方に曲げたもので、厚さ0.3cmを測る。基部の折返の角度は鈍角で、折返部を上にして刃を手前に向けると柄は左側に付く。折返部の厚さは0.4cmである。

ii 鉄製鋤・鋤先 (Fig.37-59)

大形のU字形刃先で、一部基部を欠損する。残存長は13.7cm、刃幅は16.8cmを測る。刃部は大きく曲線を描くもので、厚さは0.2~0.5cmである。溝は断面V字型をなす。

iii 鉄斧 (Fig.37-60)

鍛造袋状鉄斧で、表面の錆化は進んでいるが、X線写真で見ると内部は全く錆化しておらず現況でも錆を落とせば使用可能な状態である。全長9.4cm、刃部幅3.8cm、厚さ(中央部)1.4cm、

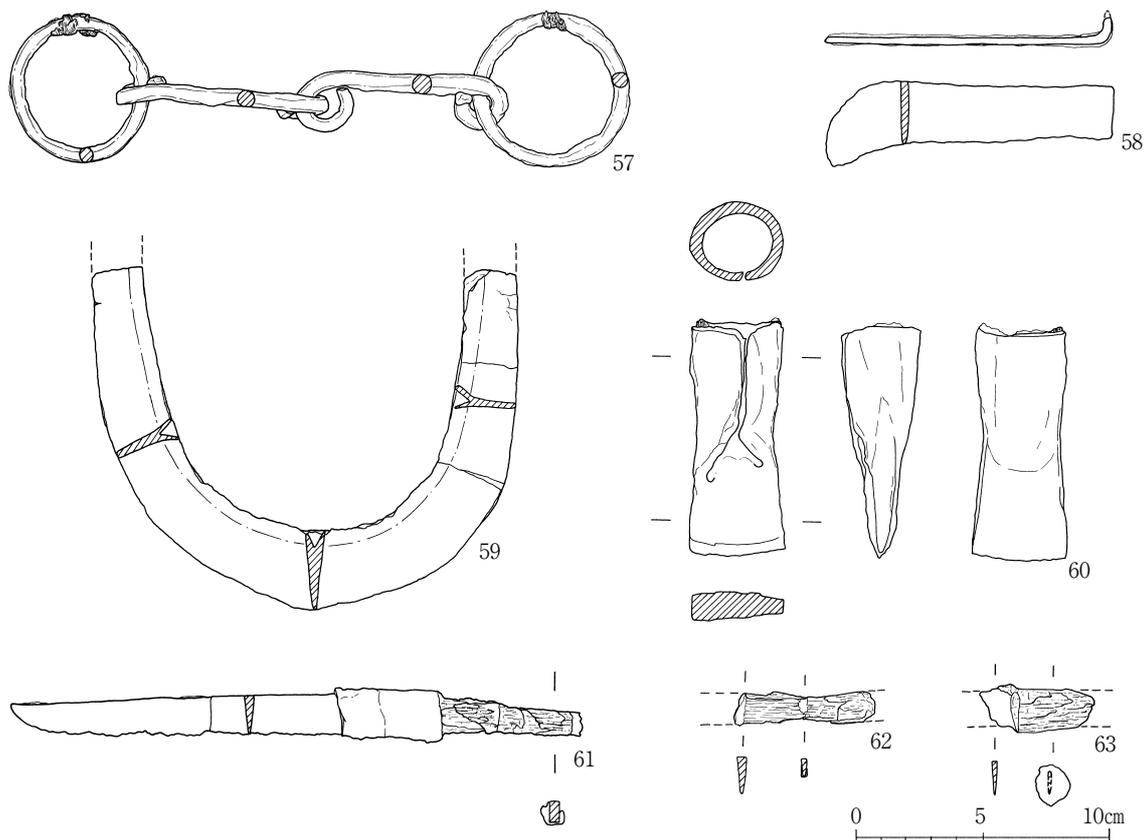


Fig.37 横穴式石室(長畝4号墳)出土馬具(轡), 鉄鎌, 鉄製鋤・鋤先, 鉄斧, 刀子

袋状上端の外径3.1×3.7cm, 内径2.3~2.8cmを測り, 重量は123.1g (保存処理をした状態での計測)である。袋部の合わせ目は0.1cm開いている。刃部は緩やかに曲がり, 左側が右側より摩滅しており, 袋開閉部を左主面とする縦斧の可能性が考えられる。袋部内面には部分的ではあるが木質が残存する。

iv 刀子 (Fig.37-61~63)

61は残存長22.5cm, 刃部長は16.9cmを測り, 茎には柄の木質が若干残っている。平造りで, 扁平な形姿をなし, 棟は平棟である。鋒はフクラ枯をなし, 刃部は刃毀れがみられるものの, ほぼ直線的にのび, 関に至る。茎は5.5cmが残存し, 断面は方形をなし, 柄の木質が若干残存する。62は関から茎にかけての破片で, 残存長は5.8cmである。刃部の棟は平棟とみられる。茎は約5.0cmが残存し, 断面は方形をなし, 柄の木質が残存している。63も同じく関から茎の破片で, 刃部の棟は平棟とみられる。茎は約3.0cmが残存し, 断面は扁平な方形をなし, 柄の木質が残る。

装身具

i 銀耳環 (Fig.38-64)

銀製の耳環で, 径0.2cmの銀の棒を環状に曲げている。外径は1.8~2.3cm, 内径は1.4~1.9cmを測り, 合わせ目は0.9cm開いている。重量は1.1gである。

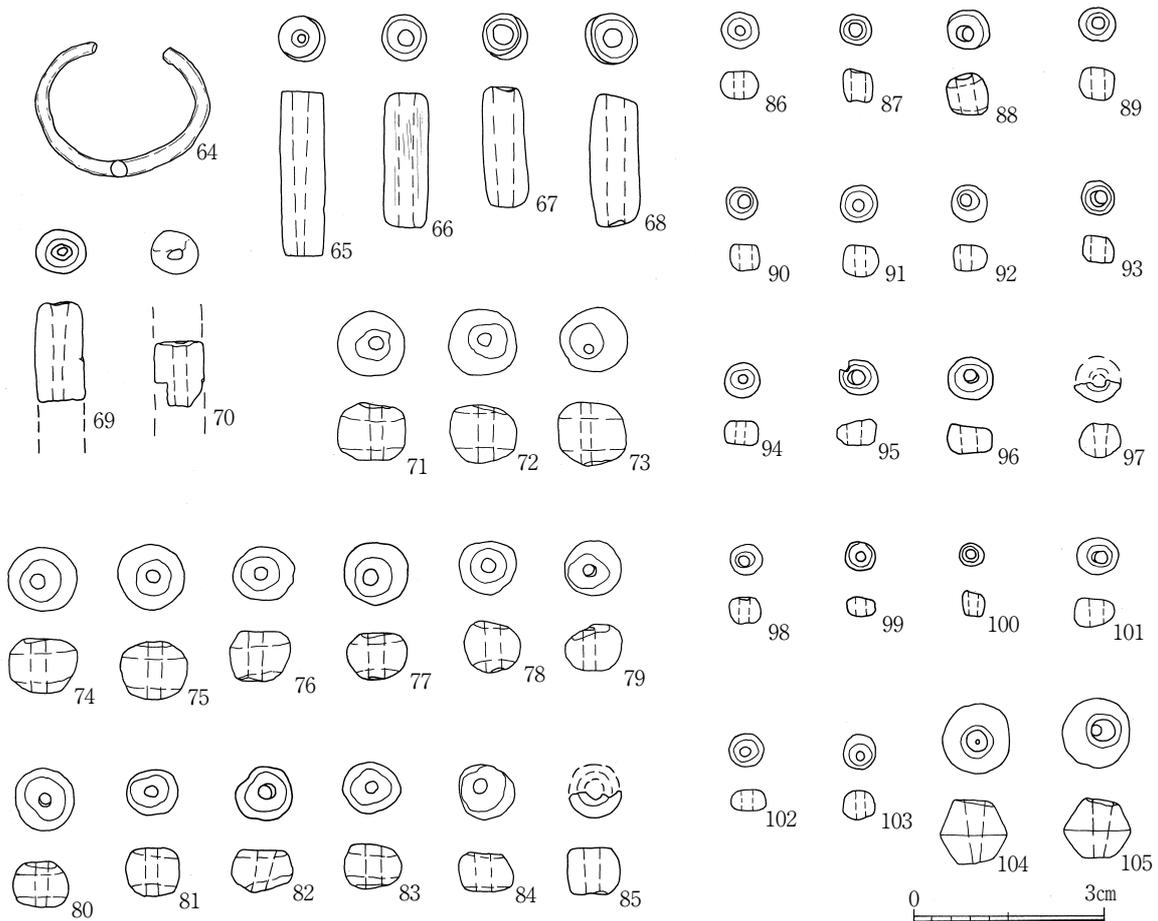


Fig.38 横穴式石室 (長畝4号墳) 出土玉類 (管玉, 練玉, ガラス小玉, ソロバン玉)

ii 管玉 (Fig.38-65~70)

6個体が出土している。65は碧玉製で他はガラス製で、色調は65がモスグリーン、66・67はダークブルー、68~70はブルーである。一番長いもので22.0mm、短いもので16.0mmある。65の孔は一方から穿っており、開け口の方が広がっている。他はガラス製であり、孔径は両方とも同じである。なお、個々の計測値はTab.3に記したので参照されたい。

iii 練玉 (Fig.38-71~85)

15個体が出土している。表面は黒色ないし暗灰色、断面は灰白色ないし灰色を呈す。側面の形状は円形をなすものから白形を呈するものまで比較的バラエティーに富む。これらの大きさは、直径7.0~9.0mmで、長さ5.0~8.5mm、孔径1.5~2.0mmを測り、重さは0.28~0.60gである。なお、個々の計測値はTab.3に記したので参照されたい。

iv ガラス小玉 (Fig.38-86~103)

18個体が出土している。まず、色調はダークブルーを呈するもの(86)、コバルトブルーを呈するもの(87~90)、ブルーを呈するもの(91~95)、グリーンを呈するもの(96~99)、ライトグリーンを呈するもの(100)、イエローを呈するもの(101~103)がある。側面の形状は円形を呈するものや扁平で白状をなすものなど比較的バラエティーに富む。縁は丸味がある。これらの大きさは直径3.0~6.0mm、長さ3.0~5.5mm、孔径1.2~2.0mmを測り、重さは0.09~0.20gである。なお、個々の計測値はTab.3に記したので参照されたい。

v ソロバン玉 (Fig.38-104・105)

2個体が出土している。双方とも水晶製で、形状はほぼ算盤玉と同じで、断面形は六角形を呈す。大きさは直径9.0mm、長さ8.0~8.5mm、孔径は3.0mmを測る。孔は一方から穿っており、開け口の方が広がっている。なお、Tab.3にも計測値を記している。

須恵器

器種には、有蓋高杯、台付椀(ガラス形土器)、短頸壺、直口壺、広口壺、長頸壺がある。

i 有蓋高杯 (Fig.39-106~114)

副葬されていたのは、蓋が付いていた4セットと蓋が欠失していた高杯1個体の杯蓋4個と高杯5個であった。すべて玄室入り口部の北西隅にまとめて副葬されていた。また、副葬されていたセット(106と107, 108と109, 110と111, 112と113)と実際のセット(106と114, 107と108, 110と113, 111と112)とはすべて異なっていた。ここでは、副葬されていたセットで記述する。

106は口径14.6cm、器高5.0cm、稜径14.2cmを測る杯蓋で、口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁部高は2.0cmを測る。稜は小さな段となり、天井部はやや丸味を有し、天井部中央に扁平なボタン状つまみが付く。天井部外面約3/5には回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整で、天井部内面中央にはナデ調整を加えている。焼成は良好で、器面は暗青灰色ないし青灰色を呈する。107は口径12.1cm、受部径14.6cm、器高10.2cm、底径14.6cmを測る高杯で、歪みがみられる。杯部では立ち上がりは内傾してのび、端部は丸く仕上げられる。その高さは1.6cmを測る。受部はほぼ水平にのび、断面三角形を呈し、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、やや丸味を有す。底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整が施される。

Tab.3 管玉, 土玉, ガラス小玉, ソロバン玉計測表 () は残存長

挿図番号	直径 ()	長さ ()	孔径 ()	重量 (g)	備考
Fig.38-65	6.5	22.0	1.0~2.0	1.10	
Fig.38-66	6.0	1.78	2.0	1.00	
Fig.38-67	6.0	16.0	3.0	0.72	
Fig.38-68	6.5	17.5	2.5	0.93	
Fig.38-69	6.8	(13.2)	2.5	(0.70)	
Fig.38-70	6.2	(0.85)	1.7	(0.30)	
Fig.38-71	9.0	8.0	1.8	0.60	
Fig.38-72	9.0	8.0	2.0	0.60	
Fig.38-73	9.0	8.5	1.5	0.60	
Fig.38-74	9.0	7.0	2.0	0.55	
Fig.38-75	9.0	8.0	1.9	0.55	
Fig.38-76	8.0	6.5	1.8	0.40	
Fig.38-77	8.0	6.0	2.0	0.40	
Fig.38-78	7.5	7.0	2.0	0.38	
Fig.38-79	7.5	6.0	1.7	0.30	
Fig.38-80	8.0	6.0	2.0	0.30	
Fig.38-81	7.0	6.5	2.0	0.30	
Fig.38-82	8.0	6.0	3.0	0.30	
Fig.38-83	7.5	6.0	1.5	0.29	
Fig.38-84	7.0	5.0	2.0	0.28	
Fig.38-85	(7.0)	6.0	(2.0)	(0.10)	
Fig.38-86	5.0	3.5	1.5	0.10	
Fig.38-87	4.0	4.0	2.0	0.10	
Fig.38-88	5.8	5.5	2.0	0.20	
Fig.38-89	5.0	4.5	1.5	0.10	
Fig.38-90	4.0	3.5	2.0	0.10	
Fig.38-91	5.0	4.0	1.5	0.10	
Fig.38-92	5.0	3.5	1.5	0.10	
Fig.38-93	4.5	3.5	2.0	0.09	
Fig.38-94	4.5	3.0	1.2	0.10	
Fig.38-95	5.0	3.5	2.0	0.10	
Fig.38-96	6.0	4.0	2.0	0.18	
Fig.38-97	6.0	5.0	2.0	(0.08)	
Fig.38-98	4.3	3.5	1.2	0.09	
Fig.38-99	4.0	3.0	1.5	0.05	
Fig.38-100	3.0	3.5	1.5	0.05	
Fig.38-101	5.0	4.0	2.0	0.11	
Fig.38-102	4.8	3.0	1.5	0.10	
Fig.38-103	4.5	4.0	1.7	0.10	
Fig.38-104	9.0	8.5	1.0~3.0	0.80	
Fig.38-105	9.0	8.0	1.1~3.0	0.70	

脚台は外反して下った後、裾部で斜め下方に屈曲し、端部で下方を向く。端部は丸く仕上げられる。器面は回転ナデ調整で、底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、内外面とも灰褐色を呈する。108は口径14.4cm、器高5.1cm、稜径13.9cmを測る杯蓋で、口縁部は斜め下方にやや丸味を持って下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁部高は1.9cmを測る。稜は小さな段となり、天井部はやや丸味を有し、天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部外面約4/5には回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整で、天井部内面中央にはナデ調整を加えている。焼成は良好で、内外面とも灰褐色を呈する。109は口径13.6cm、受部径16.0cm、器高11.7cm、底径10.7cmを測る高杯で、杯部では立ち上がりは内傾してのび、端部は細く仕上げられる。その高さは1.4cmを測る。受部は斜め上方を向き、端部は細く仕上げられる。底部は比較的深く、やや丸みを有す。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整が施される。脚台は比較的高く、外反して下った後、裾部で斜め下方に屈曲し、端部で下方を向く。端部は丸く仕上げられる。脚台には径7.0cmの円形の透かし穴が三方に穿たれる。器面は回転ナデ調整で、底部

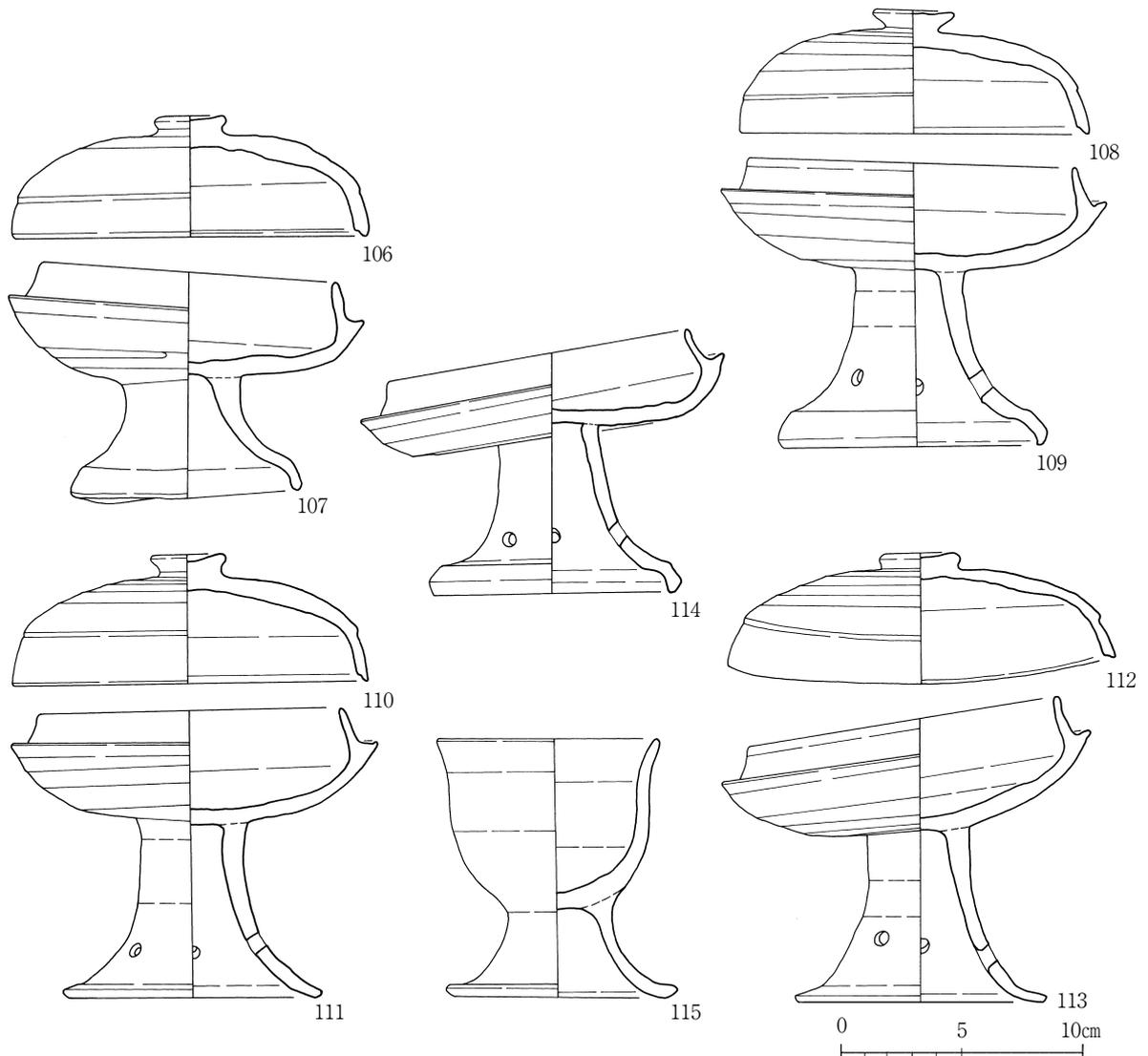


Fig.39 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯, 台付碗)

内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。110は口径14.8cm、器高5.3cm、稜径13.8cmを測る杯蓋で、口縁部は斜め下方に内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁部高は2.2cmを測る。稜は小さな段となり、天井部はやや丸味を有し、天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部外面約4/5には回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整で、天井部内面中央にはナデ調整を加えている。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。111は口径12.5cm、受部径15.2cm、器高11.9cm、底径10.4cmを測る高杯で、杯部では立ち上がりは内傾してのび、端部は丸く仕上げられる。その高さは1.5cmを測る。受部はほぼ水平にのび、断面三角形を呈し、端部は細く仕上げられる。底部は比較的深く、やや丸味を有す。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整が施される。脚台は比較的高く、外反して下りそのまま裾端部に至る。端部は丸く仕上げられる。脚台には径6.0cmの円形の透かし穴が三方に穿たれる。器面は回転ナデ調整で、底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、器面は灰褐色ないし暗青灰色を呈し、底部から脚台部外面には自然釉がかかり、全般にハダ荒れがみられる。112は口径16.1cm、器高5.4cm、稜径14.7cmを測る杯蓋で、口縁部を中心に歪みがみられる。口縁部は斜め下方にやや丸味を持って下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。口縁部高は1.8cmを測る。稜は小さな段となり、天井部はやや丸味を有し、天井部中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部外面約4/5には回転ヘラ削りが施される。他は回転ナデ調整で、天井部内面中央にはナデ調整を加えている。焼成は良好で、内外面とも青灰色を呈する。113は口径12.7cm、受部径15.2cm、器高11.7cm、底径10.1cmを測る高杯で、杯部を中心に歪みがみられる。杯部では立ち上がりは内傾してのびた後、端部で上方を向き、その端部は細く仕上げられる。その高さは1.6cmを測る。受部は斜め上方を向き、端部は丸く仕上げられる。底部は比較的深く、やや丸味を有す。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整が施される。脚台は比較的高く、外反して下りそのまま裾端部に至る。端部は外傾する平面をなす。脚台には径7.0cmの円形の透かし穴が三方に穿たれる。器面は回転ナデ調整で、底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、内外面とも淡青灰色を呈する。114は口径12.6cm、受部径15.0cm、器高9.9cm、底径9.9cmを測る高杯で、杯部には大きな歪みがみられる。杯部では立ち上がりは内傾してのび、端部で上方を向き、その端部は細く仕上げられる。その高さは1.5cmを測る。受部はやや斜め上方を向き、断面三角形をなし、端部は細く仕上げられる。底部は歪みのため浅く、平らである。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整が施される。脚台は比較的高く、外反して下った後、裾部で斜め下方に屈曲し、端部で下方を向く。端部は細く仕上げられる。脚台には径6.9cmの円形の透かし穴が三方に穿たれる。器面は回転ナデ調整で、底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、器面は灰褐色ないし暗青灰色を呈し、裾部外面には緑色の自然釉が付着する。

ii 台付椀 (Fig.39-115)

有蓋高杯と同じ箇所副葬されていたもので、口径9.0cm、器高10.7cm、底径8.6cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部を丸く仕上げる。体部は丸い底部から内湾して上がり口縁部に至る。脚台はラップ状に開き、そのまま裾端部へ至る。端部は外傾する平面をなす。器面は回転ナデ調整が施される。椀内面と裾部外面には自然釉が付着する。焼成は良好で、内外面とも

灰白色を呈する。

iii 短頸壺 (Fig.40-116~118)

3点が副葬されていた。116は口径7.9cm, 器高9.5cm, 胴径14.0cmを測るもので, 口縁部は短く上方を向き, 端部は細く仕上げられる。胴部は上位約1/3に最大径を有す。底部は丸い。底部外面と下胴部外面には回転ヘラ削り調整が施される。他は回転ナデ調整となる。焼成は不良で, 内外面とも灰白色を呈する。117は鉄製鋤先と共に奥壁沿いに副葬されていたもので, 胴部外面には赤褐色の鉄分が付着している。口径9.0cm, 器高8.6cm, 胴径15.0cmを測る。口縁部は短く上方を向き, 端部を細く仕上げる。胴部は上位1/3に最大径を有す。底部は丸く, 外面には回転ヘラ削り調整の後に十字形のヘラ記号が施されている。他は回転ナデ調整で, 底部内面にはナデ調整を加える。焼成はやや不良で, 内外面とも灰褐色を呈する。118は口径7.5cm, 器高8.1cm, 胴径14.7cmを測るもので, 口縁部は短く上方を向き, 端部は細く仕上げられる。胴部は上位約1/3に最大径を有し, 肩が張り, 外面には回転カキ目調整が施される。底部は丸く, 外面には回転ヘラ削り調整が施される。他は回転ナデ調整で, 底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で, 内外面とも灰色を呈する。

iv 直口壺 (Fig.40-119)

120と並んで玄室入り口右隅に副葬されていたもので, 口径9.7cm, 器高11.8cm, 胴径12.8cmを測る。口縁部はやや外反気味に斜め外上方に上がり, 端部は丸く仕上げる。胴部は丸く, 最大径は中位よりやや上にある。底部は丸い。底部外面には静止ヘラ削り調整が施される。他は回転ナデ調整で, 底部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で, 内外面とも青灰色を呈する。

v 広口壺 (Fig.40-120・121)

120は中形の広口壺で, 焼成の時のものとみられる欠損部がある。口径10.6cm, 器高13.9cm, 胴径17.3cmを測る。口縁部は内傾して短くのびる頸部から大きく外反し, 端部は内傾する凹面をなす。胴部は上位1/3に最大径を有し, 丸味のある底部に続く。胴部外面には回転カキ目調整が施され, 上胴部外面にはその上に刺突文を加える。下胴部の回転カキ目調整はナデ調整によって消している。底部外面には回転ヘラ削り調整, 口縁部には回転ナデ調整が施される。内面胴部から底部にかけて一面に自然釉がかかる。また, 口縁部から上胴部外面にかけても自然釉がみられ, 上胴部外面はハダ荒れが著しい。焼成は良好で, 内外面とも暗青灰色を呈する。121は大形の広口壺で, 口縁部は頸部から外反気味にのび, 端部で斜め下方に屈曲さす。胴部は丸味を有し, 上位1/3に最大径を有す。底部は丸い。胴部外面から底部外面にかけて平行のタタキが施され, 胴部外面にはさらに回転カキ目調整を加える。口縁部から胴部内面にかけて回転ナデ調整, 下胴部内面にはナデ調整, 底部内面にはヘラナデ調整がそれぞれ施される。焼成はやや不良で, 内外面とも灰白色を呈す。

vi 長頸壺 (Fig.40-122・123)

122は小形の長頸壺で, 口径8.3cm, 器高14.0cm, 胴径11.6cmを測る。口縁部は斜め外上方にのびる頸部から内湾気味に上がり, 端部付近でやや内傾する。端部は細く仕上げられる。口縁部外面には2条の沈線が施される。胴部はやや肩が張り, 最大径は中位よりやや上にある。上

胴部外面には沈線に挟まれた刺突文が2段に施される。底部は丸味を有す。中胴部外面には回転カキ目調整，底部外面にはナデ調整が施される。他は回転ナデ調整で，底部内面は未調整である。123は大形の台付長頸壺で，口径9.8cm，器高19.7cm以上，胴径15.8cmを測る。口縁部は上方にのびる頸部からやや内湾し，端部付近で上方を向き，端部は細く仕上げる。胴部は丸く，最大径は上位1/3にある。底部は丸い。中胴部外面から底部外面にかけて平行のタタキが施され，その上に上胴部と中胴部外面には沈線に挟まれたヘラ状工具による刺突文，2段のクシ描波状文がそれぞれ施される。脚台は下半が欠損する。口縁部から上胴部内面にかけて回転ナデ

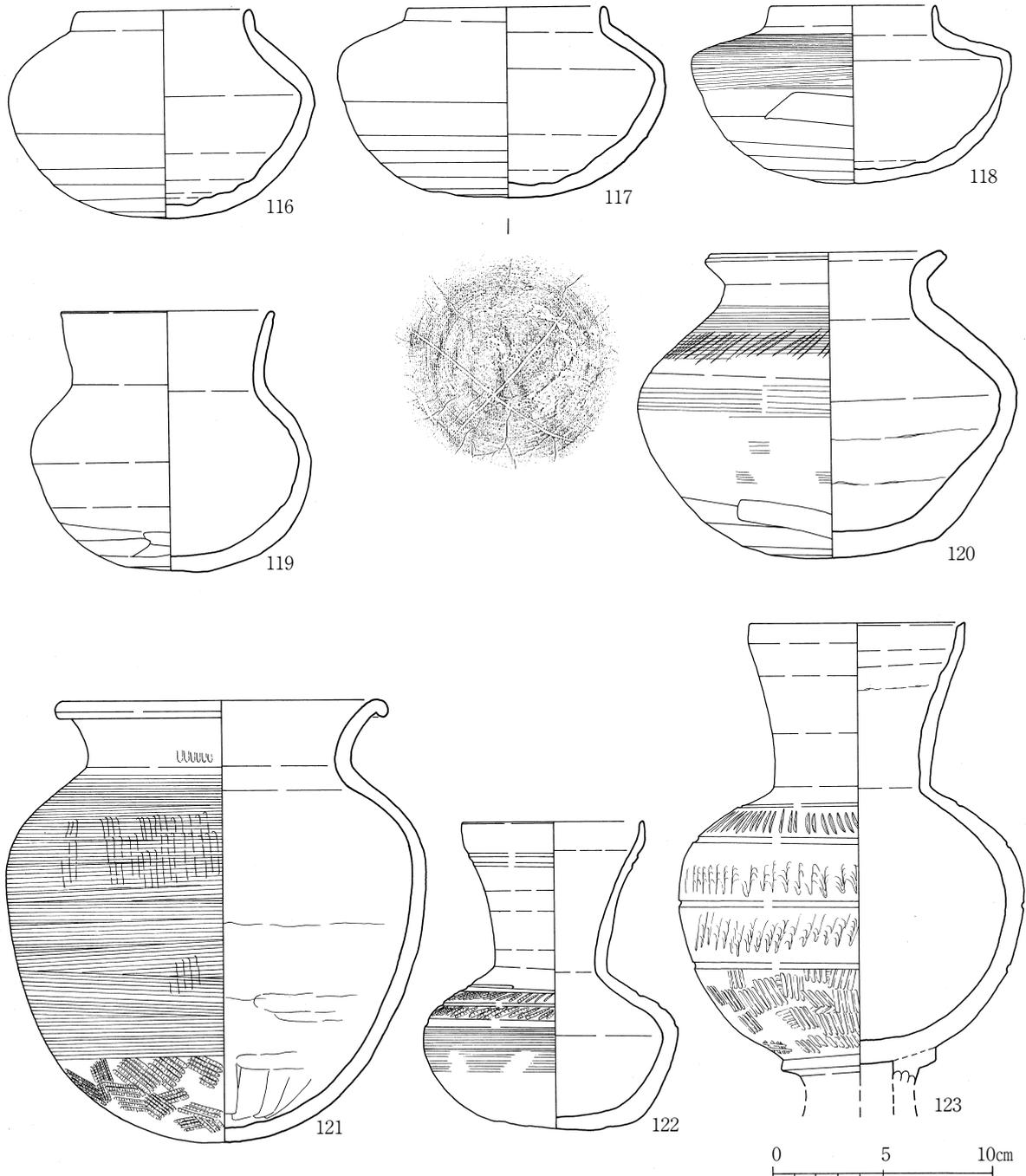


Fig.40 横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(短頸壺，直口壺，広口壺，長頸壺)

調整，中胴部から底部内面にかけてナデ調整がそれぞれ施される。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈する。

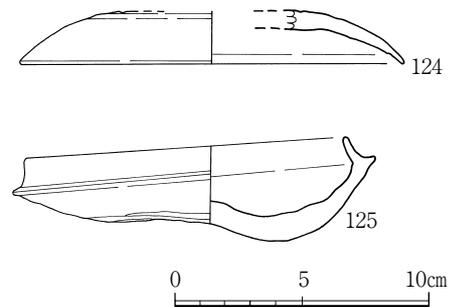
④ その他の遺物

不整形土坑出土遺物

墳丘西側の不整形土坑から杯蓋 (124) と杯身 (125) が出土している。

i 須恵器 (Fig.41-124・125)

不整形土坑から出土した杯蓋で，やや歪みのある口縁部の一部が残存する。口径15.2cm，器高約2.0cmを測る。口縁部は斜め外下方に緩やかに下り，端部は細く仕上げられる。口縁部と天井部の境はなくなっている。天井部はほぼ平らで，外面約4/5に回転ヘラ削り調整，他は回転ナデ調整を施す。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈す。125は杯身で，5ヶ所に散在していた。口径12.7cm，器高4.1cm，受部径14.4cmを測り，焼成時の大きな歪みがみられる。立ち上がりは内傾して短く上がり，端部を丸く仕上げる。受部は短く水



平にのび，端部は丸く仕上げられる。底部は丸味のあるものとみられるが，大きく歪む。外面約2/3に回転ヘラ削り調整が施される。他は回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈する。

Fig.41 長畝4号墳不整形土坑出土須恵器(杯蓋, 杯身)

表土層出土遺物

墳丘周囲の表土層から杯蓋 (126・127)，杯身 (128)，壺 (129) が出土している。

i 須恵器 (Fig.42-126~129)

126は杯蓋口縁部の破片である。口縁部は内湾気味に下り，端部は内傾する浅い凹面をなす。その高さは2.4cmと高い。稜は下端に凹線を巡らすことで段を形成する。天井部は丸味のあるものとみられる。口縁部外面にはヘラ状工具による上から下への刻目を巡らしている。器面の調整は回転ナデ調整である。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈する。127も杯蓋である。口縁部は低く，やや内湾気味に斜め外下方に下り，端部は丸く仕上げる。稜はなく，天井部は平らに近い。天井部外面中央にはヘラ起し跡が残り，その周囲に回転ヘラ削り調整を施す。他は回転ナデ調整である。焼成は良好で，内外面とも青灰色を呈する。128は杯身の破片で，立ち上がりは短く上方を向き，端部は細く仕上げ，その高さは0.8cmを測る。受部は斜め外上方を向き，端部を丸く仕上げる。底部は丸味のあるものとみられる。底部外面には回転ヘラ削り痕が残る。焼成は良好で，内外面とも灰褐色を呈する。129は大形の壺で，上胴部の一部が残る。頸部は外反気味にのび，胴部は丸い。外面には回転カキ目調整，頸部は回転ナデ調整，胴部内面には同心円文のタタキを施した後，頸部に近い部分のみ擦り消している。焼成は良好で，内外面とも灰褐色を呈する。

(4) その他の遺構

尾根頂上部を中心に土坑10基，ピット7個を検出した。しかし，全般に削平の影響がみられ，かつ，出土遺物はSK-7から土師器の細片が1点確認されたのみで時期を決定する資料と足り得る遺物は検出されなかった。

① 土坑

尾根頂部でSK-1~9，南東斜面部からSK-10をそれぞれ検出した。

SK-1 (Fig.43・44)

尾根頂上部南よりで検出した方形の土坑である。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。また，北壁以外の各壁際でピット(P-5~7)が検出された。遺構は，長辺1.80m，短辺0.72m，深さ0.11mを測り，中央西壁沿いにピット状の掘り込みが認められた。長軸方向はN-27°47'-Wであった。断面は舟底状を呈する。埋土は黒色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無であった。

SK-2 (Fig.43・44)

尾根頂上部北よりで検出した方形の土坑である。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。また，南西側でピット(P-3・4)を検出した。遺構は，長辺2.35m，短辺1.00m，深さ0.28mを測り，北側に一段高い平場を有していた。長軸方向はN-33°9'-Eであった。断面は舟底状を呈する。埋土は八層に分層され，1層が黒色粘質土，2層が小礫と黒色・灰色粘質土粒を多く含む暗褐色粘質土，3層が灰色粘質土粒を多く含む黒色粘質土，4層が青灰色の蛇紋岩風化土を若干含む黒色粘質土，5層が黒色粘質土粒を若干含む小礫混灰色粘質土，6層が灰色粘質土粒を若干含む暗褐色粘質土，7層が黒褐色粘質土，8層が灰色・青灰色・黒色粘質土の小ブロックを多く含む黒褐色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

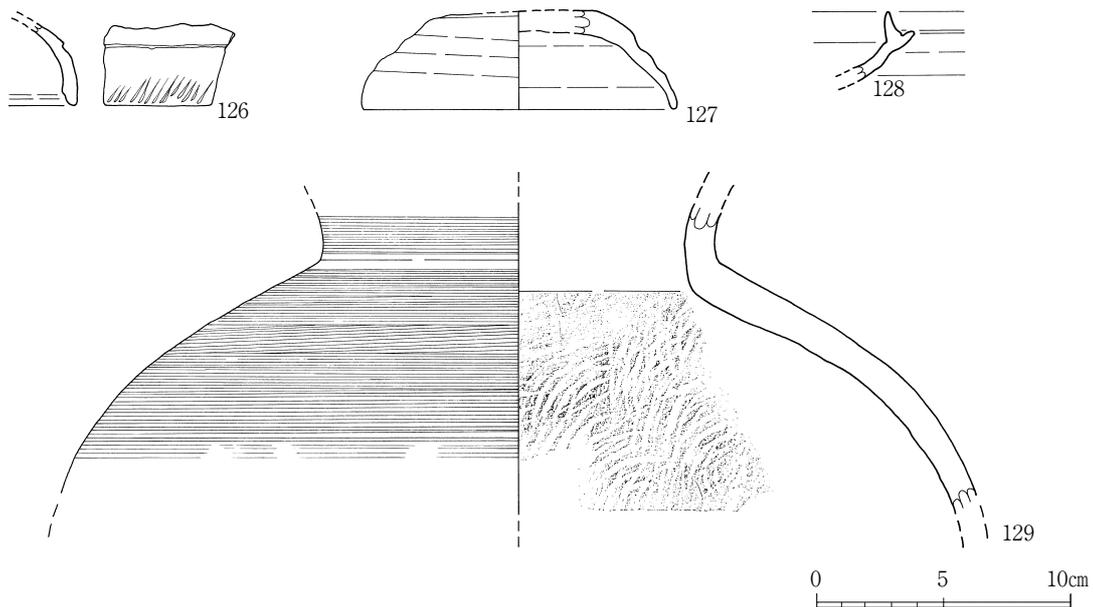


Fig.42 長畝4号墳 墳丘周辺部出土須恵器(杯蓋，杯身，壺)

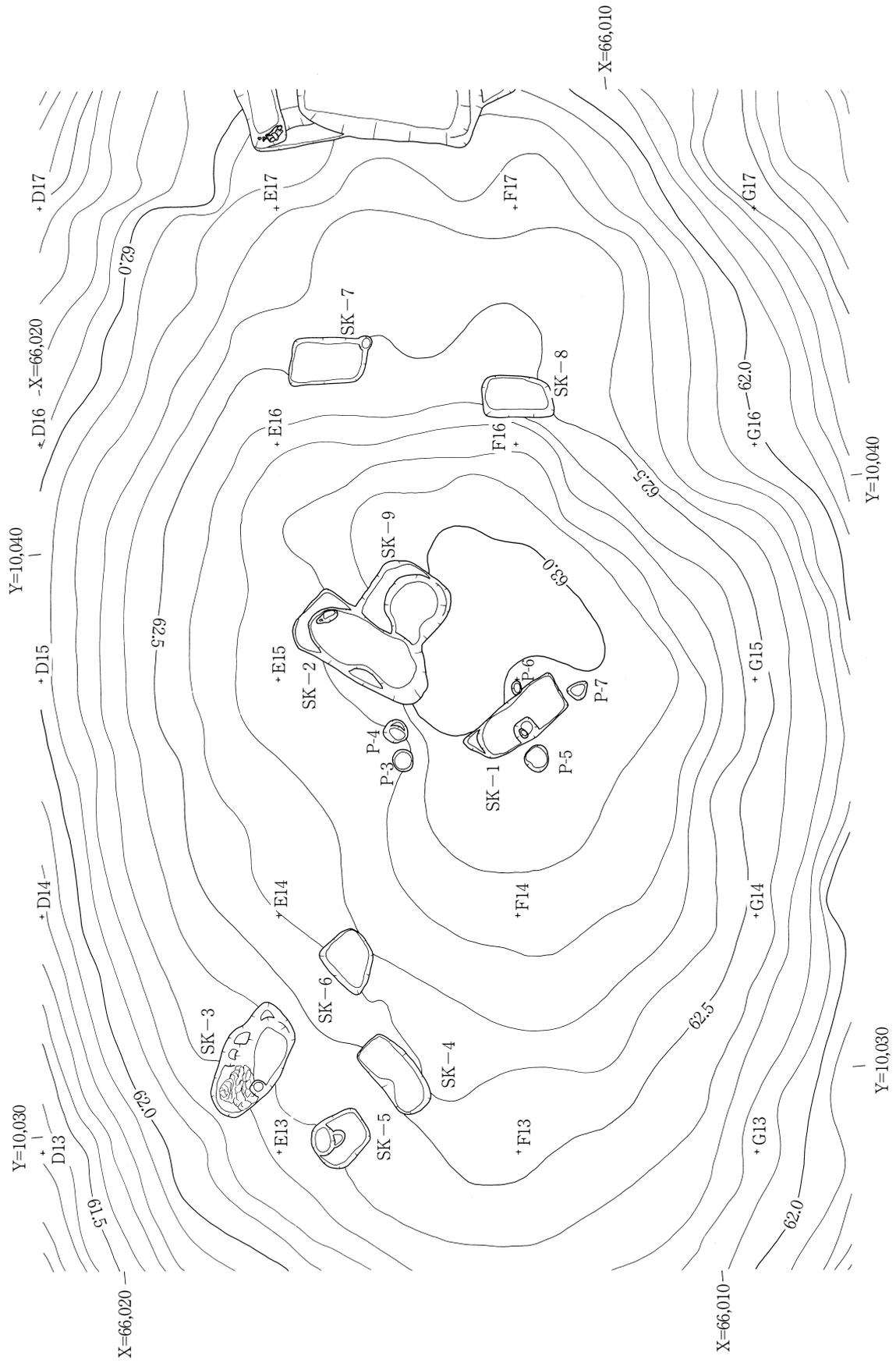


Fig.43 土坑平面图 (SK-1~9)

SK-3 (Fig.43・44)

尾根頂上部北西側で検出した隅丸方形の土坑である。遺構は地山である黄褐色砂礫層を掘削していた。また、西側は蛇紋岩の岩盤が露出する。遺構は、長辺2.05m、短辺1.04m、深さ0.34mを測り、底面西側でピット状の掘り込みが認められた。長軸方向はN-56° 3′ -Wであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は五層に分層され、1層が灰黒色粘質土、2層が暗灰色粘質土粒を若干含む灰黒色粘質土、3層が黒色粘質土、4層が黒色粘質土粒を含む灰色粘質土、5層が小礫混暗灰色粘質土であった。出土遺物は皆無である。

SK-4 (Fig.43・44)

尾根頂上部北西側で検出した方形の土坑である。遺構は地山である黄褐色砂礫土層を掘削していた。遺構は、長辺1.42m、短辺0.60m、深さ0.12mを測る。長軸方向はN-58° 12′ -Eであった。断面は台形状を呈する。埋土は黒色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK-5 (Fig.43・44)

尾根頂上部北西側で検出した隅丸方形の土坑である。遺構は地山である黄褐色砂礫土層を掘削していた。遺構は、長辺0.99m、短辺0.81m、深さ0.21mを測り、底面北西隅でピット状の落ち込みが認められた。長軸方向はN-26° 52′ -Wであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK-6 (Fig.43・44)

尾根頂上部北西側で検出した不整形の土坑である。遺構は地山である黄褐色砂礫土層を掘削していた。遺構は、長辺1.00m、短辺0.80m、深さ0.11mを測る。長軸方向はN-26° 52′ -Eであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は黒褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK-7 (Fig.43・44)

尾根頂上部東側で検出した方形の土坑である。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。遺構は、長辺1.31m、短辺0.81m、深さ0.05mを測る。長軸方向はN-8° 49′ -Eであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は黒色粘質土単一層であった。遺物は土師器の細片が1点認められたのみで復元できるものはなかった。

SK-8 (Fig.43・44)

尾根頂上部東側で検出した方形の土坑である。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。遺構は、長辺1.20m、短辺0.73m、深さ0.07mを測る。長軸方向はN-7° 36′ -Eで、SK-6のそれと比較的近い方向を示す。断面は逆台形状を呈する。埋土は黒色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK-9 (Fig.43・44)

尾根頂上部北よりで検出した隅丸方形の土坑である。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削し、SK-2を切って掘り込まれていた。遺構は、長辺1.44m、短辺1.36m、深さ0.22mを測る。長軸方向はN-54° 53′ -Wであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

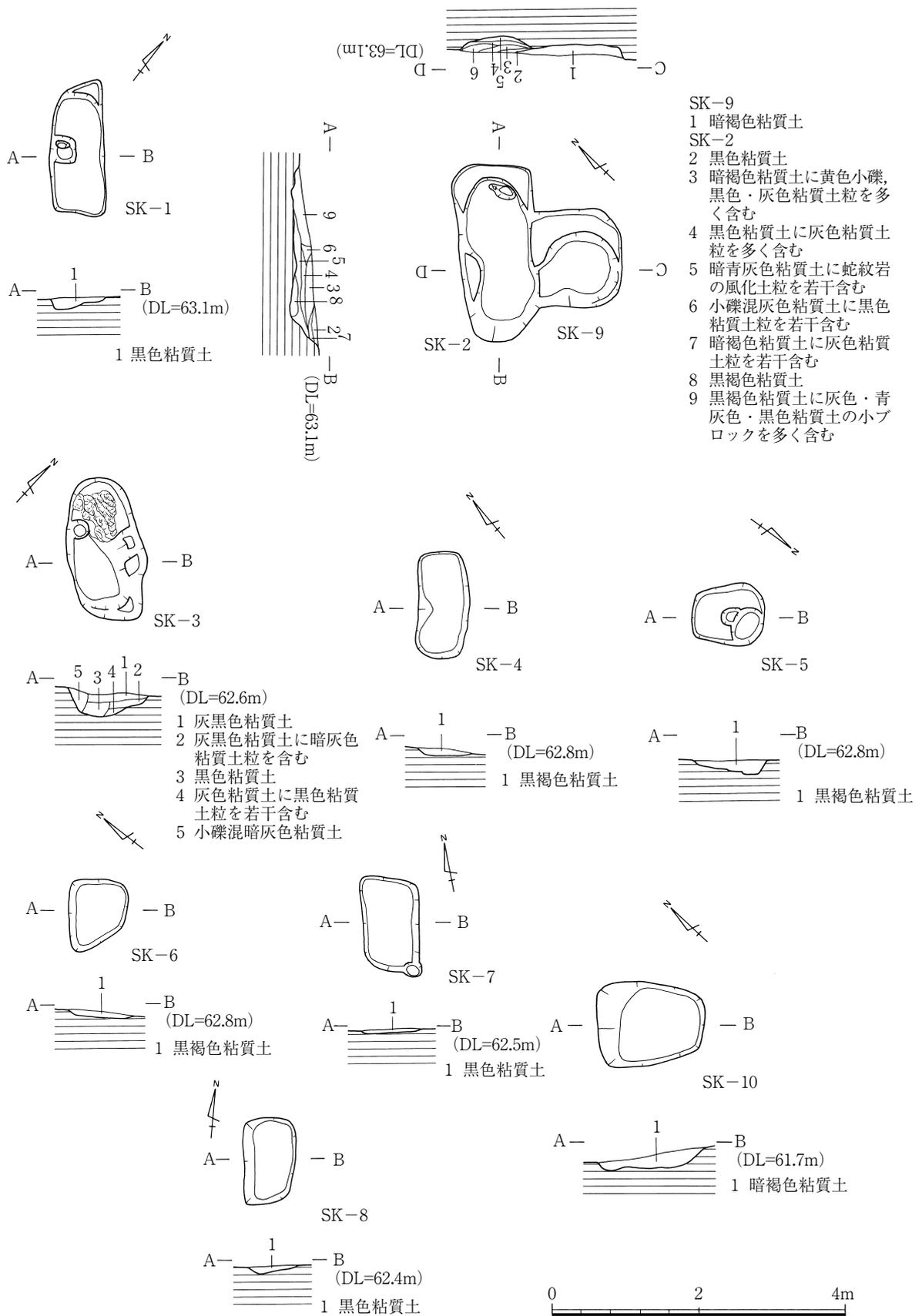


Fig.44 SK-1~10

SK-10 (Fig.44)

尾根頂上部から南東に約3.30mの斜面部で検出した方形の土坑である。遺構は地山である黄褐色砂礫土層を掘削していた。遺構は、長辺1.47m、短辺0.17m、深さ0.33mを測る。長軸方向はN-49° 58′ -Wであった。断面は逆台形状を呈する。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

Tab.4 土坑計測表

遺構番号	平面形態	規模			長軸方向	備考
		長辺 (m)	短辺 (m)	深さ (m)		
SK-1	方形	1.80	0.72	0.11	N-27° 47′ -W	
SK-2	方形	2.35	1.00	0.28	N-33° 09′ -E	
SK-3	隅丸方形	2.05	1.04	0.34	N-56° 03′ -W	
SK-4	方形	1.42	0.60	0.12	N-58° 12′ -E	
SK-5	隅丸方形	0.99	0.81	0.21	N-26° 52′ -W	
SK-6	不整形	1.00	0.80	0.11	N-26° 52′ -E	
SK-7	方形	1.31	0.81	0.05	N-08° 49′ -E	
SK-8	方形	1.20	0.73	0.07	N-07° 36′ -E	
SK-9	隅丸方形	1.44	1.36	0.22	N-54° 53′ -W	
SK-10	方形	1.47	0.17	0.33	N-49° 58′ -W	

② ピット

P-3

尾根頂上部北よりで検出したピットで、径0.35~0.39mの不整形円で、深さ0.20mを測る。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

P-4

尾根頂上部北よりP-3の東隣で検出したピットで、径0.38mの円形で、深さ0.20mを測る。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

P-5

尾根頂上部南よりSK-1の西隣で検出したピットで、径0.42mの円形で、深さ0.32mを測る。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

P-6

尾根頂上部南よりSK-1の東側で検出したピットで、径0.17～0.26mの不整円形で、深さ0.17mを測る。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

P-7

尾根頂上部南よりSK-1の南側で検出したピットで、径0.30～0.40mの不整円形で、深さ0.39mを測る。遺構は地山である蛇紋岩の岩盤を掘削していた。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

第Ⅳ章 考察

1. 長畝古墳群の築造時期とその意義

今回調査した古墳群からは三時期の主体部が検出された。これらはすべて県内で初めてのものであり、その位置付けが注目される。以下、順に検討してみたい。

まず、長畝2号墳についてみてみることにする。長畝2号墳からは2基の主体部が確認されており、1号主体部は墓坑を掘削した後、礫石で棺底床を造った上で、棺を安置しさらに側面を礫石で覆って構築したものと考えられ、2号主体部は粘土で棺底床を造った上で、棺を安置し棺の両端を中心に礫石で補強したものとみられる。長畝古墳群の北側の尾根上には石室墓群(奥谷南遺跡⁽¹⁾)が検出されており、類似する面も指摘できる一方で副葬品の有無や棺の形状等異なる点もあり、弥生時代の墓制との差異が看取される。ところが、これらの主体部は前期古墳特有の竪穴式石室とは異なるもので、定型化した墓制の範疇では捉え難いものであろう。

次に、出土した遺物からみると弥生的な要素を留めるものもみられるが、前期古墳に副葬されるものが中心である。副葬されていた鉄製品についての分析は次項に譲るとしても総合的にみれば古墳時代前期に属するものと考えた方が妥当であろう。これまで県内で最も古い古墳は宿毛市高岡山1号墳⁽²⁾で、同じ宿毛市の高岡山2号墳⁽³⁾、平田曾我山古墳⁽⁴⁾と続くものと考えられ、県内における古墳の発生は波多国(現在の幡多郡)と一般的に考えられていた。一方、土佐国では5世紀中ごろとみられる南国市狭間古墳⁽⁵⁾が最も古い古墳となっていた。このように、高知県の古墳文化は西南地域が先行したとの考え方が優位であった。このような状況の中で、今回の長畝2号墳の確認は、土佐国においても古墳時代前期に遡り得る古墳の存在を裏付けたことになり、弥生時代から古墳時代への変遷に新たな資料を提供することになった。特に、1号主体部の出土遺物の中には、墓前祭祀の際破碎されたとみられる弥生土器の様相を残す壺や古相の鉄鏃などがある一方で、全長67cm前後と長大で、鉄刀の茎と同じ形状をなしやや新しい様相を示す鉄剣があり、土佐国の古墳時代の幕開けとでも言える要素を含んでいるとも言えよう。当然、周辺部での弥生時代後期後半以降の集落⁽⁶⁾の増加からその存在は推定されていたが、この発見は他地域との繋がりを考える上で看過できない資料となろう。波多国の古墳が畿内の要素の強いものであるのに対し、この長畝2号墳はその影響下で構築されたとは考え難いもので、後述する長畝4号墳と考え合わせるとそれ以外の地域との繋がりを考えざるを得ないであろう。4世紀以降6世紀中葉に畿内型優位の横穴式石室が築造されるまで土佐国の不透明な状況には何らかの大きな外因が介在していたのかもしれない。この点については今後検証していかなければならない。

ただ、残念なことは、戦後以来の開墾によって盛土のほとんどが削平されていたため明確な盛土を確認できなかったことである。また、畑地として使用されていたため肥料による影響のためカーボン分析による科学的裏付けを得ることができなかった。特に、山頂部で検出された土坑群については形態的には土坑墓と考えられるが、出土遺物が皆無であるため時期の決め手を欠いた上に、科学的にも証明し得なかった。ただ、立地的には長畝古墳群に先行する可能性が高く、弥生時代ないし

古墳時代初めの土坑墓とみても強ち的外れではないようにも思われる。

次に、長畝3号墳についてみてみよう。その主体部もまた、県下初の所謂竪穴式石室である。形態的には小竪穴式石室であり、その構築方法、使用石材は前述のように長畝4号墳の主体部との繋がりも考えられる。県内には類例がなく、県外に目を移してみると、いくつかの類例が確認されている。まず、徳島県では、忌部山1号墳⁽⁷⁾にみられるように横穴式石室を主体部とする古墳に付設される形で構築されたものがあり、葛城神社古墳、吐気山2号墳、脇町野村古墳、山田A1号墳に類例が見られる⁽⁹⁾よう、吉野川流域にその分布がある。これらは、前述のように単独で構築されたものではなく、同一墳丘上に付設されたもので、時期的には6世紀末から7世紀初めにかけてのものと考えられている。長畝3号墳は同一墳丘上に構築されておらず、形態的には別と見た方がよかろう。一方、石室墓と言われる墳丘を持たず単独で構築された小竪穴式石室も存在しており、萩原古墳群、山家古墳群A、柿谷遺跡、蓮華谷古墳群⁽¹⁰⁾などで確認されている。これらは横穴式石室があまり発達しない鳴門市大麻町から上板町にかけて分布し、6世紀中葉から7世紀初めにかけて築造されたもの⁽¹¹⁾とみられる。長畝3号墳は僅かであるが盛土が確認されており、それらとも異なるものとみられる。香川県では、典型的な竪穴式石室数を主体部とする多くの前期古墳が築造され、かつ数多くの石棺墓がみられるが、長畝3号墳の主体部のような小竪穴式石室はみられず⁽¹²⁾、その状況は高知県とは異なるようである。愛媛県では、数は少ないが小竪穴式石室が確認されている。その設置形態には2種類あり、長田2号墳⁽¹³⁾、水満田2号墳⁽¹⁴⁾、東山鶯が森8号墳⁽¹⁵⁾のように横穴式石室に付設されたものと二番山古墳⁽¹⁶⁾・東山鶯が森1号墳⁽¹⁷⁾、城の内古墳⁽¹⁸⁾、溝辺2号墳⁽¹⁹⁾のように単独で構築されたものがみられる。前者は徳島県忌部山1号墳と同形態で時期的にも後期古墳の範疇で捉えることができるもので、長畝3号墳とは形態的に異なるものであろう。後者は、長畝3号墳と類似する形態のもので、古式須恵器が副葬され、5世紀後半に位置付けられ、竪穴式石室から横穴式石室に移行段階のものではないかとみられている。特に、二番山古墳の石室は長畝3号墳のそれと比較的良く似ており、同系統とみることもできよう。このようにみても竪穴式石室から横穴式石室への移行期に導入された石室形態と捉えることも可能と考えられる。一方、構築時期を考える資料として、副葬されていた2点の鉄鏃 (Fig.29-19・20) がある。19は斜行頸部を有する三角形鏃の一群で、長畝4号墳の主体部に副葬されていた同形態を呈するFig.35-23に比べ鏃身長が短く、時期的に先行するものとみられる。また、石室の石積みからは土師器が出土するのみで、周辺部からも全く須恵器が出土しておらず、石室が構築された時期は高知平野に須恵器が出現する以前の可能性も考えられる。高知県に須恵器が出現するのは現段階では古くみても中村市具同中山遺跡群から出土したTK216併行のもので、高知平野では高知市柳田遺跡出土の甕 (TK23併行) のものが最も古い。これらのことからこの石室はこれらに先行する可能性も考えられる。ただし、前述のように石室の構築方法や石材が同一であることを考慮すれば、大きな時期差があるとも考え難く、ここでは長畝3号墳の築造時期を大きく5世紀後半期と考えておきたい。

第三の古墳である長畝4号墳についても、竪穴系横口式石室の影響が看取される県内では初めての主体部である。県内の横穴式石室の系譜からみれば初期横穴式石室と捉えることができ、副葬品からも県内最古の横穴式石室と考えられ、横穴式石室の導入期及び導入形態を考える上で極めて重

要な意味を持つ。また、前述のように長畝4号墳は石室構造的にみて、長畝3号墳から繋がる形態とも考えられ、ある意味で伝統的な埋葬施設に横口部を付設し、横穴式石室とすべく奥壁の石を立てたとも見ることができ、新たな墓制への対応とも考えられよう。これまでは、本古墳の南で東西にのびる蒲原山の東端山麓部に所在した蒲原山東1号墳⁽²¹⁾や土佐山田町伏原大塚古墳⁽²²⁾などが県内では導入期の古墳ではないかとみられていたが、石室構造、副葬品をみる限り、それらより遡るものと考えることができよう。特に、副葬品の中の須恵器をみると高知平野では前述の高知市柳田遺跡から出土している搬入品とみられる第I-3型式⁽²³⁾の須恵器(TK23併行)に次ぐものであり、古墳に副葬されたものとしては県内最古のものといえよう。また、副葬された須恵器の作りをみると在地で生産された可能性が強く窯業開始時期の面でも注目される。なお、これら須恵器については別項を設けて検討する。

それでは石室構造から長畝4号墳にアプローチしてみる。前述のとおり県内初の石室構造であり、県内には類例がないため県外に視点を向けてみたい。まず、四国の他県に目を移してみると、香川県、徳島県では類例が確認されておらず、愛媛県で散見できるのみで、香川県、徳島県では別系統の石室の変遷と系譜が考慮⁽²⁴⁾されている。堅穴系横口式石室の影響が考慮されている愛媛県では主な平野部でその存在並びに変遷を追うことができる。まず、東予東部では川之江市東宮山古墳(6世紀前半中葉)など、今治平野周辺では今治市片山4号墳(6世紀前半～7世紀中葉)、治平谷1号墳(A石室-6世紀前半)など、道後平野南部では長田2号墳(6世紀中葉)、大下田1号墳(6世紀中葉)など、道後平野北部では東山鷲が森8号墳A石室(7世紀初頭)などが確認されている。これらに採用された堅穴系横口式石室の影響下によるとみられる石室は引き続き石室の一形態として採用⁽²⁵⁾されている。これらはその形態から長畝4号墳に通ずる一面を有する一方で、東宮山古墳のように割石を使用した石室は柳沢氏がⅢB期のB₁に分類⁽²⁶⁾しているように九州系の影響を強く受けたものや松山市三島神社古墳⁽²⁷⁾の横穴式石室のように畿内型石室の影響が指摘される古墳⁽²⁸⁾もほぼ同時期に築造されている。このように愛媛県では九州系の堅穴系横口式石室の系統を引くものやその影響がみられ堅穴系横口式石室の亜流とでもいえるものそして畿内型と全く異なった系統のものが共存している。これは各平野部に存在したであろう豪族の系譜や繋がりによるところが大きいと考えられる。換言すればそれだけ多くの出自なりを異にする豪族が存在し得た土地とも捉えることができよう。また、それぞれの豪族によって採用する石室も異なっていたともいえよう。

翻って高知県をみれば現時点ではこのような変遷を言及できる資料は確認されていない。長畝4号墳が唯一の堅穴系横口式石室の影響を伺える資料であり、現在の資料から高知県の横穴式石室の変遷⁽²⁹⁾を辿れば次のようになろう。初現的には長畝4号墳のような堅穴系横口式石室の影響のもとに横穴式石室が導入され、引き続き胴張りの側壁を残した蒲原山東1号墳が構築されるも、以後小蓮古墳や新改古墳に代表されるような畿内的様相の強い古墳が高知平野の各所で築造され、古墳文化が開花し、徐々に周辺部にも拡がり、東では野市町大谷古墳・大崎山古墳、奈半利町大木戸古墳、西では伊野町枝川古墳群、中村市古津賀古墳⁽³⁰⁾がみられる。当然それぞれの首長の勢力により副葬品には差異がみられるが、大きな流れとして捉えられるのではなかろうか。このような中でも、高間原古墳群が石室構造を異にする古墳⁽³¹⁾を築造し、朝倉古墳のように玄門立柱が羨道部に張り出す九州

型と指摘される古墳⁽³²⁾もあり、一元的に高知の古墳を論ずることはできない側面も有するが、巨視的にみれば前述のように捉えられよう。このようにみても、高知県における長畝4号墳の位置付けは愛媛県で見られるように一形態として受け継がれる石室形態とみるよりか畿内型横穴式石室に先行する過渡的な石室形態と捉えた方が現段階では良いのではなかろうか。勿論社会的変化によりそれまでの石室形態を放棄し、新たな石室形態を採用したとも考えられるが、石室形態や構築方法を見る限り古いものが新しいものと融合して行ったと見た方が現状に即していると考えられる。その辺にも南四国という地域性が介在しているのであろう。

長畝4号墳の主体部自体についてみると、老司古墳などにみられる典型的な竪穴系横口式石室ではなく、換言すれば九州系とは異なるものであり、5世紀末から6世紀中葉にかけて西日本で散見⁽³³⁾され、一元的に九州からの影響下に成立したともいえず、その系譜は今後の検討課題であろう。ただ、四国を見る限り、愛媛県でしか確認されておらず、やはりそちらからの影響を無視することはできないであろう。一方で、同時期幡多地域、特に四万十川下流域に存在する中村市具同中山遺跡群・古津賀遺跡、大方町早咲遺跡などの祭祀遺跡が畿内指導型ともいえる祭祀遺物を残していること⁽³⁴⁾をも加味しなければいけないであろう。

2. 長畝2号墳の副葬品について

ここでは第1号主体部の副葬品中でも鉄製品についてみてみたい。最初にそれらを検討する上で比較資料として県内では比較的まとまって検出された南国市東崎遺跡(弥生時代後期後半～終末)の鉄製品を取上げてみたい。出土した20点余りの鉄製品の内、形状を復元できたのは14点であった。内訳は鉄鏃が8点、鉄製鎌が2点、鉄製鋏・鋤先が2点、鉈が2点である。まず、鉄鏃では類銅鏃鉄鏃(1)、柳葉鏃(2・3)、圭頭鏃(4～8)がある。1は銅鏃を模したとみられる鏃で、類銅鏃鉄鏃と呼ばれる。残存長6.8cm、鏃身長6.7cmを測る。刃部はほぼ三角形をなし、幅をやや狭め直線的に鏃身関に至る。鏃身はやや厚く両鑄造りで、関は角関をなす。茎は2.0cmが残存し、断面はほぼ方形をなす。2は柳葉鏃で、茎の大半を欠く。残存長5.9cm、鏃身長4.8cmを測る。刃部はほぼ三角形をなし、幅を狭めほぼ直線的に鏃身関に至る。鏃身は両丸造りで、関に向かって厚みを増す。関は斜関である。茎は1.1cmが残存し、断面は方形をなす。3は大形の柳葉鏃で、残存長は9.8cmを測る。刃部は丸味のある三角形をなし、緩やかなカーブを描きながら関不明瞭のまま茎に至る。鏃身は両丸造りで、鏃身長は7cm前後とみられる。茎の断面は方形をなす。4は圭頭鏃で、残存長4.9cmを測る。刃部は比較的鋭い三角形をなし、屈曲して幅を狭めほぼ直線的に関不明瞭のまま茎に至る。鏃身は両丸造りで、鏃身長は3.9cmとみられる。茎は断面が方形をなすが、大半を欠く。5も圭頭鏃で、残存長4.3cm、鏃身長3.8cmを測る。刃部は鋒から外方に開き、屈曲して関に至る。刃部は鏃身の上部半分を占め、鏃身は平造りである。関は無関で、茎は1.4cmが残存し、断面は方形をなす。6も5とほぼ同じ形状をなす圭頭鏃で、残存長5.0cm、刃部長3.0cmを測る。刃部は鏃身の上部半分を占め、鏃身は平造りに近い。関は無関で、茎長は2.0cmを測り、断面はほぼ正方形をなす。7もほぼ同形の圭頭鏃で、残存長は3.2cm、鏃身長3.0cmを測る。刃部は鏃身のほぼ上部半分を占め、鏃身は平造りに近い。関は無関で、茎は僅かに残り、断面は方形をなす。8は小形の圭頭鏃で、残存長3.3cm、鏃身長2.6cmを測

る。刃部は鋒から鋭角で外方に開き、屈曲し幅を狭め関に至る。鍔身は平造りで、関は無関である。茎は細く断面は方形をなす。9・10は鉄製鎌で、9は刃部の先端部半分以上を欠くため直刃鎌か曲刃鎌かは不明である。残存長3.3cm、刃部幅3.2cmを測る。基部の折返の角度はほぼ直角で、折返部を上にして刃を手前に向けると柄は右側に付く。折返部の厚さは0.4cmである。10もほぼ同じ部分が残存しており、形態は不明確である。残存長3.8cm、刃部幅3.8cmを測る。基部の折返の角度はほぼ直角で、折返部を上にして刃を手前に向けると柄は右側に付く。折返部の厚さは0.3cmである。11・12は鉄製鋏・鋤先である。11は小形の方形板刃先で、刃部の先端を欠く。刃部長4.3cm、刃部幅2.6cmを測り、厚さは基部で0.2cm、中央部で0.4cmを測る。折返は、断面U字形をなし、長さ2.5cm、幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。残存重量は10.3g（保存処理をした状態での計測）である。12も方形板刃先で、11に比べ一回り大きい。刃部は外湾していたとみられ刃部長6.1cm、刃部幅4.0cmを測り、厚さは基部で0.4cm、中央部で0.5cmである。折返は大きくU字形をなし、長さ3.6cm、幅1.7cm、厚さ0.4~0.5cmを測る。残存重量は45.5g（保存処理をした状態での計測）である。13は完形の鉄鉞であり、全長11.9cm、刃部長2.9cm、刃部最大幅1.1cm、茎部幅0.7cm、茎部厚0.4cmを測る。刃部は笹葉状をなし、裏透きを持ち、断面はくの字状を呈し、表面には錆がみられる。茎部はほぼ真直ぐのび長さ9.0cmを測り、断面は方形をなす。14も鉄鉞で、残存長3.6cm、推測刃部長3.2cm、刃部幅0.9cm、茎部幅0.9cm、茎部厚0.3cmを測り、刃部先端と茎の大半を欠く。刃部は笹葉状をなし、断面は三角形を呈し、

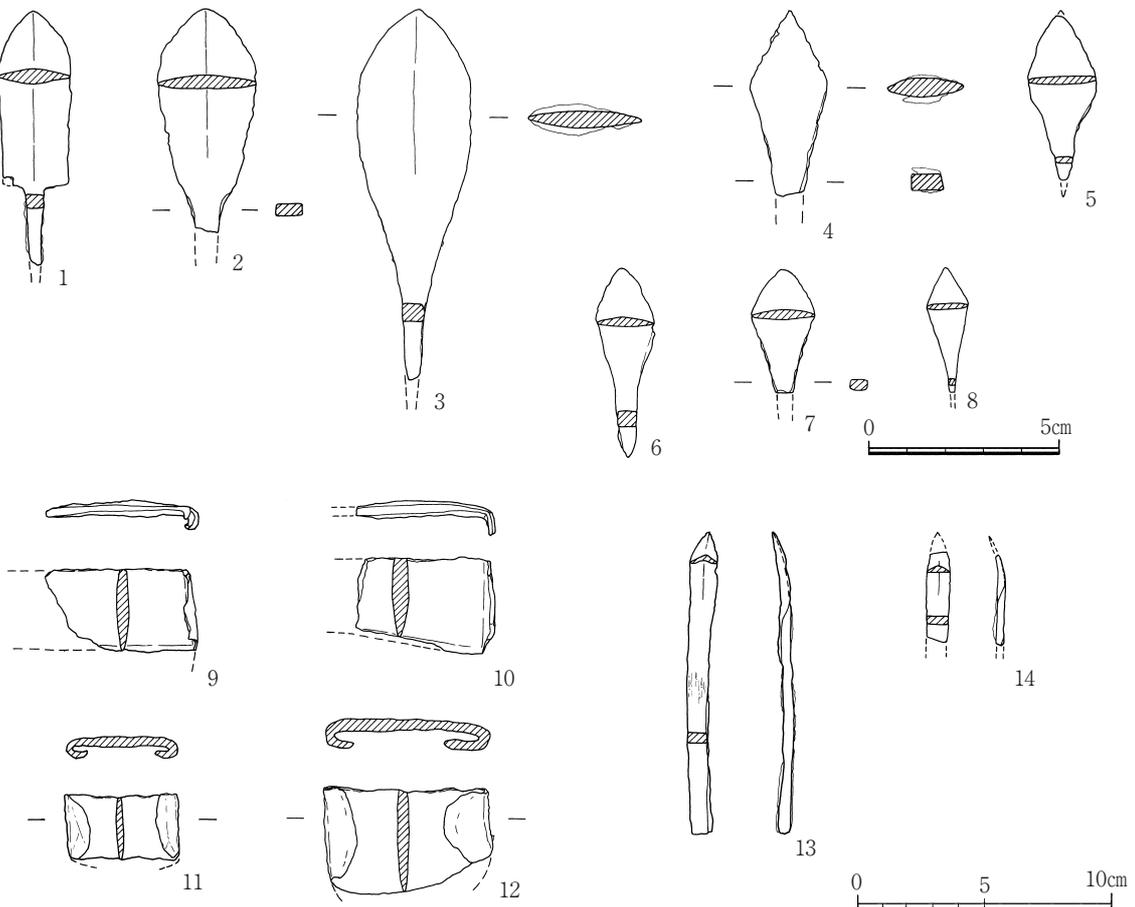


Fig.45 南国市東崎遺跡出土鉄製品

表面には錆がみられる。茎は約0.8cmが残り、断面形は方形をなす。なお、これらの内1・4がST1、2がST8、3・8・9・12・14がST5、5がST7、6・10・11がST4から出土している⁽³⁵⁾。

それではまず、鉄鏃を比較してみよう。形態的には東崎遺跡からは類銅鏃鉄鏃、柳葉鏃、圭頭鏃、長畝2号墳の1号主体部からは柳葉鏃、圭頭鏃、三角形鏃が確認されている。銅鏃模倣の類銅鏃鉄鏃 (Fig.45-1) は県内唯一の出土例で、前期古墳に副葬されていても不思議ではないものであるが、1号主体部からは出土していない。この鉄鏃は兵庫県権現山51号墳出土の鉄鏃などと同形態のもの⁽³⁶⁾とみられ、遺物から見れば長畝2号墳より遡り得る古墳の存在も考えられないことはない。柳葉鏃ではそれぞれ形式が異なり、東崎遺跡出土の2点は典型的な柳葉鏃ではなく弥生時代中期からの系統を引くものとみられ、Fig.45-3は鏃身部が拡大・長身化したものの一群に属するとみられ、Fig.45-2よりか形態的には後出であろう。一方、1号主体部の柳葉鏃は典型的な柳葉鏃でかつ鏃身部が拡大・長身化したもので、全長約19cm、鏃身幅3cm前後と非常に大形の鏃である。出現時期も東崎遺跡より明らかに後出とみられる。杉山氏の第I形式の第3型式⁽³⁷⁾に該当するものとみられる。時期的には前期の中でも新相になろう。一方、東崎遺跡の一群は一般的には弥生時代終末期から古墳時代初めにかけてのもの⁽³⁸⁾とみられるが、土器論⁽³⁸⁾でいえば南四国においては弥生時代に含めた方が現状に即しているのではなかろうか。圭頭鏃は両遺跡とも杉山氏のB形式の第I形式に属するもので、東崎遺跡のものが第1型式、1号主体部のものが第2~3型式に該当しよう。東崎遺跡の一群は小形で鏃身長も短く、時期的には弥生終末前後であろう。一方、1号主体部出土のものはその系統を引くも鏃身が拡大・長身化しており他の副葬された鉄鏃と同一の範疇で考えて良いものとみられる。三角形鏃は東崎遺跡からは確認されていない。これは三角形鏃が古墳時代中・後期を中心に存在したことによろう。そこで、1号主体部の三角形鏃をみた場合、柳葉鏃の影響もみられることから中でも古相を呈するものと考えられ、他の鉄鏃と同じ範疇で捉えられるのではなかろうか。

次にその他の鉄製品をみてみると、鉄鎌、鉄製鋏・鋤先とも東崎遺跡のものが一回り小さく、形態的には1号主体部のものより先行することが考慮されよう。東崎遺跡の鉈は全長が12cm足らずのもので、古墳時代のそれと比べ短くなっている。

このように弥生時代後期後半から古墳時代初めにかけての集落跡ともいわれる東崎遺跡の出土遺物と比較しても後出であり、前期でも新しい時期に属すると見た方が適切ようである。翻って、南四国という地域性を加味すれば、土佐では古墳時代の初めともいい得る可能性を秘めている。時期的には、U字形刃先の鉄製鋏・鋤先⁽³⁹⁾が副葬されていないことを加味し総合的にみれば、4世紀代後半に築造された可能性が高くなるものと考えられる。

3. 長畝4号墳の須恵器について

長畝4号墳の主体部からは南四国の須恵器を考察する上で看過できない資料が出土した。今回の発見までは、南四国の西南地域、現在の幡多郡、中でも四万十川下流域及び南四国東部の安芸平野が南四国における須恵器の出現地域であると共に高知平野に横穴式石室が採用され、主たる副葬品となるまでは主な消費地でもあった。換言すれば、6世紀中葉までは高知平野では前述の高知市柳

田遺跡の数例以外に出土例は確認されていなかった。柳田遺跡は四万十川下流域の遺跡同様に河川祭祀に関わったものとみられ、高知平野ではそれ以後の状況は不明であった。そのような状況の中での今回の発見は、横穴式石室への須恵器の副葬がさらに遡り得ると共に高知平野が比較的古い段階から須恵器の消費地であったことを示したものである。以下、型式変化が比較的表れやすい有蓋高杯を中心に検討してみることにする。

5点の有蓋高杯が副葬されており、内1点のみが蓋を欠いていた。まず、蓋をみてみると、口縁部高は1.6~2.2cmで、器高の1/3以上を占め、稜は凹線ないし段によって表現し、口縁部を明瞭にしている。口縁端部は内傾する凹面をなしている。口径は14.4~16.1cmと大きい。これらの特徴は第Ⅱ-1型式⁽⁴⁰⁾⁽⁴¹⁾に該当するものと考えられ、中村市具同中山遺跡群や古津賀遺跡から多くの類例が出土している。高杯では、立ち上がりはほぼ内傾してのび、端部は丸く仕上げられるか、細く仕上げられており、内傾する凹面ないし段を有するものはない。脚台部は比較的短く、その高さはFig.39-107が4.9cmである以外7.0~7.2cmである。透かしは、脚台高が最も短いFig.39-107にない以外は円形のもの三方に施されている。裾部の形態は、柱脚部からそのまま開くものと端部で内側に大きく屈曲さすものがある。これらの特徴は概ね蓋同様第Ⅰ-1型式の範疇で捉えて差し支えないものと考えられるが、立ち上がり端部の形態を新相の表れとみれば、第Ⅱ-1型式の中でも新しいものと見た方が良さそうで、将来的には第Ⅱ-2型式に組み込まれる可能性もある。ただし、第Ⅱ-2型式に組み込むとしても最も古く位置付けられよう。これらの有蓋高杯は器壁が厚く、中村市具同中山遺跡群や古津賀遺跡出土のものと比較して工人の差が出ているようで、古式須恵器とは明らかに技術の差が看取される。生産拡大における一般的な現象とも取れなくはないがそれだけでは片付けられないものがあるように思われる。また、製作時のセットで副葬されておらず、その意味も考慮する必要があるのではなかろうか。現段階では明確な類例がなく、そのようなセット関係を全く考えていなかったともみられ、その実体が注目される。

他の器種では、短頸壺をみると3個体が確認されている。3個体とも胴部の最大径が胴部上位約1/3にある以外、胴部の形態にやや違いがみられる。即ち、全体に丸味があるもの(Fig.40-116)、肩部がやや張るもの(Fig.40-117)、大きく肩が張るもの(Fig.40-118)がみられる。このようにやや形状を異にするが、追葬が行われた痕跡がないことから同時期のものとみられる。その他の器種もFig.39-115のように専用に造られた器種がみられるもののほぼ同じ時期幅で捉えられよう。

次に、不整土坑や盛土周辺から出土した須恵器について触れてみたい。出土量は少ないが、Fig.42-126のように同じ型式に属するものがある一方で、Fig.42-127・128のように型式差があるものもみられる。特にFig.41-125のような須恵器が不整土坑から出土したことは前述のとおりこれらの遺構が墓前祭祀に関係した遺構であったことを意味しており、築造後しばらくの間墓前祭祀が行われたと判断され、その時期を6世紀末~7世紀初めと推察することができよう。

当初、この不整土坑は1号主体部を中心とした古墳と尾根とを区画する意味で設置したものではないかと考えていたが、長畝4号墳が確認されるに至り、それとの関連を考えた方が状況に即しているものと判断されるようになった。なお、今回の発見はすべてが県内初のものであり、今後類例の発見をまって改めて検証してみたい。

4. まとめ

叙上、長畝古墳群のそれぞれの問題点を検討してきたが、十分に言及できなかった点もあり、それらについては別稿に譲りたい。特に、南四国における古墳の出現とその展開については空白部分が多く、現段階では長畝4号墳以降の後期古墳が優位に立っており、古墳文化の開花はそれ以降ともとれる状況を呈している。折に触れて南四国の地域性を取上げているのであるが、実体はどのようなものであったであろうか。以下、今回確認された遺構についてまとめてみたい。

まず、長畝遺跡については、2基の土坑が確認され、内1基からは弥生時代中期の壺形土器が完形に近い形で検出された。その出土状況からみて祭祀色の強いものではないかとみられる。SK-2の方は出土遺物がなく決め手を欠くが、遺構の形状からみて土坑墓の可能性が強いのではなかろうか。時期的には埋土的にみる限りSK-1と大きな隔たりはないものとみられる。前述の奥谷南遺跡からも同様の形態の土坑が検出されており、同一系統のものであろう。

長畝古墳群では、まず、尾根頂部から検出された土坑についてみてみたい。これも決め手となる出土遺物がなく、遺物からのアプローチができず、前述のような相対的な見方をとらざるを得なかった。形状的には土坑墓と断言できるものではないが、その可能性が強いではなかろうか。時期的にも、埋土からみる限り、1・2号主体部とはほぼ同じものであり、中世以降の所産とは考え難く、その設置場所が尾根頂部であることを考慮すれば前述のように弥生時代ないし古墳時代初めの所産と考えることも可能であろう。南東斜面部から検出したSK-10は先の土坑とは明らかに埋土等が異なっており、時期的には新しいものと考えられる。長畝2~4号墳については、長畝2号墳が古墳時代前期の新しい時期、西暦では4世紀後半に築造されたものと考えられ、その主体部を切って構築された長畝3号墳は長畝2号墳の築造から時間的に経過した5世紀後半ではなかろうか。長畝4号墳は、鉄製品をみる限り、5世紀後半代に出現するものもみられるが、副葬された須恵器をみれば、6世紀第Ⅱ四半期の範疇で捉えることが可能であろう。以後、6世紀末~7世紀初めまで墓前祭祀が行われたことが推察される。それ以降は山林に戻り、近世末になって再び人の痕跡が伺われ、戦後には本格的な開墾が行われ長畝4号墳西側の人為痕跡を残す以外遺跡たる形状を留めないほどに変貌し今日に至る。さらに、近々遺跡は跡形もなく高知自動車道にその姿を変えようとしている。

長畝古墳群の本調査を担当して熟調査の難しさを実感すると共に遺跡と調査員との巡り合わせを感じる。ここで多くを述べることはできないが、遺跡に対する取り組みによってその評価も代り、残されていた真実も捉えられずに無に帰すこともある。また、客観的視野に立った調査の重要性も改めて痛感した。

最後に、度々現場に足を運んでいただいた石野博信先生を始めとして文化庁西田・坂井両文化財調査官等諸先生・先輩、同僚諸氏には多大な御指導、御教示をいただいた。また、発掘調査においては道路公団高松建設局高知工事事務所、地元定林寺地区の方々には多大な御理解と御協力を頂いた。改めてここに厚く御礼申し上げる次第である。

註

- (1) 平成6年度に高知自動車道建設に伴って実施された調査で石室墓群が検出されている。
- (2) 山本哲也『高岡山古墳群発掘調査報告書』高知県教育委員会 1985

- (3) (2) に同じ
- (4) 『高知県史 考古編』高知県 1968, 岡本健児『高知県の考古学』郷土考古学叢書 吉川弘文館 1966
- (5) 廣田典夫「第3編古代 第1章古墳時代」『南国市史』上巻 南国市 1979
- (6) 南国市東崎遺跡・五軒屋敷遺跡・金地遺跡, 土佐山田町ひびのき遺跡・林口遺跡など
- (7) 『忌部山古墳群』徳島県博物館 1983
- (8) 『天河別神社古墳発掘調査概報』徳島県教育委員会 1980
- (9) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告』4 (財) 徳島県埋蔵文化財センター 他 1994
- (10) (9) に同じ
- (11) (9) に同じ
- (12) 『新編 香川叢書 考古編』新編香川叢書刊行企画委員会, 廣瀬常雄『日本の古代遺跡8 香川』保育者 1983及び廣瀬常雄氏の教示による
- (13) 『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986, 『愛媛県内古墳一分布調査報告書一』愛媛県教育委員会 1992
- (14) (13) に同じ
- (15) (13) に同じ
- (16) (13) に同じ
- (17) (13) に同じ
- (18) 『愛媛県内古墳一分布調査報告書一』愛媛県教育委員会 1992
- (19) 栗田正芳の教示による
- (20) 廣田佳久「南四国の須恵器一周辺地域における須恵器の変遷一」『王朝の考古学』雄山閣 1995
- (21) 廣田典夫「南国市蒲原山東1号2号古墳の調査概要」『高知県文化財調査報告書』第22集 1977
- (22) 廣田佳久『伏原大塚古墳』土佐山田町教育委員会 1993
- (23) (20) に同じ
- (24) 山下平重・広瀬常雄・菅原康夫・廣田佳久「横穴式石室の地域性 四国地方」『季刊考古学』第45号 雄山閣 1993
- (25) 正岡睦夫 他「愛媛県における導入期の横穴式石室」『遺跡』第29号 1986
- (26) 柳沢一男「竪穴系横口式石室再考一初期横穴式石室の系譜一」『古文化論叢』下巻 1982
- (27) 森光晴・長井数秋ほか『三島神社古墳』松山市教育委員会 1972
- (28) 山崎信二『横穴式石室の地域別比較研究一中・四国編』1985
- (29) 廣田佳久「高知県の横穴式石室」『古代学協会四国支部第9回大会 発表資料』1995
- (30) 廣田典夫『古津賀古墳』中村市教育委員会 1975 副葬品の中には南四国では特異な遺物があり, 導入経路等が異なる可能性も考えられる。
- (31) 廣田典夫『とさ高間原古墳群』四国考古学叢書1 1968
- (32) 渡部明夫「四国」『古墳時代の研究 10 地域の古墳 I 西日本』雄山閣 1992
- (33) 柳沢一男「横穴式石室の導入と系譜」『季刊考古学』第45号 雄山閣 1993
- (34) (20) に同じ
- (35) この遺構番号は発掘調査時の番号である。
- (36) 『権現山51号墳』『権現山51号墳』刊行会 1991
- (37) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鍬について」『檀原考古学研究所論集 第八』吉川弘文館 1988 これ以外の鉄鍬の分類も同書の分類を使用した。
- (38) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相一1.南四国の古式土師器」『研究紀要』第1号 (財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター 1994

- (39) 『古墳時代の研究8 古墳Ⅱ 副葬品』雄山閣 1991
- (40) 廣田佳久「県内遺跡からみた持ち込み文物，古式須恵器について」『土佐史談』185号 1991
- (41) (30)に同じ 以下南四国の須恵器の型式については同書の型式分類を使用している。
- (42) 廣田佳久「須恵器」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1992 第30図264(古津賀遺跡)と第112図498(具同中山遺跡群)の杯蓋の口縁外面端部には刻目が施されている。

参考文献

- 後藤守一「古墳時代前期の剣」『考古学雑誌』第3号 1940
- 『高知県史 考古資料編』高知県 1973
- 「東予市二番山古墳出土須恵器・土師質土器について」『ふたな』創刊号 1977
- 『五郎兵衛谷古墳』(松山市文化財調査報告書13) 1978 松山市教育委員会 1978
- 末永雅雄『増補 日本上代の武器』木耳社 1981
- 『石槌山古墳群』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財センター 1981
- 『長法寺南原古墳』大阪大学南原古墳調査団 1983
- 山本哲也ほか『古津賀遺跡』高知県教育委員会 1984
- 『弥生時代の研究5 道具と技術Ⅰ』雄山閣 1985
- 菅原康夫『日本の古代遺跡37 徳島』保育者 1988
- 『高月山古墳群調査報告書』(松山市文化財調査報告書19) 松山市教育委員会 1988
- 廣田佳久「須恵器」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』高知県教育委員会 1988
- 『九頭神遺跡発掘調査報告書』九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会 1988
- 『通谷山古墳発掘調査報告書』愛媛県砥部町教育委員会 1991
- 『北谷王神ノ木古墳・塚本古墳』(松山市文化財調査報告書21) 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991
- 『東山古墳群』(松山市文化財調査報告書41) 松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1991
- 山本哲也『大谷古墳』財団法人高知県文化財団 1991
- 廣田佳久『早咲遺跡』大方町教育委員会 1991
- 『古墳時代の研究 7 古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣 1992
- 『古墳時代の研究 10 地域の古墳Ⅰ 西日本』雄山閣 1992
- 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣 1993
- 『かいなご3号墳・平井谷1号墳』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター 1993
- 『石塚山古墳群』綾歌町教育委員会 1993
- 石井昌國・佐々木稔『古代刀と鉄の科学』考古学選書39 雄山閣 1995
- 尾上元規「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について」『古代吉備』第17集 1995
- 廣田佳久「高知県長畝3号墳の概要とその意義」『考古学ジャーナル』394 特集 四国の考古学 ニューサイエンス社 1995
- 廣田佳久「高知県長畝古墳」『季刊 考古学』第52号 特集 前期古墳とその時代 雄山閣 1995
- 廣田佳久「高知県南国市長畝3号墳」『月刊 文化財発掘出土情報』147号 ジャパン通信社 1995
- 廣田佳久「遺跡との出会い8-長畝3号墳-」『文教高知』No.33 高知県文教協会 1995

圖 版

長畝古墳群試掘調査





調査前試掘トレンチ (西より)



試掘トレンチ完掘状態 (北より)

PL.2



試掘トレンチ鉄剣出土状態(東より)



試掘トレンチ鉄剣出土状態(南より)

長畝遺跡





調査前全景(東より)



調査前全景(西より)

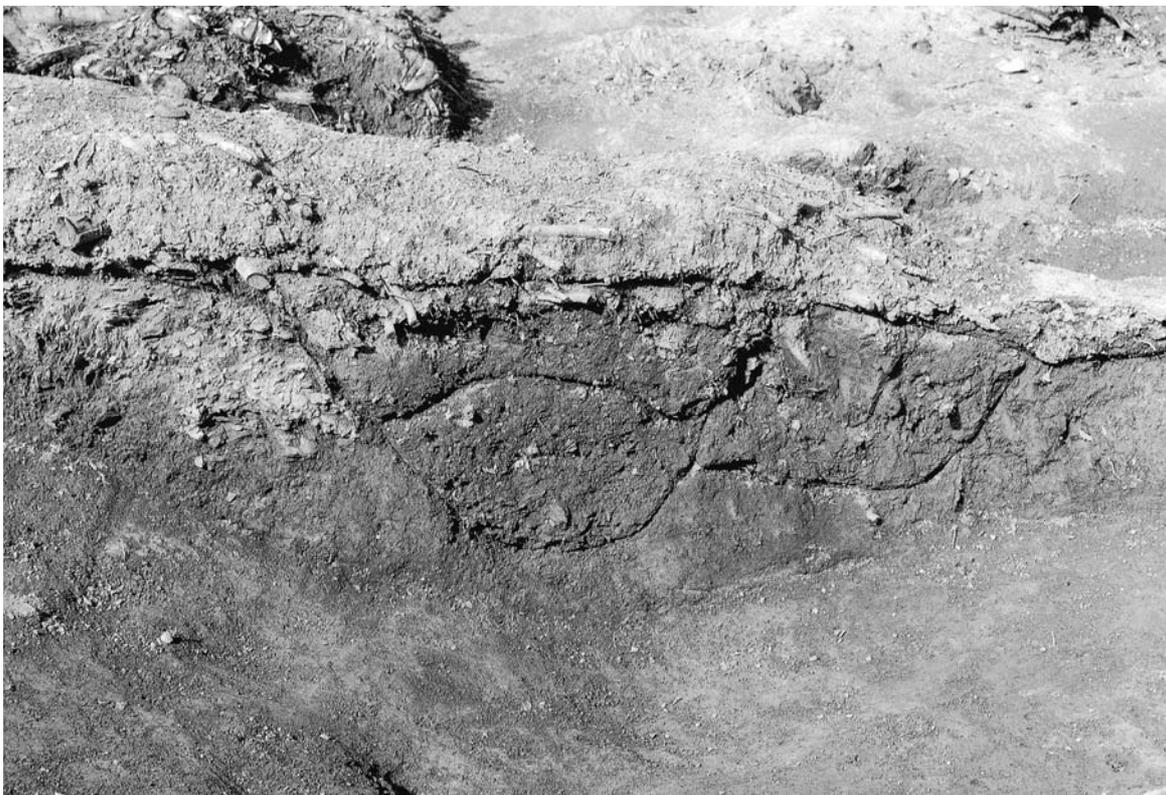
PL.4



調査区全景(北上空より)



調査区全景(南上空より)



SK-1 セクション(南より)



弥生土器出土状態

PL.6



SK-2 セクション(東より)



SK-2(東より)

長畝古墳群





調査前全景(西より)



調査前樹木伐採後全景(西より)

PL.8



トレンチ全景 (西より)



A・D・Eトレンチ (東より)



遺構検出状態(西より)



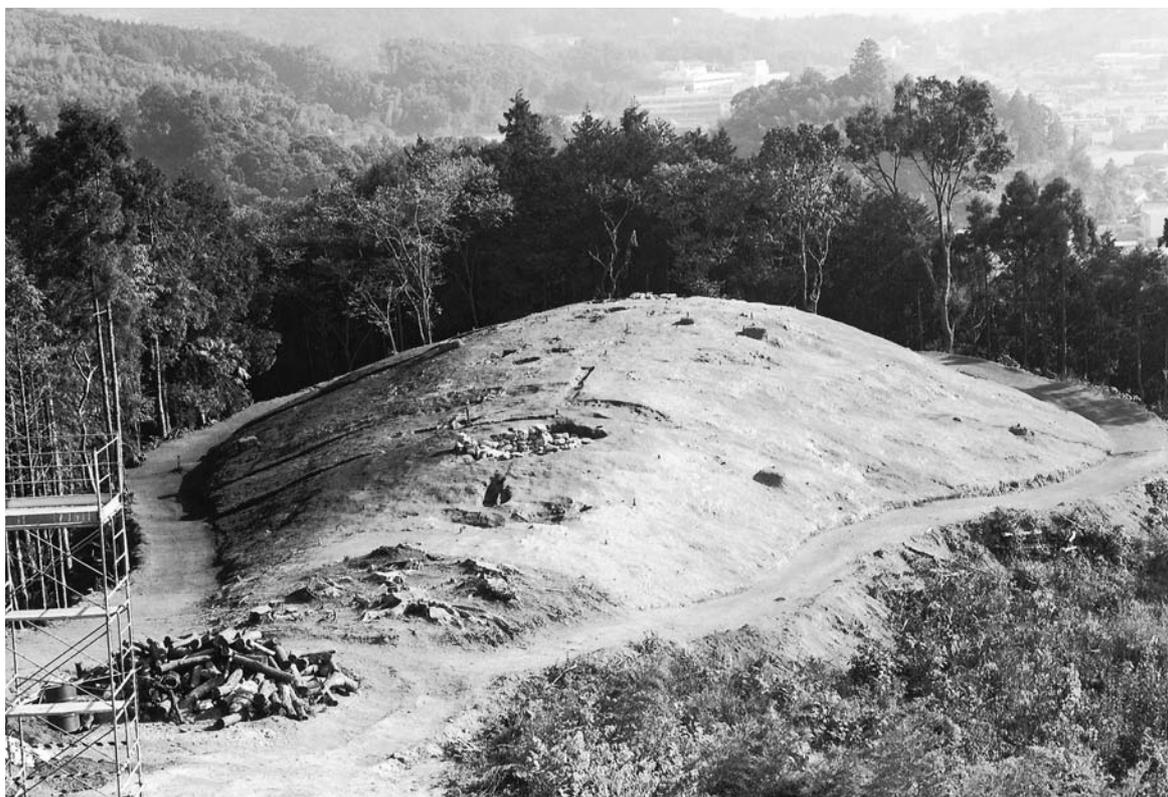
遺構検出状態(西より)



遺構完掘状態 (西より)



遺構完掘状態 (南上空より)



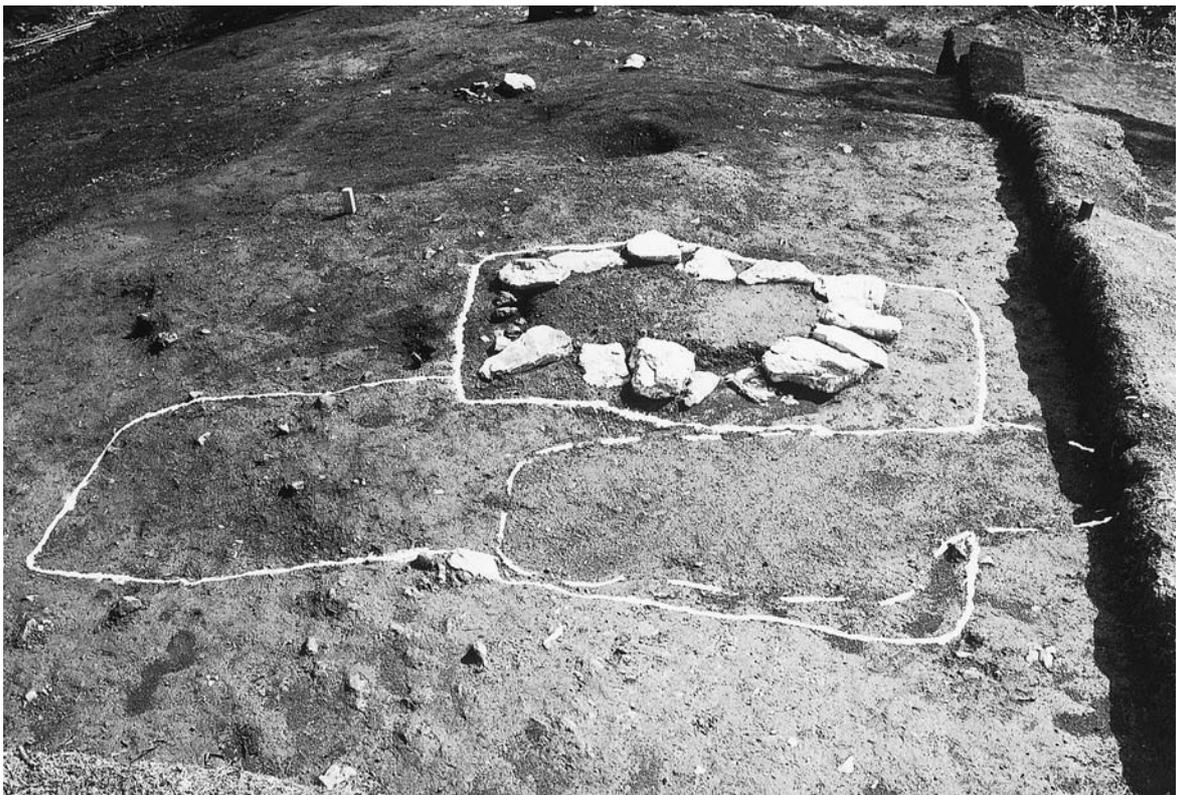
バンク除去後遺構完掘状態(西より)



バンク除去後遺構完掘状態(西より)



小竪穴式石室 (長畝3号墳), 1号主体部 (長畝2号墳) 検出状態 1 (西より)



1号主体部 (長畝2号墳), 小竪穴式石室 (長畝3号墳) 検出状態 2 (西より)



1号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)



1号主体部(長畝2号墳) セクション(南より)



1号主体部 (長畝2号墳), 小竪穴式石室 (長畝3号墳) 1 (南より)



1号主体部 (長畝2号墳), 小竪穴式石室 (長畝3号墳) 2 (南より)



1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)(西より)



1・2号主体部(長畝2号墳), 小竪穴式石室(長畝3号墳)完掘状態(西より)



1号主体部(長畝2号墳)完掘状態(西より)



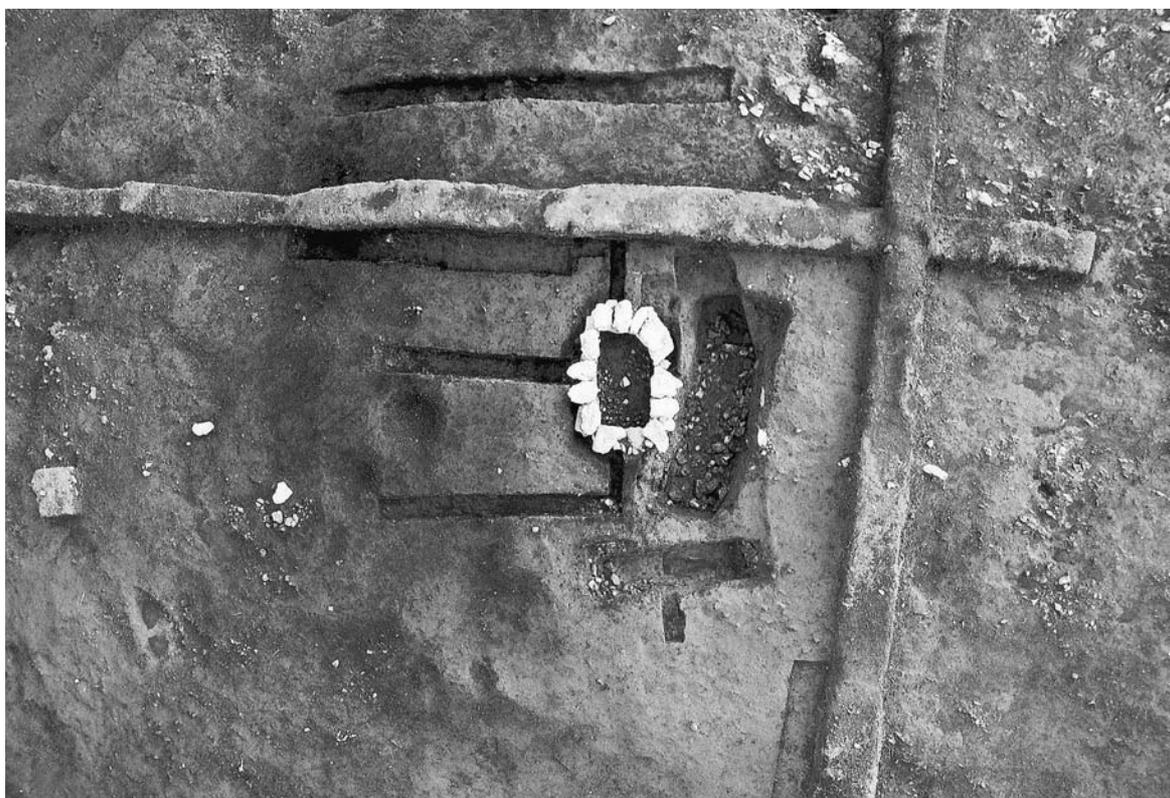
1号主体部(長畝2号墳)完掘状態(南より)



2号主体部(長畝2号墳) セクション(西より)



2号主体部(長畝2号墳) 完掘状態(西より)



1・2号主体部 (長畝2号墳), 小竪穴式石室 (長畝3号墳) (北上空より)



1・2号主体部 (長畝2号墳), 小竪穴式石室 (長畝3号墳) (西より)



小竪穴式石室（長畝3号墳）検出状態（西より）



小竪穴式石室（長畝3号墳）（西より）



長畝3号墳サブトレンチセクション1(南より)



長畝3号墳サブトレンチセクション2(東より)



長畝3号墳副葬品(19・20)出土状態



小竪穴式石室(長畝3号墳)(南より)



小竪穴式石室(長畝3号墳)北壁(南より)



小竪穴式石室(長畝3号墳)南壁(北より)



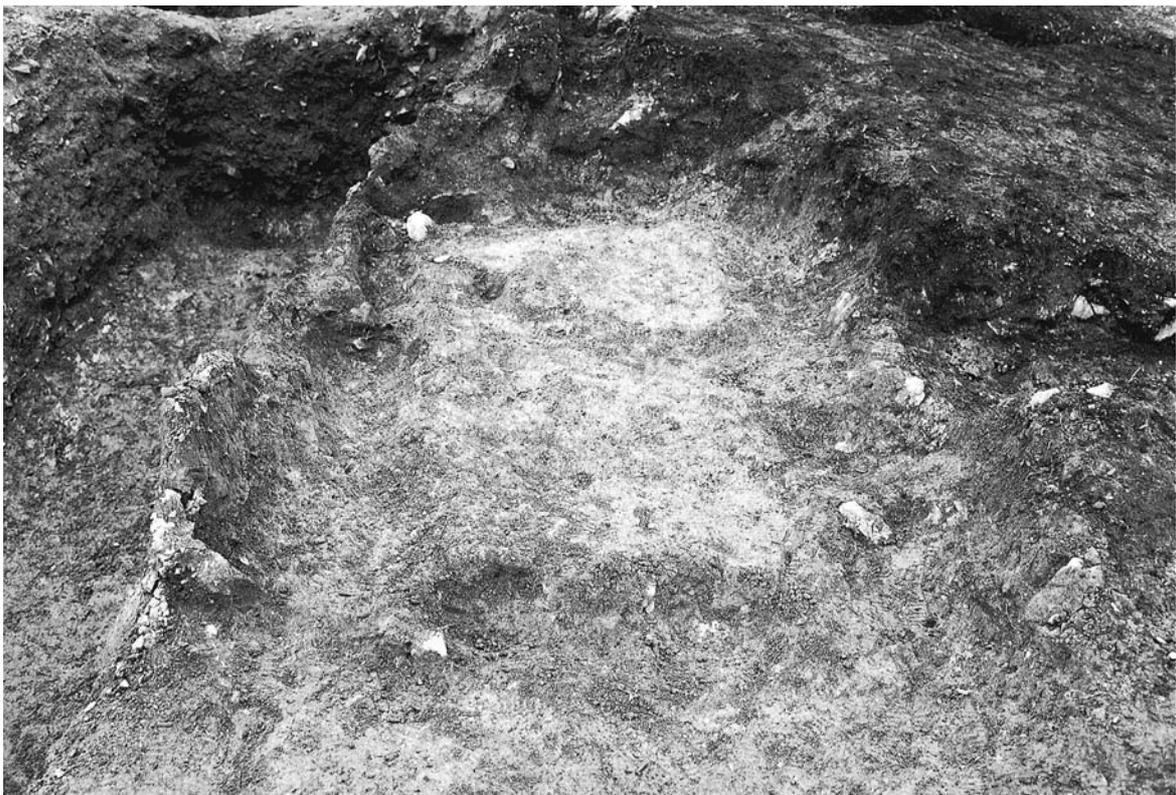
小竪穴式石室(長畝3号墳) 東壁(西より)



小竪穴式石室(長畝3号墳) 西壁(東より)



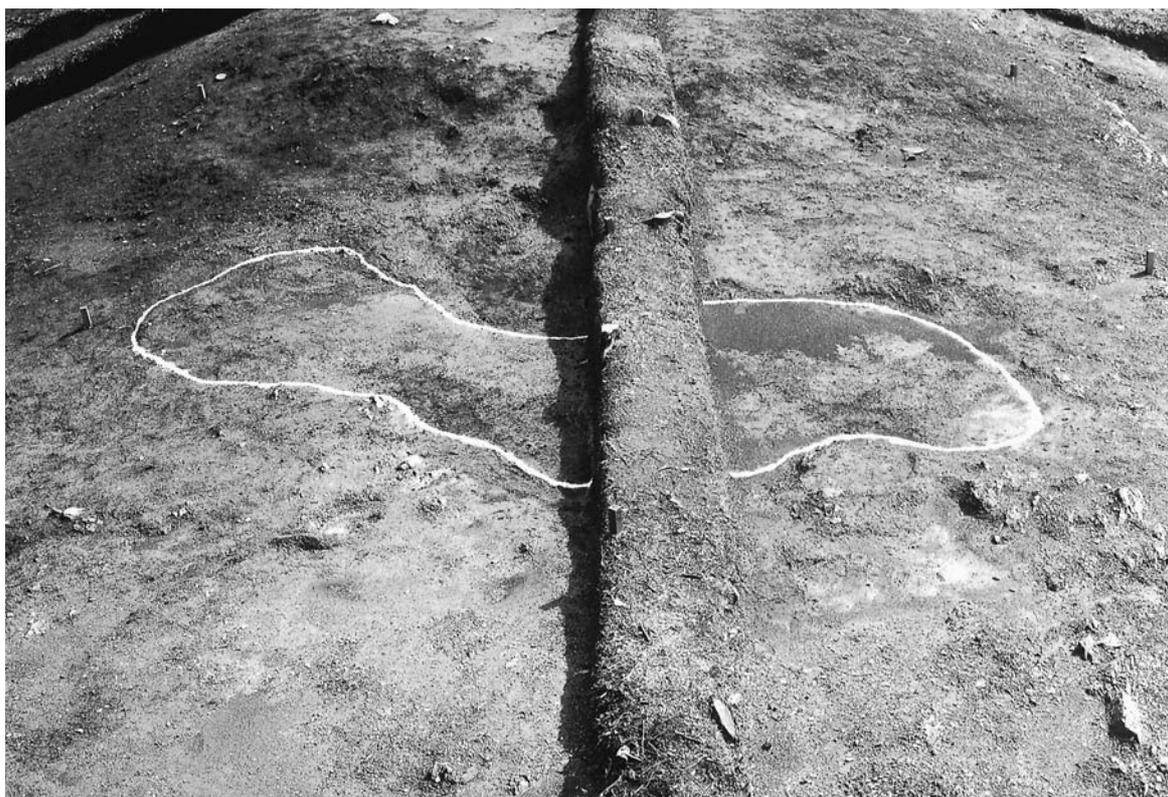
小竪穴式石室 (長畝3号墳), 1・2号主体部 (長畝2号墳) 完掘状態 (南より)



小竪穴式石室 (長畝3号墳) 完掘状態 (南より)



長畝4号墳主体部検出状態(西より)



長畝4号墳不整形土坑検出状態(西より)



横穴式石室(長畝4号墳) 検出状態(北東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 検出状態(南西より)



横穴式石室(長畝4号墳) セクション(南東より)



横穴式石室(長畝4号墳)(北西より)



横穴式石室(長畝4号墳)(北東より)



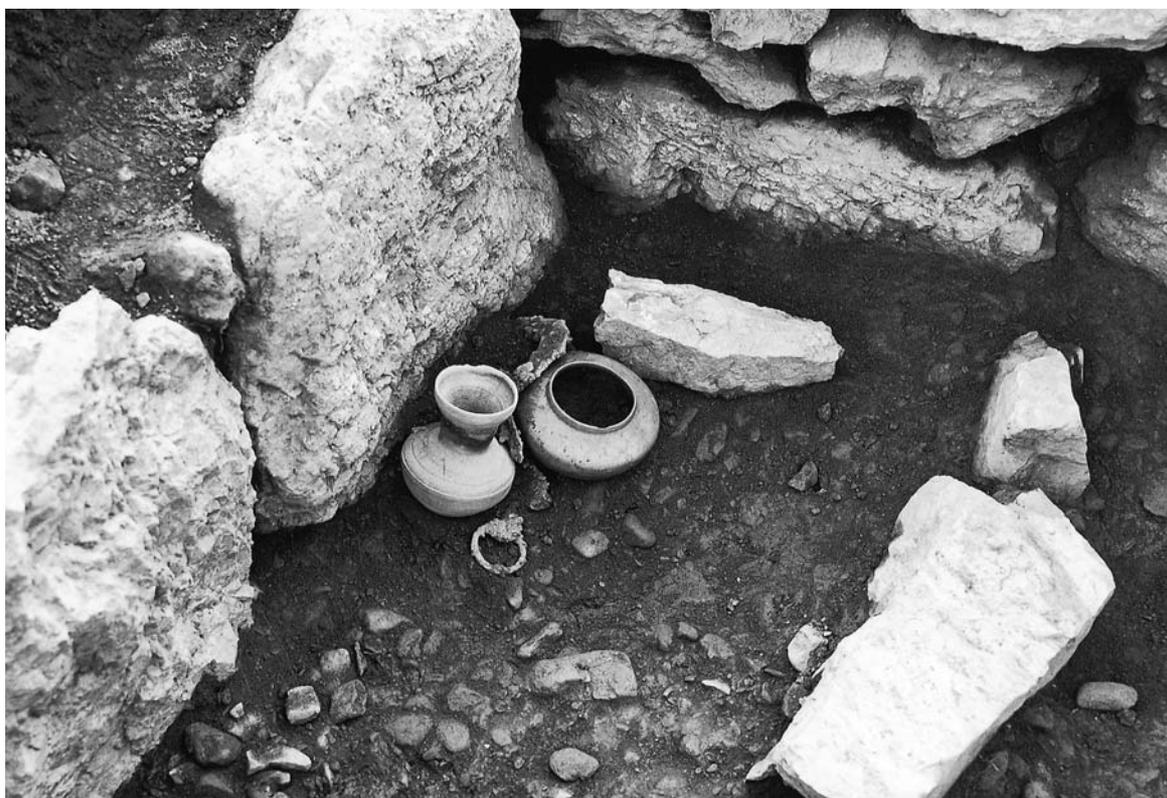
横穴式石室(長畝4号墳)(南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品(須恵器) 出土状態 1(南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品(須恵器) 出土状態 2(南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品(鉄製鋤先, 馬具, 須恵器) 出土状態(北東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品(鉄鎌, 鉄製鋤先, 馬具, 須恵器) 出土状態



横穴式石室(長畝4号墳) 副葬品(須恵器) 出土状態



長畝4号墳主体部1(北西より)



長畝4号墳主体部2(北西より)



横穴式石室(長畝4号墳)羨道トレンチセクション(北西より)



横穴式石室（長畝4号墳）羨道東壁（北西より）



横穴式石室（長畝4号墳）羨道西壁（北東より）



横穴式石室（長畝4号墳）奥壁（北西より）



横穴式石室（長畝4号墳）玄門部（南東より）



横穴式石室(長畝4号墳) 西側壁(北東より)



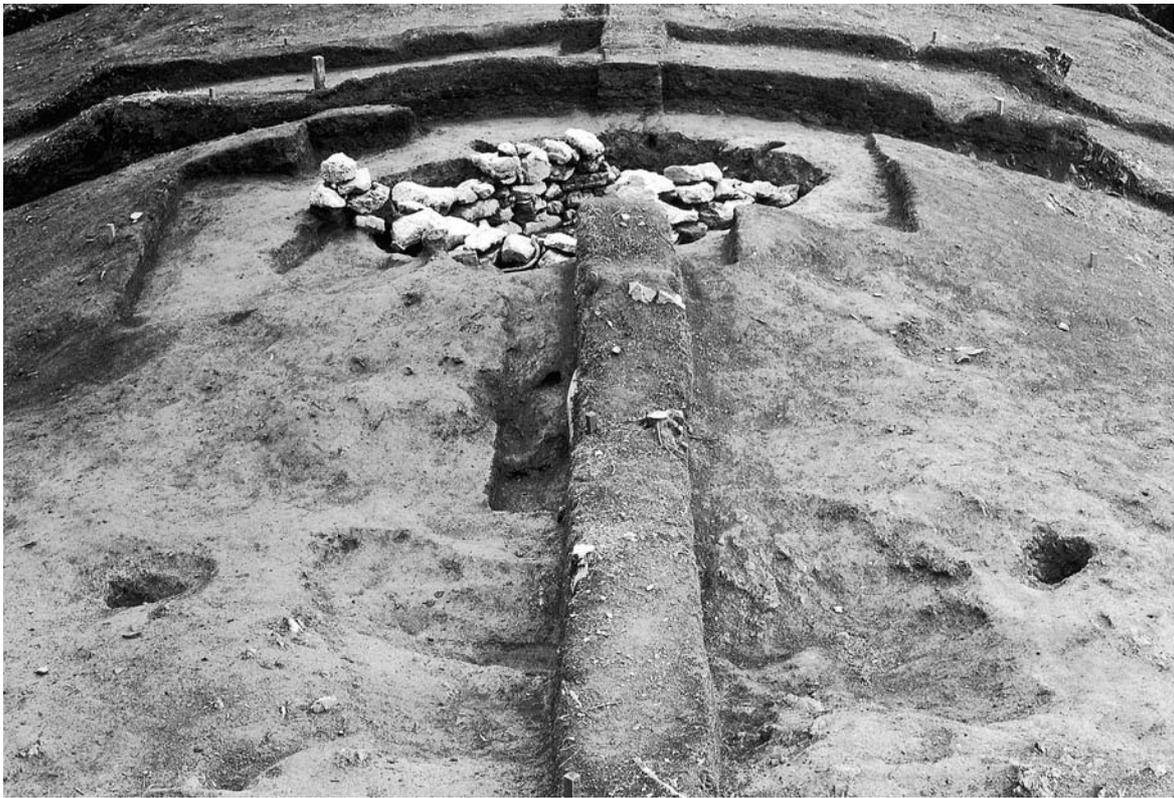
横穴式石室(長畝4号墳) 東側壁(南西より)



横穴式石室(長畝4号墳)(南西より)



横穴式石室(長畝4号墳)(北東より)



長畝4号墳1(西より)



長畝4号墳2(西より)



長畝4号墳3(東より)



長畝4号墳4(南上空より)



横穴式石室(長畝4号墳) 完掘状態(北西より)



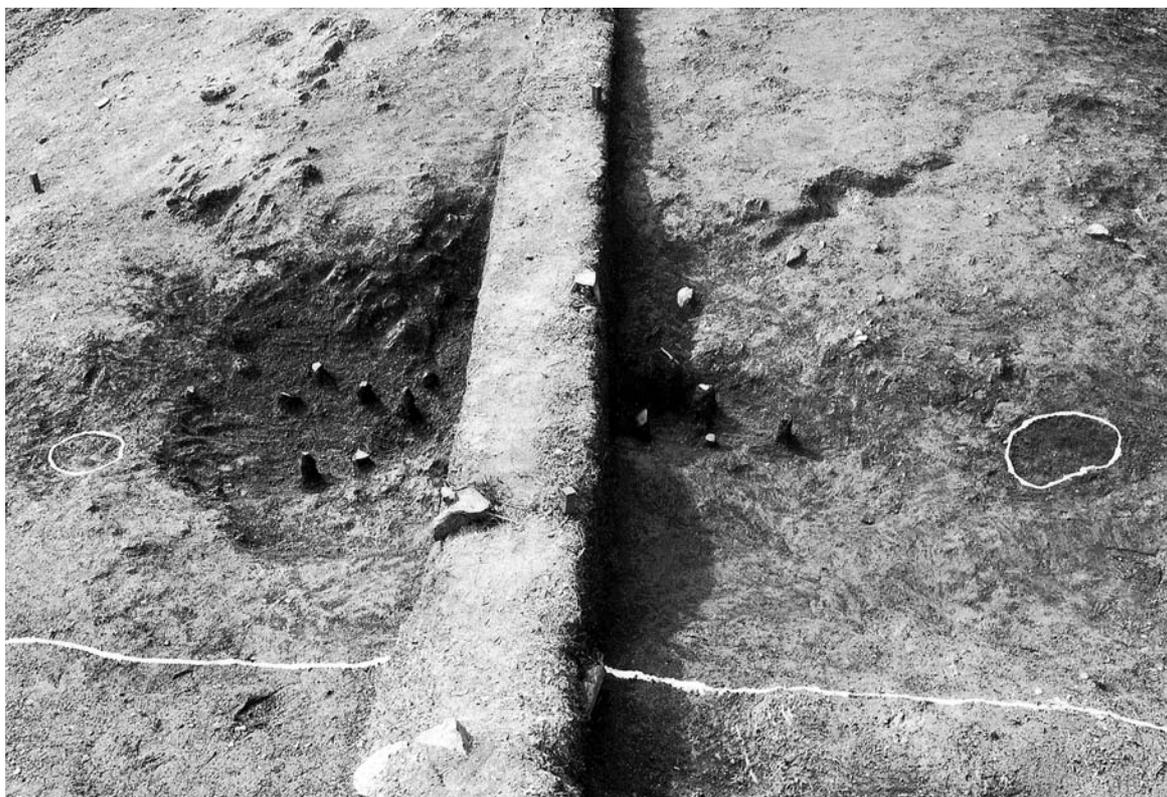
横穴式石室(長畝4号墳) 完掘状態(南東より)



横穴式石室(長畝4号墳) 完掘状態(南西より)



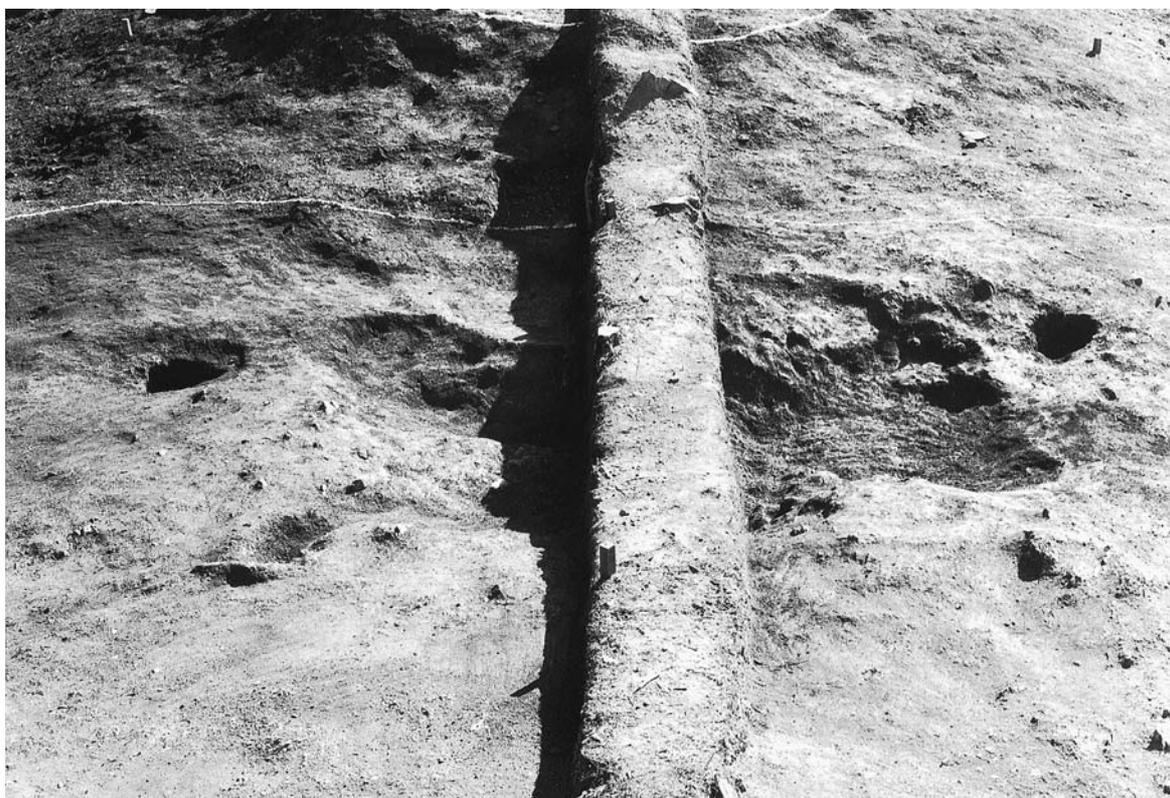
横穴式石室(長畝4号墳) 完掘状態(北東より)



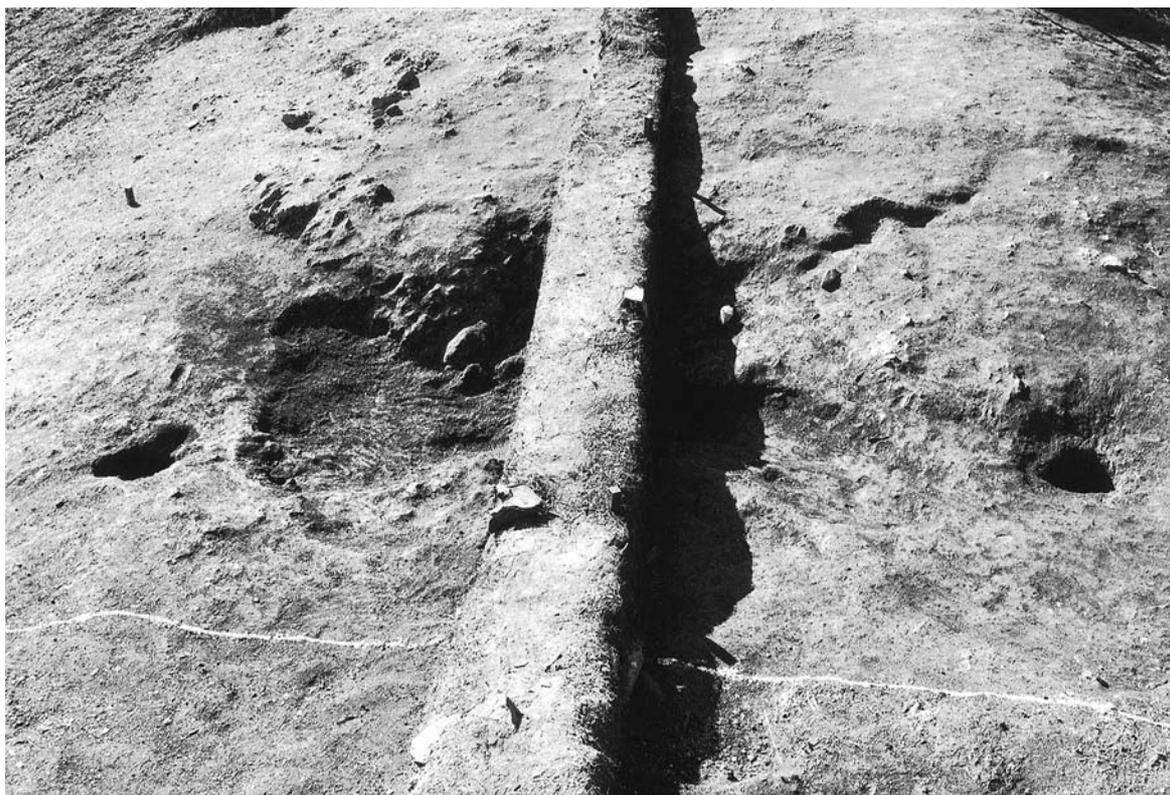
長畝4号墳 不整形土坑遺物出土状態(東より)



長畝4号墳 不整形土坑セクション(北より)



長畝4号墳 不整形土坑，柱穴完掘状態（西より）



長畝4号墳 不整形土坑，柱穴完掘状態（東より）



SK-1・9 検出状態 (北西より)



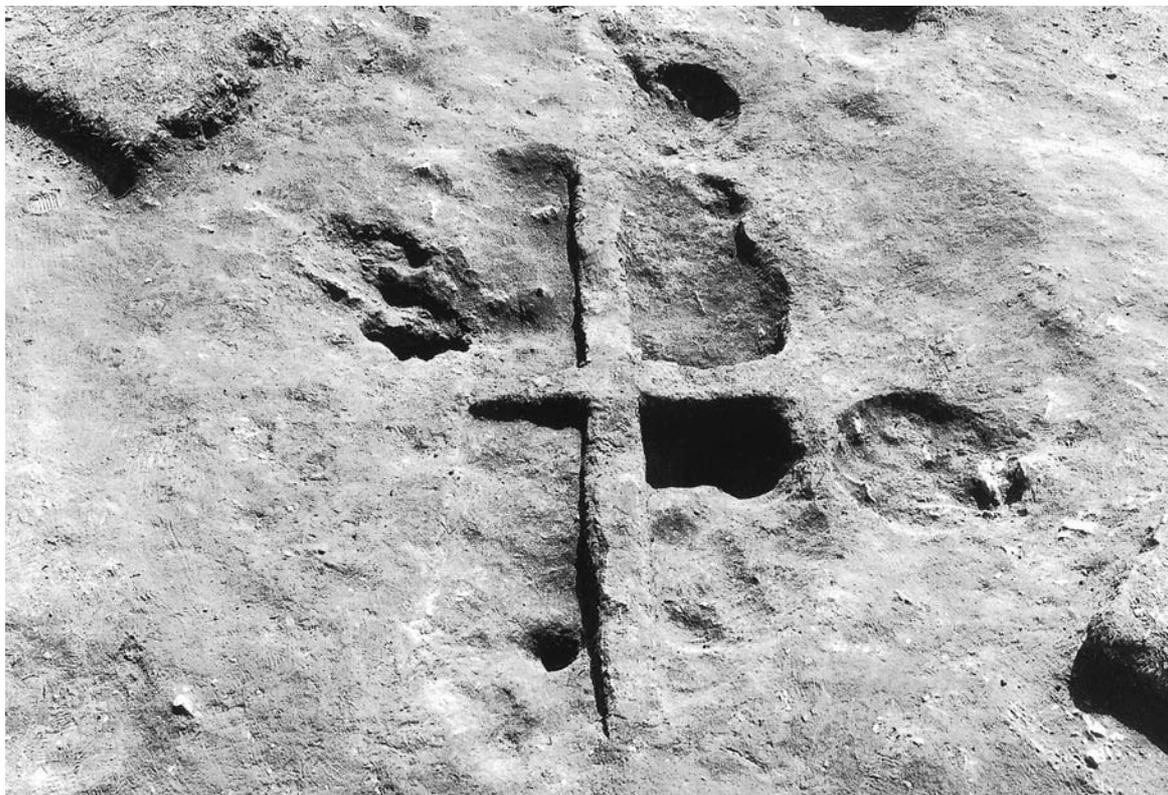
SK-3~6 検出状態 (西より)



SK-7~9 検出状態 (西より)



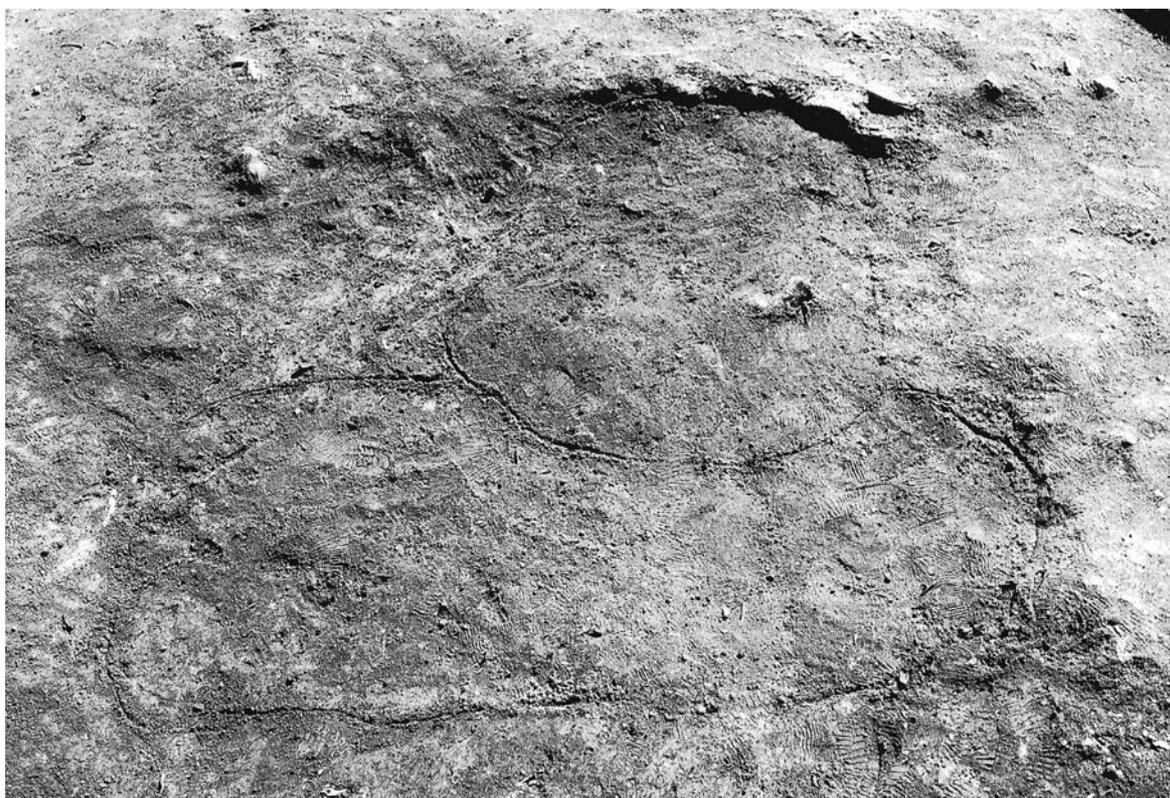
SK-10 検出状態 (北より)



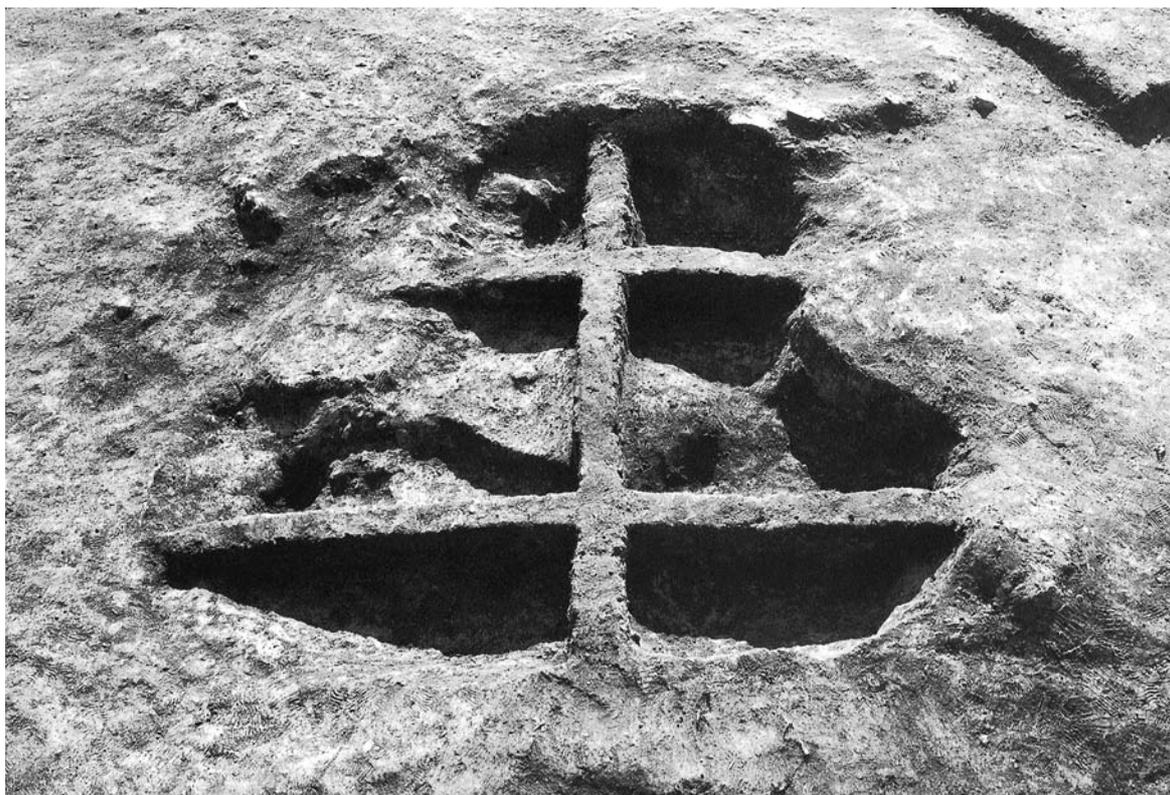
SK-1 (北西より)



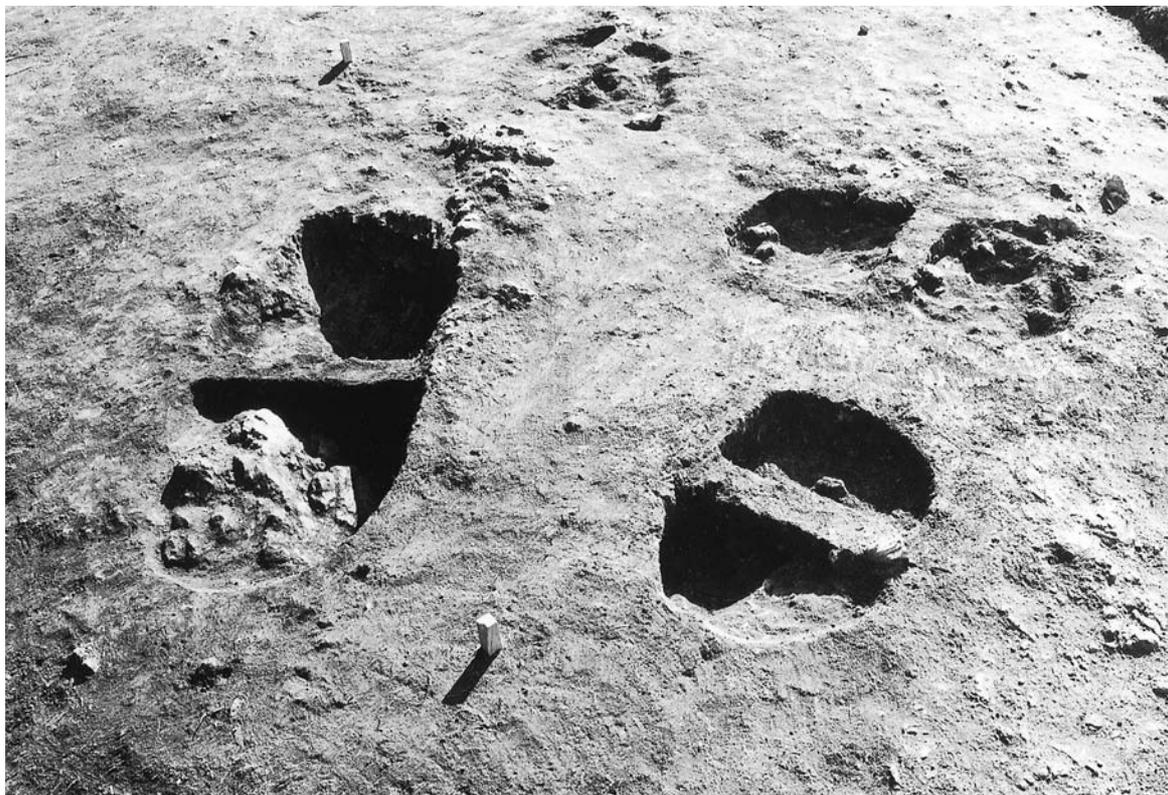
SK-1 完掘状態 (北西より)



SK-2・9 検出状態 (西より)



SK-2・9 (西より)



SK-3~6(西より)



SK-3~6完掘状態(東より)



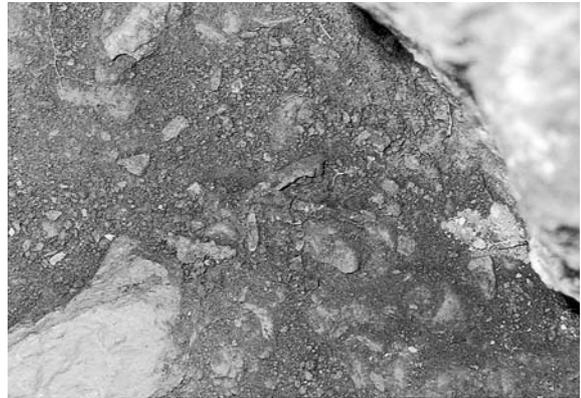
横穴式石室副葬品 (21) 出土状態



横穴式石室副葬品 (23) 出土状態



横穴式石室副葬品 (30) 出土状態



横穴式石室副葬品 (40) 出土状態



横穴式石室副葬品 (58) 出土状態



横穴式石室副葬品 (管玉等) 出土状態



横穴式石室副葬品 (練玉等) 出土状態



横穴式石室副葬品 (ガラス小玉, ソロバン玉等) 出土状態



1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣



1号主体部(長畝2号墳)出土鉄剣



1号主体部(長畝2号墳)出土土師器



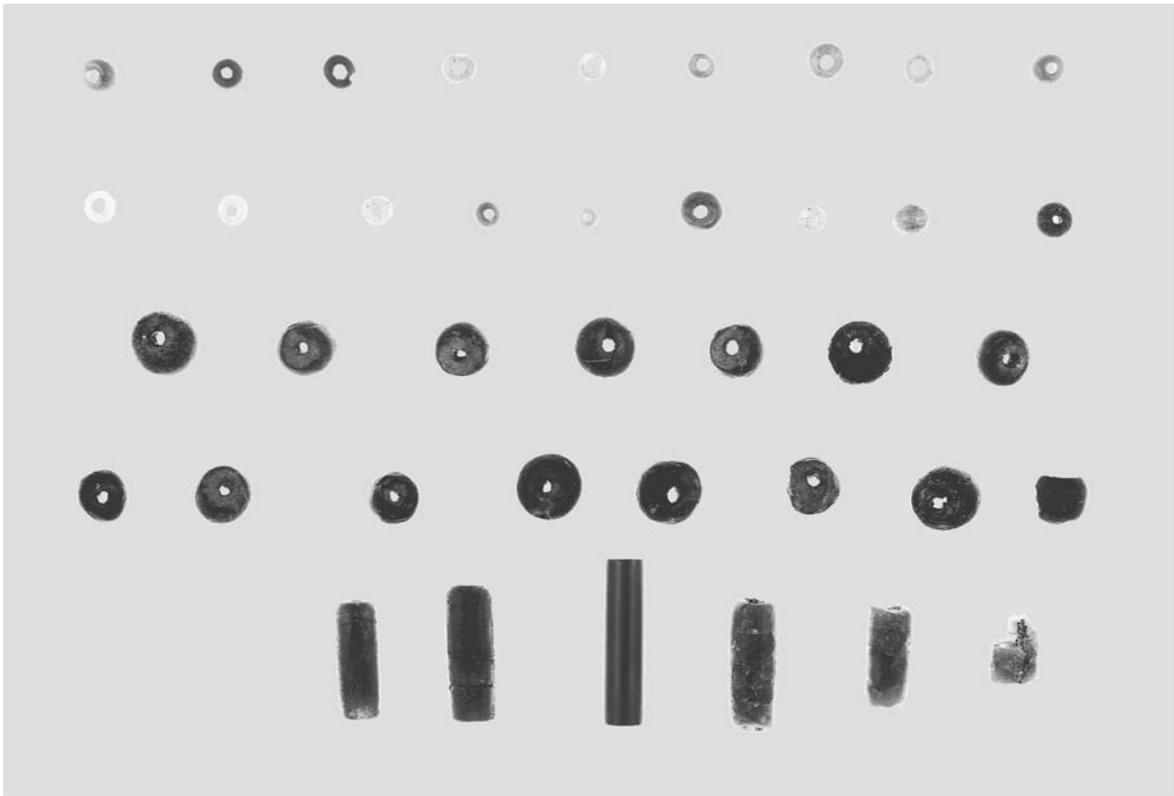
横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(高杯)



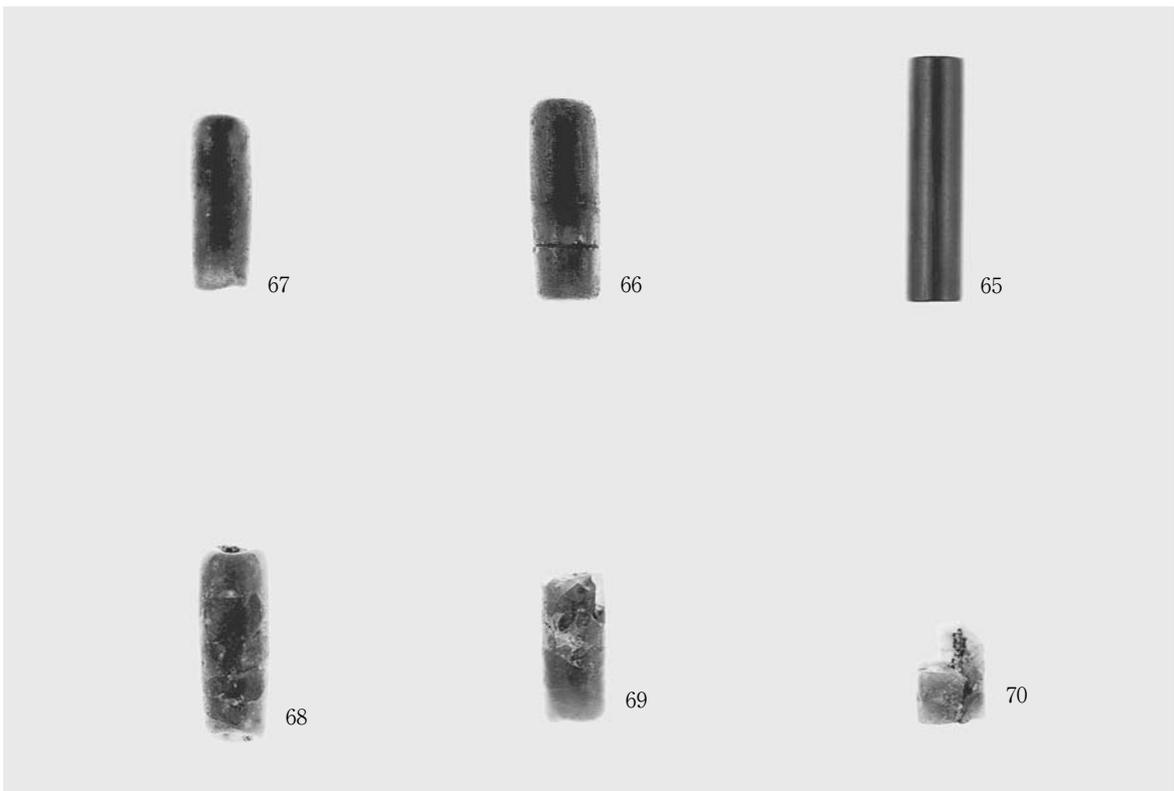
横穴式石室(長畝4号墳)出土馬具(轡)



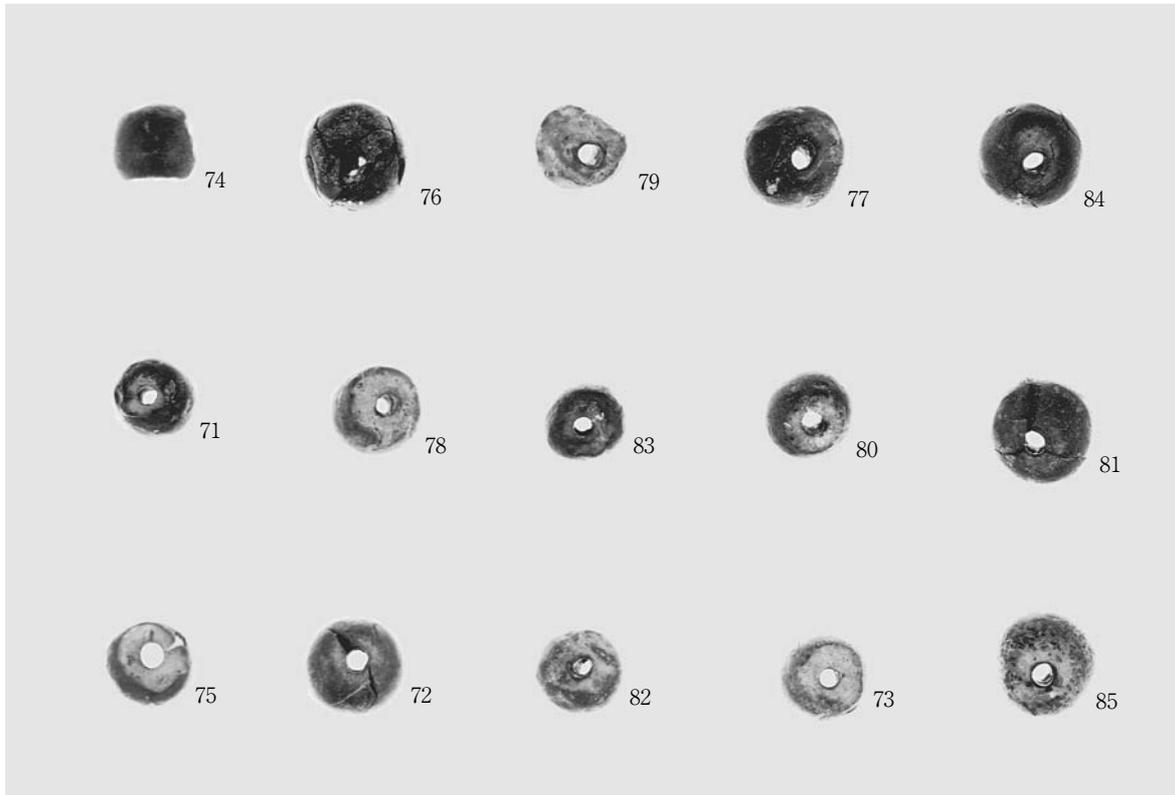
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄製鋤・鋤先



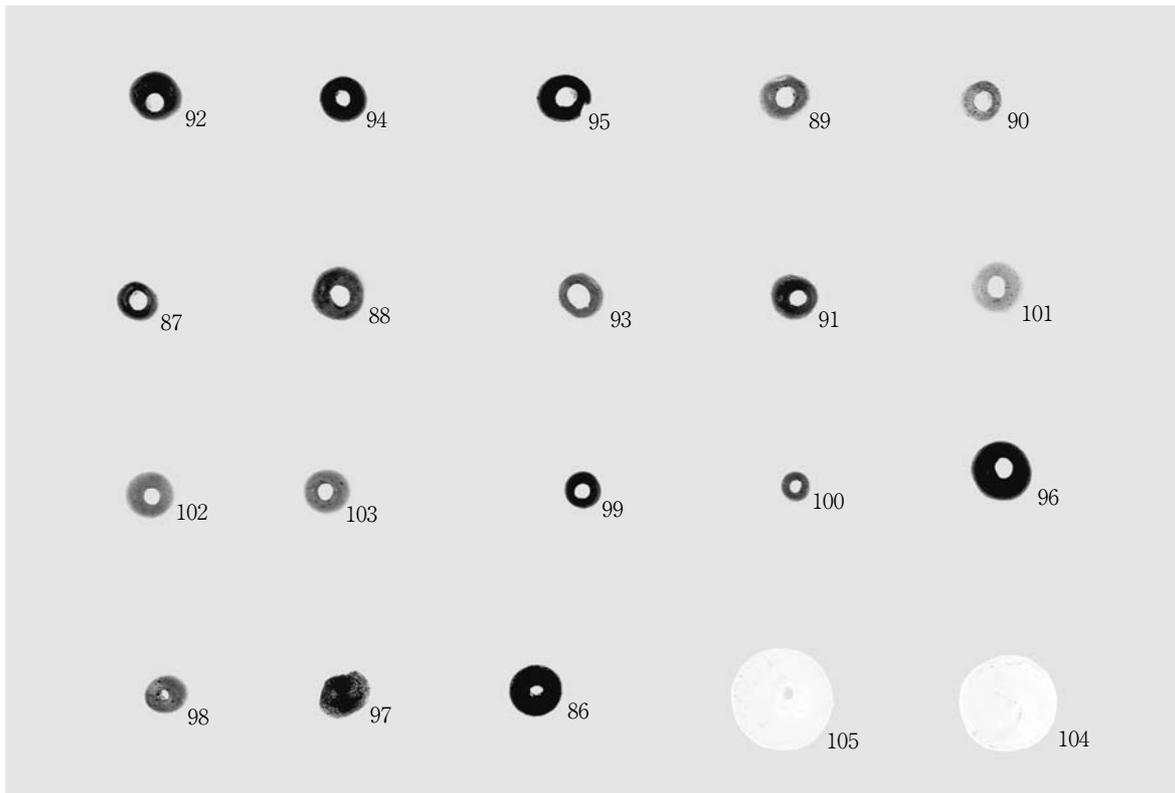
横穴式石室(長畝4号墳)出土装身具(玉類)



横穴式石室(長畝4号墳)出土管玉



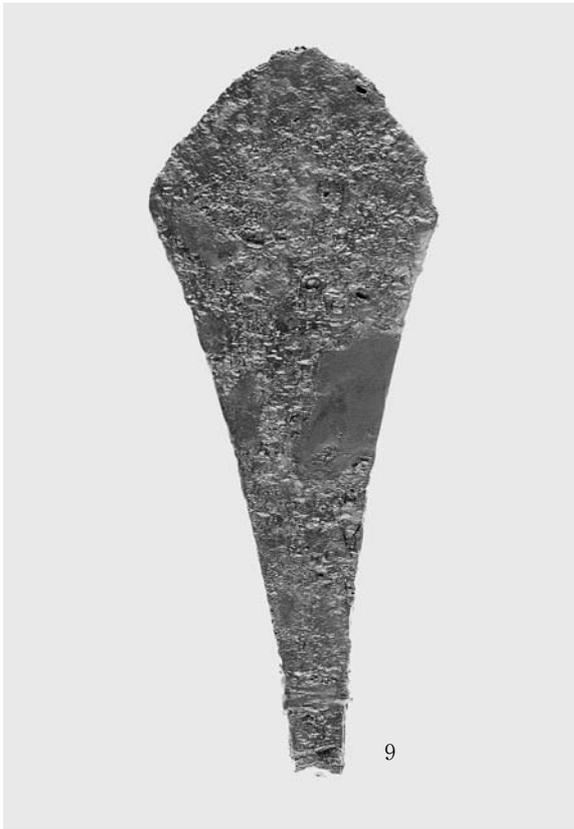
横穴式石室(長畝4号墳)出土練玉



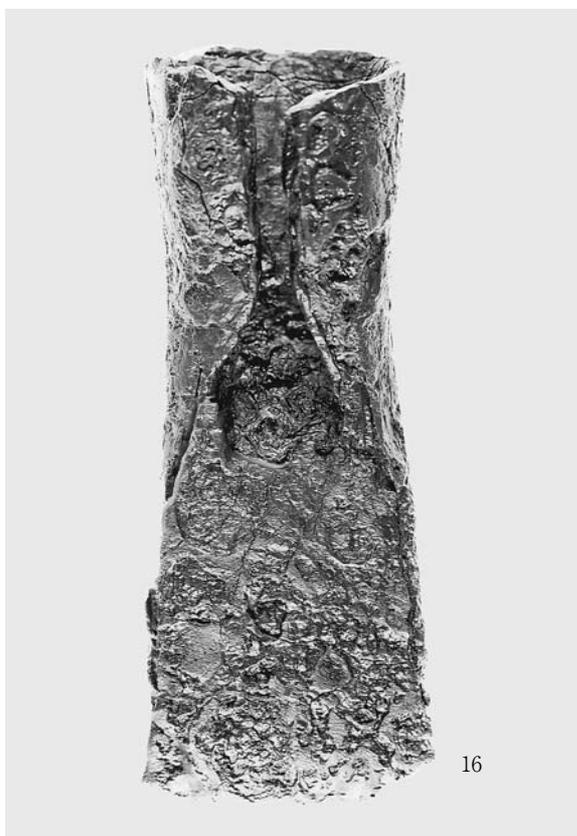
横穴式石室(長畝4号墳)出土ガラス玉, ソロバン玉



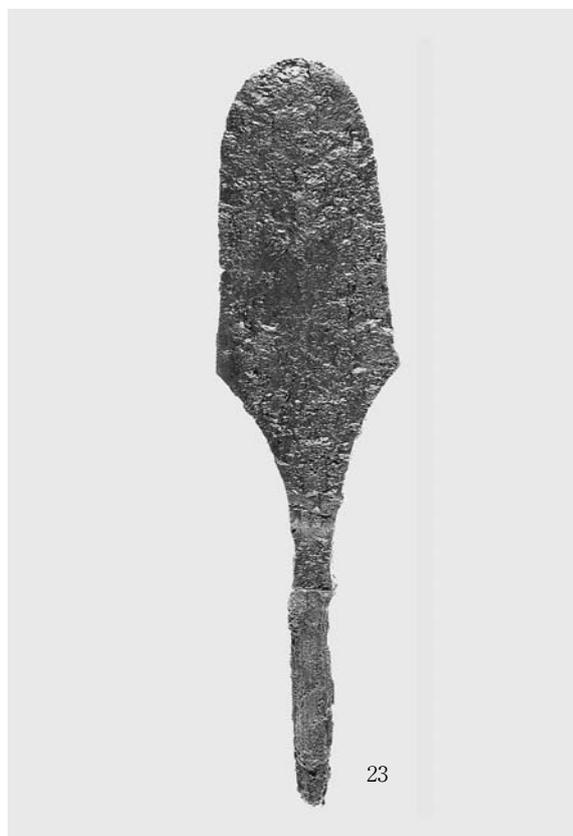
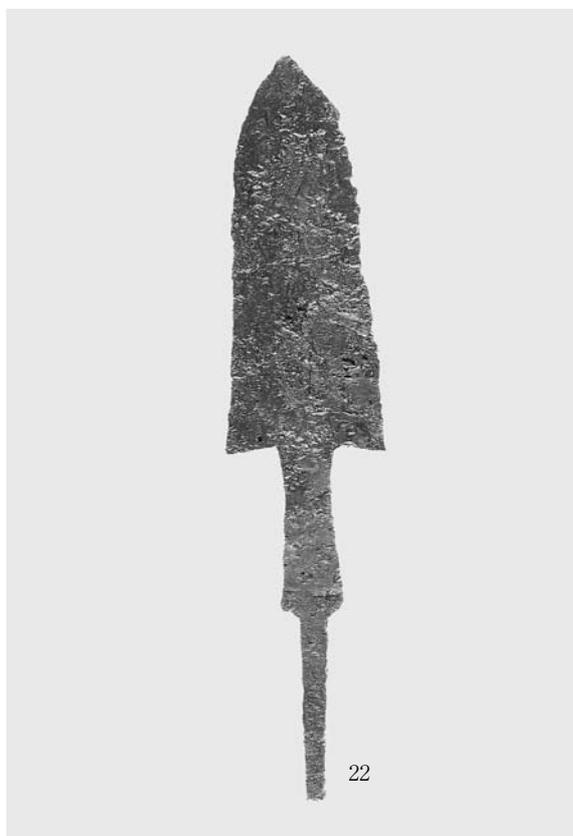
1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鍬1



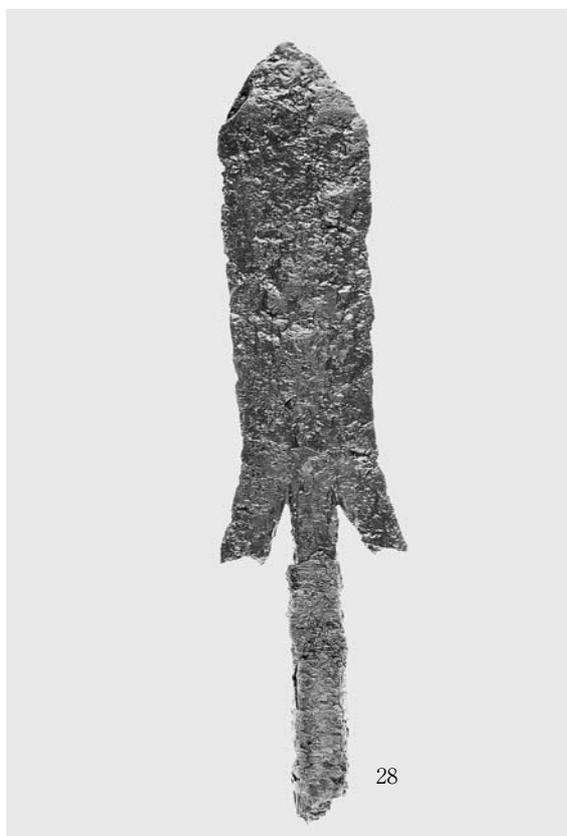
1号主体部(長畝2号墳)出土鉄鏃 2



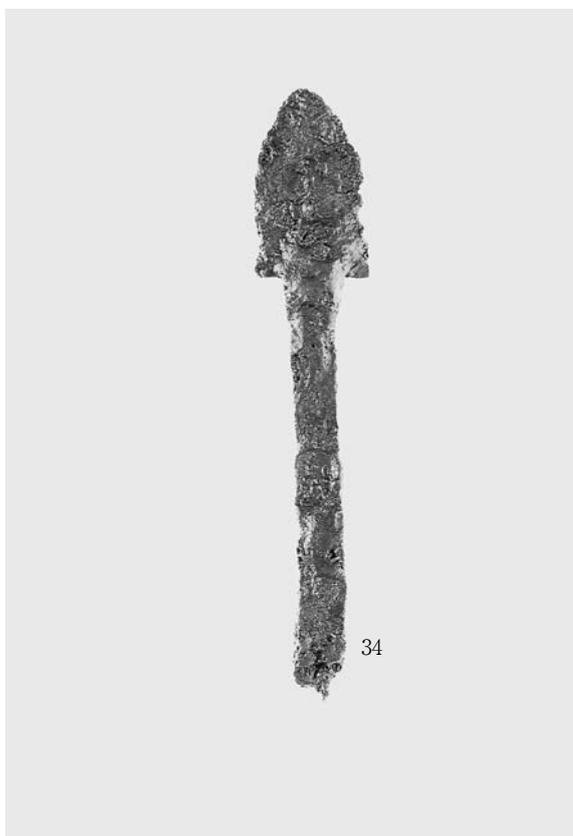
1号主体部(長畝2号墳)出土鉄斧, 2号主体部(長畝3号墳)出土鉄鏃(19), 横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃1(21)



横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鎌 2



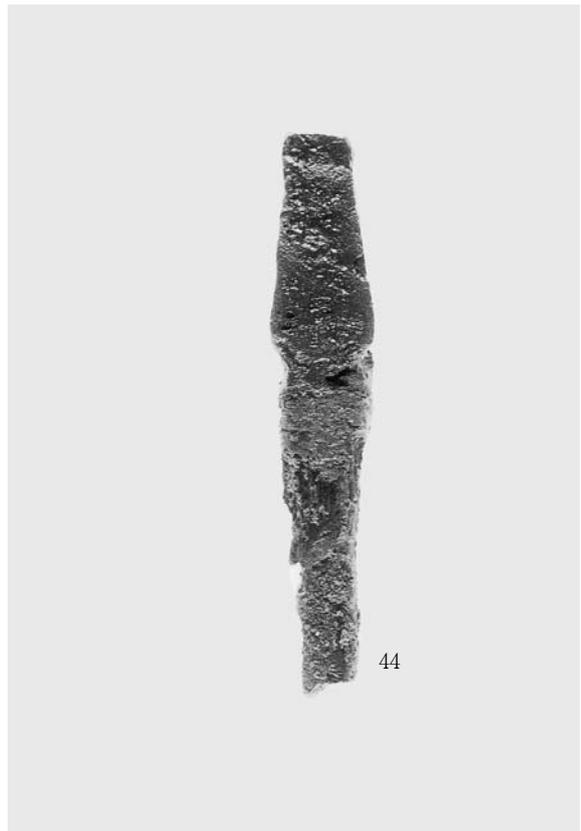
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃3



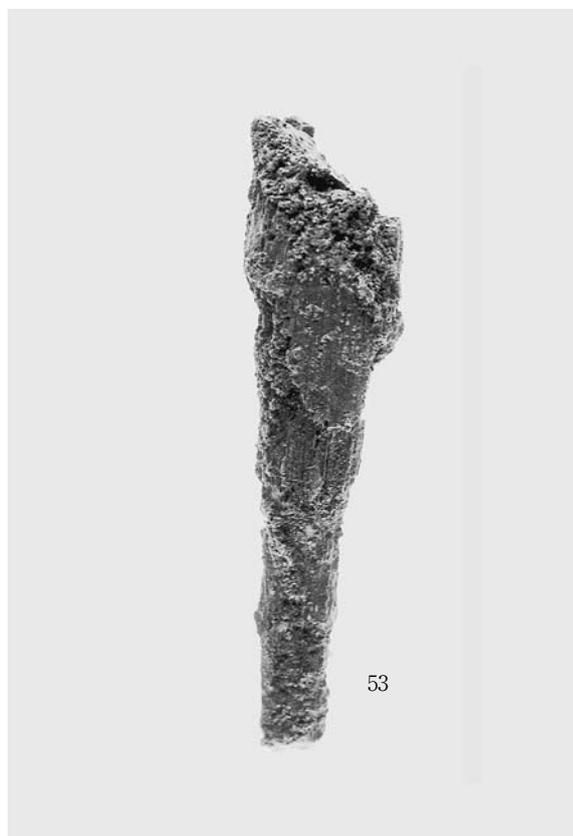
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃4



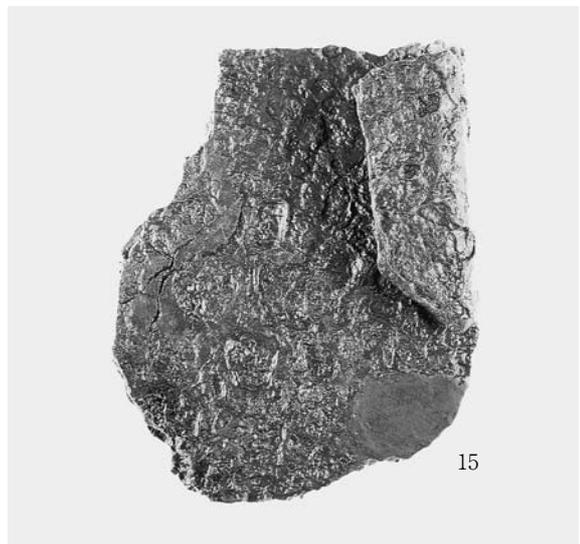
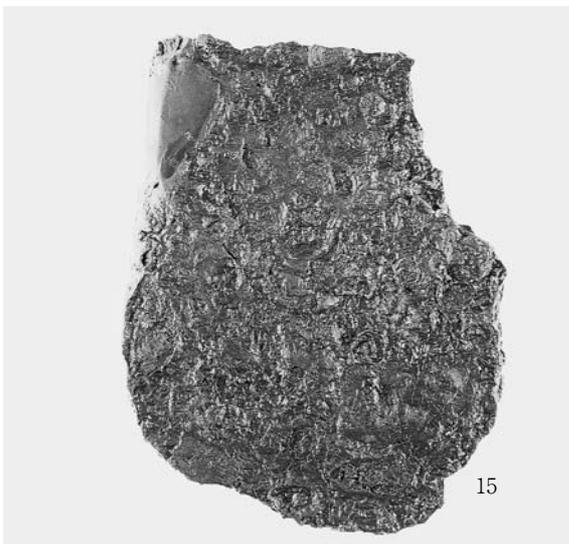
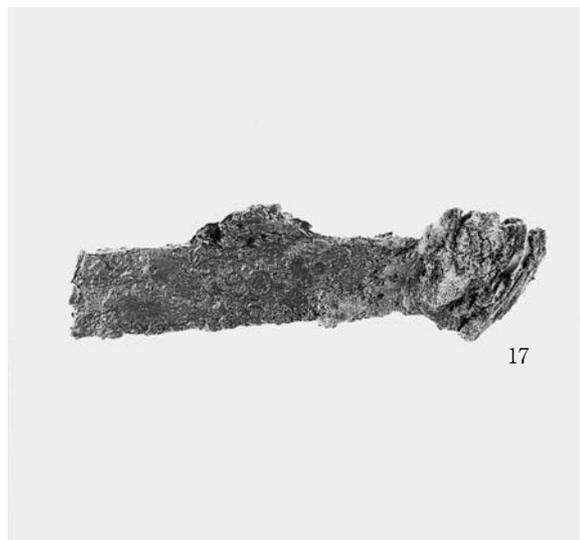
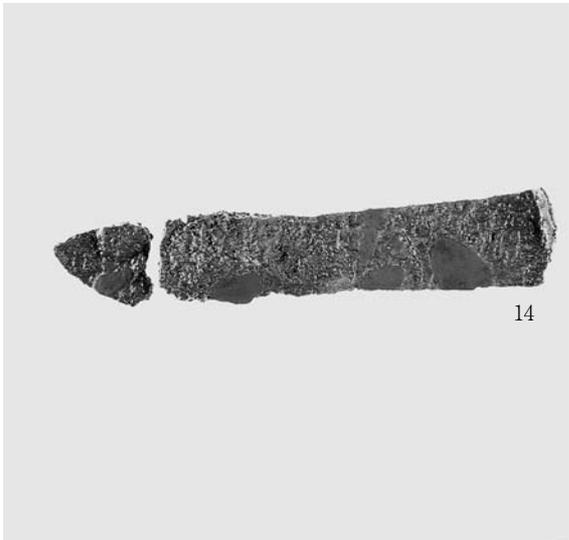
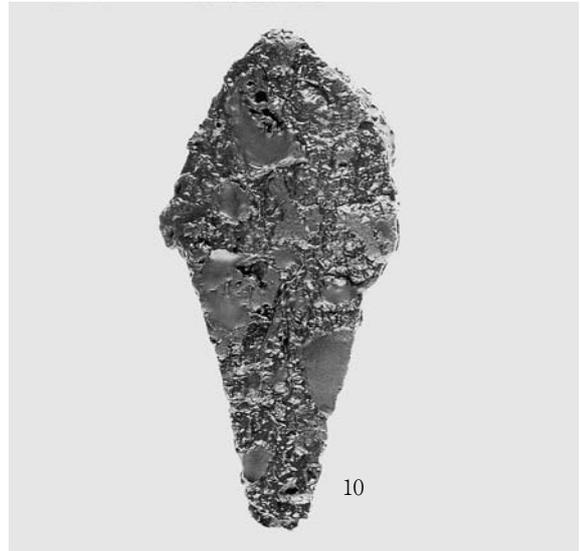
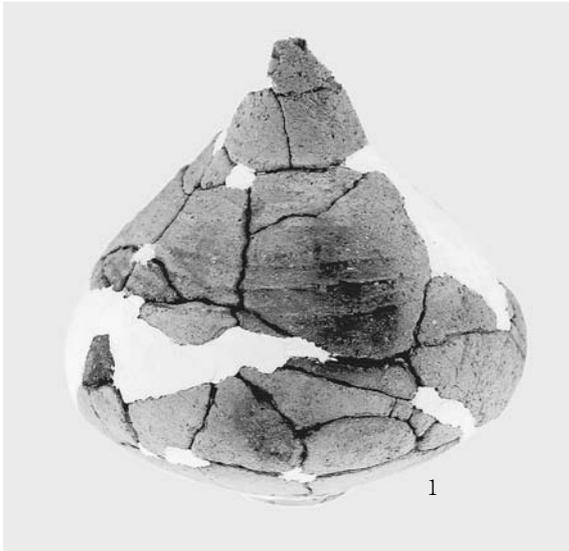
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃5



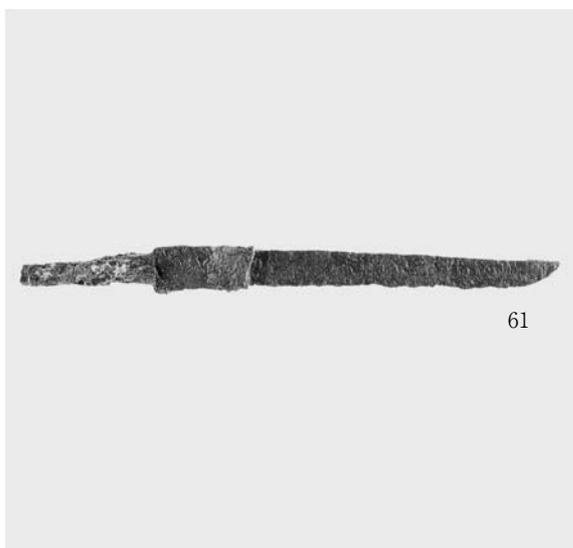
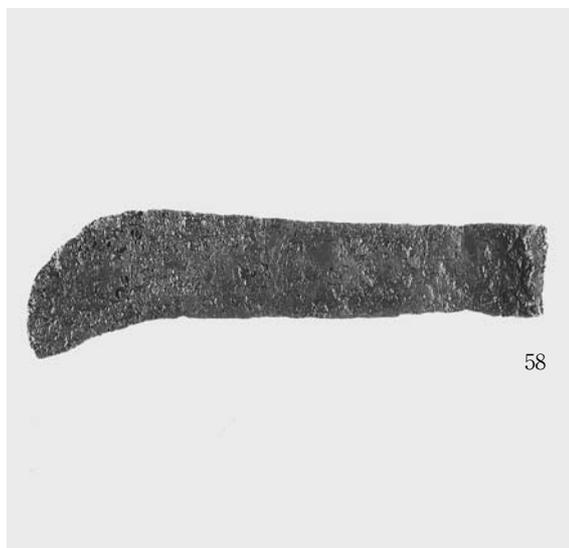
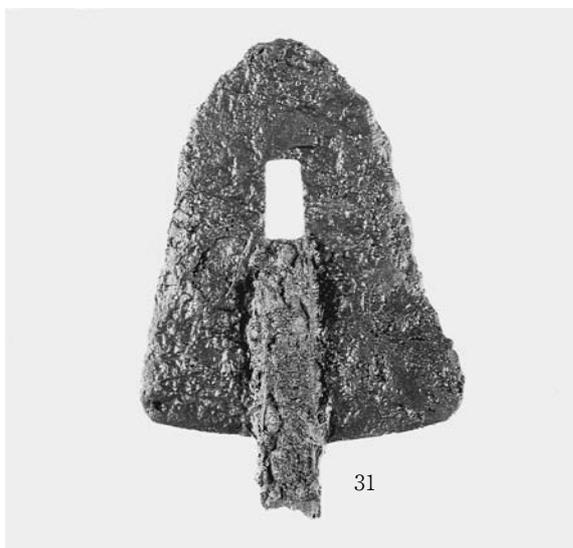
横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃6



横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鏃7, 鉄斧



SK-1 (長畝遺跡) 出土弥生土器 (1), 1号主体部 (長畝2号墳) 出土鉄鏃 (10), 鉄鎌 (14), 刀子 (17), 鉄製鋤・鋤先 (15)



横穴式石室(長畝4号墳)出土鉄鍬(24・30・31), 鉄鎌(58), 刀子(61), 銀耳環(64)



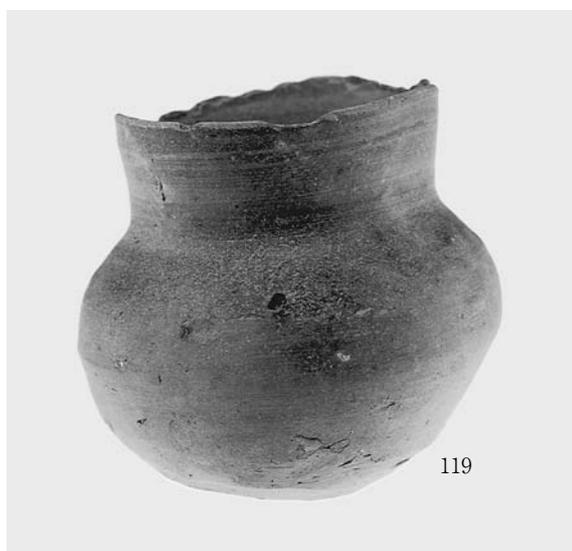
横穴式石室（長畝4号墳）出土須恵器（有蓋高杯）



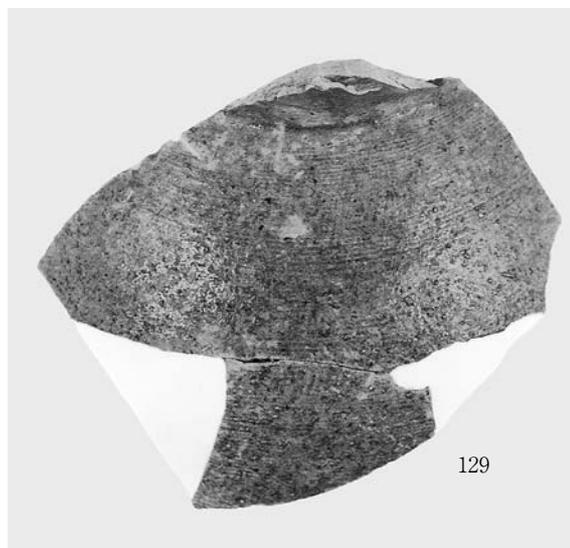
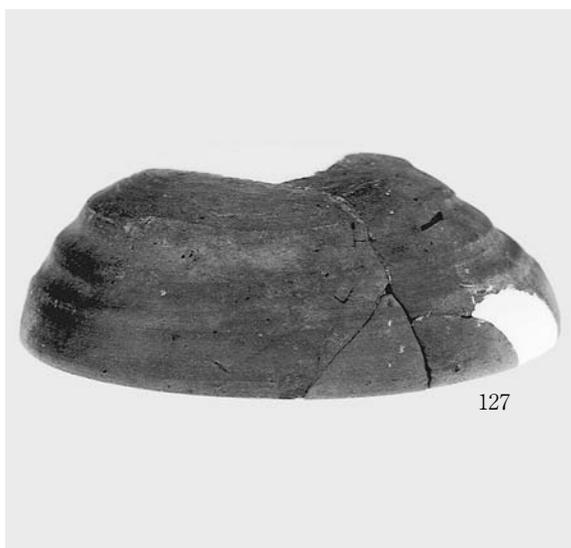
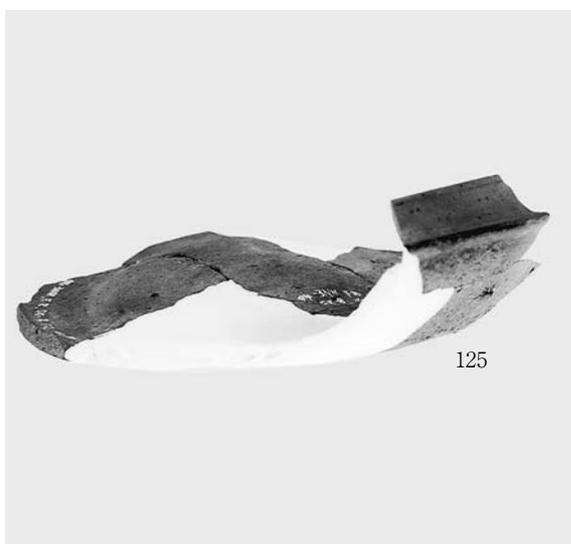
横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(有蓋高杯) 106・107, 108・109, 110・111は副葬時のセット



横穴式石室（長畝4号墳）出土須恵器（有蓋高杯，台付椀）112・113は副葬時のセット，106・114，108・107，110・113，112・111は製作時のセット



横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(短頸壺, 直口壺, 広口壺)



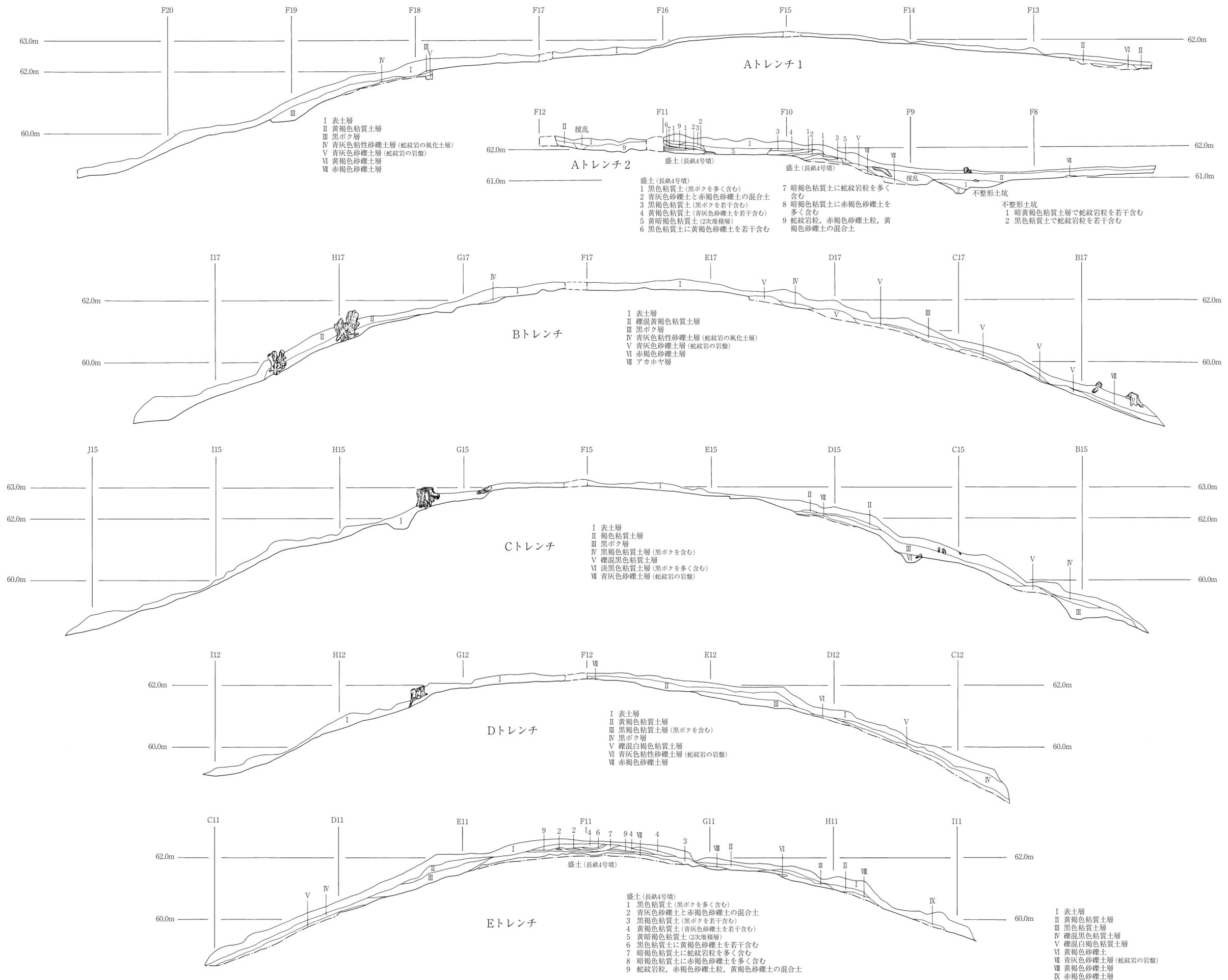
横穴式石室(長畝4号墳)出土須恵器(長頸壺), 長畝4号墳不整形土坑出土須恵器(125), 長畝4号墳墳丘周囲からの出土須恵器(125~127, 129)



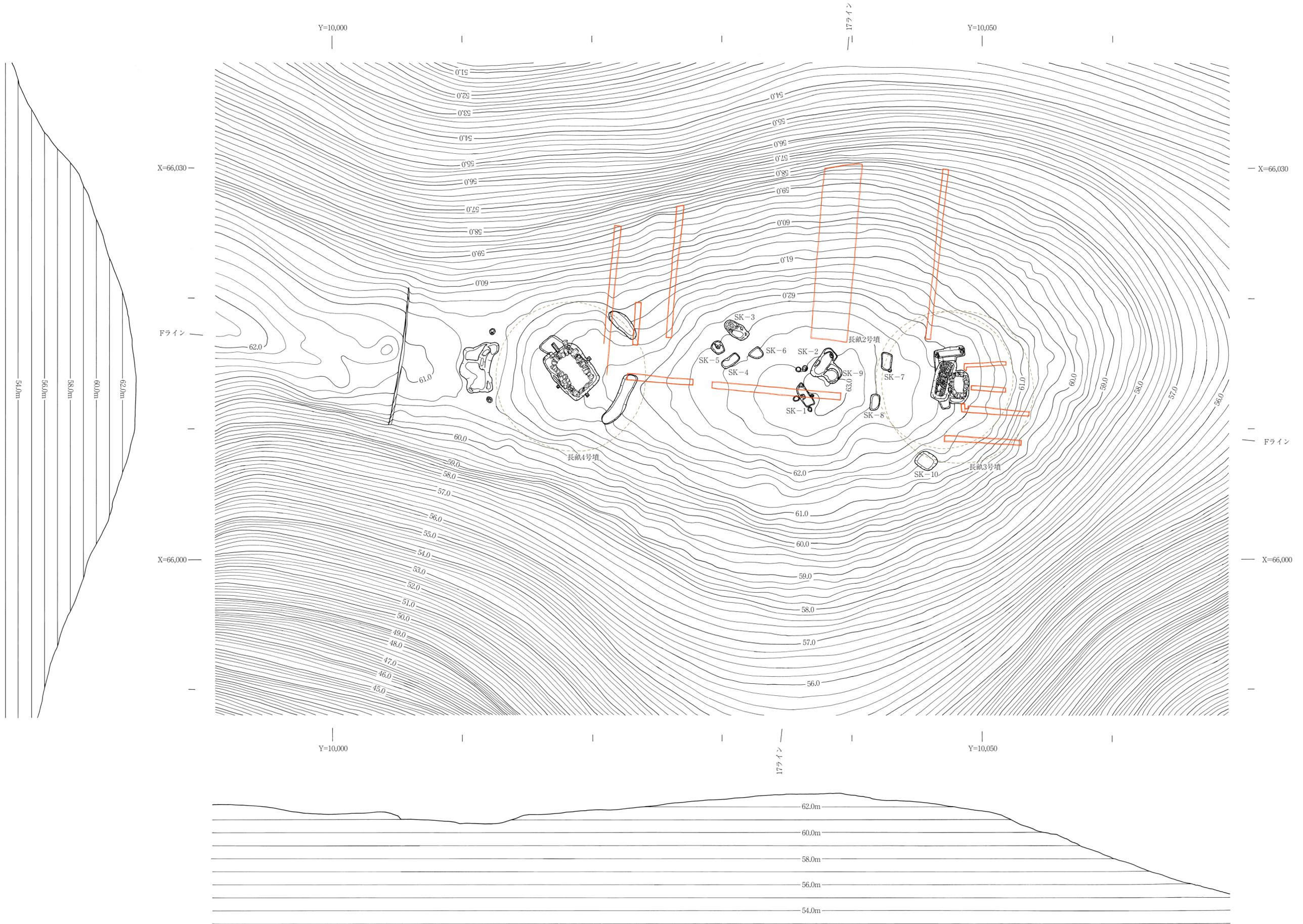
発掘調査に参加された方々

報告書抄録

ふりがな	ながうねいせき・ながうねこふんぐん							
書名	長畝遺跡・長畝古墳群							
副書名	高知自動車道（南国・伊野間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第25集							
編著者名	廣田佳久・池澤俊幸							
編集機関	高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783 高知県南国市篠原南泉1437-1			TEL 0888-64-0671				
発行年月日	西暦 1996年3月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / ''	東経 ° / ' / ''	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながうねいせき 長畝遺跡	こうちけんなんこくし 高知県南国市 おこうちようじょうりんじ 岡豊町定林寺 あざながうね 字長畝	39204	040052	33度 48分 37秒	133度 36分 27秒	確認調査 19930715～ 19930719 本調査 19940106～ 19940307	610m ²	高知自動車道（南国～伊野間）建設に伴う事前の発掘調査
ながうねこふんぐん 長畝古墳群	こうちけんなんこくし 高知県南国市 おこうちようじょうりんじ 岡豊町定林寺 あざながうね 字長畝	39204	040053	33度 48分 34秒	133度 36分 31秒	確認調査 19930720～ 19930722 本調査 19940613～ 19941213	1,600m ²	高知自動車道（南国～伊野間）建設に伴う事前の発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長畝遺跡	墓 その他	弥生時代 中期	土坑墓2基	弥生土器				
長畝古墳群 長畝2号墳 長畝3号墳 長畝4号墳	古墳 その他	古墳時代 4～6世紀	割竹形木棺 1基 竪穴式石室 1基 横穴式石室 1基 その他土坑等	鉄製武具（鉄剣, 鉄鎌）, 鉄製工具（鉄鎌, 鉄製鋤先, 鉄斧, 刀子）, 土師器, 須恵器, 馬具（轡）, 鉄製工具（鉄鎌, 鉄製鋤先, 刀子）, 装飾具（銀耳環, 管玉, 土玉, ガラス小玉, ソロバン玉）		長畝2号墳（県下最古級の前期古墳） 長畝3号墳（県下初の竪穴式石室） 長畝4号墳（県下最古の横穴式石室竪穴系横口式石室の影響がみられる）		



付図1 長畝古墳群土層図 (S=1:80)



付図2 長畝古墳群(長畝2~4号墳)全体図(S=1:200)

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第25集

長畝古墳群

高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う発掘調査報告書

1996

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県南国市南泉1437-1

Tel. 0888-64-0671

印刷 共和印刷株式会社